

をな様—女様娘
御の意

それなら女房衆に讀うで貰うて、この書いた通にすれば、聲入がざつと濟むぞ。▲シテそれは忝うござる。これへ下され。定めて、待ちかねて居られましよ。もはや参りましよ。

▲をしへお行きやるか。さらば。▲二人さらばく。▲をしへようおりやつた。▲シテはあ。なうく嬉しやく。まんまと聲入の様子を習うた。まづ歸つて女共に見せう。是ぢやなうく、女共るさしますか。▲女やあ、こちの人が戻られた。こちの人歸らせられた。

▲シテなかく。今戻つた。誰殿へ行て、聲入の次第を習うて來た。いざ追つ付け聲入せう。即ち、このうちに書いてあるとおしやつたほどに、其方これを持ちて行て先へ行たらば讀ませませ。▲女心得ました。これへおこさしやれ。妾が案内者の爲、さきへ参りましよ。▲シテそれく、行かしませく。なうく、聲入といふものは、人が見たがるもので、垣からも窓からも、目ばかりぢやと云ふ。晴がましいことであらう。▲女如何にもさうでござる。はや是でござる。此方のござつた様子を申しましよ。それにござれ。▲シテ心得た。さうおしやれ。▲女ものも。父様内にござるか。▲冠者やあ、をな様でござるか。ようござりました。御出なされた通申しましよ。▲女そのとほり申せ。▲冠者申し、をな様の御出なされました。▲女父様、参りました。▲しうとをなか。よう來た。▲女けふはこちの人の参られました。▲しうと聲殿のござつたか。太郎冠者、こちへ通らせられいと云へ。▲冠者畏つてござる。申し、此方へお通りなされませと申されます。▲シテ心得た。追つ付けそれへ参らう。身共は今まで袴を著たことが無いによつて、何とするものやら知らぬ。どう著るものぢやまで。これではこゝにも一つ餘つてある。こちらは何とする所ぞ。▲しうとやいく、太郎冠者、聲殿は何をしてござる。早うござれと申せ。▲冠者畏つてござる。申し、何をなされてござる。早う御出なされと申します。▲シテ追つ付けそれへ参るとおしやれ。▲冠者畏つてござる。早これへ御出なされうと仰せられます。▲シテいやく、これでもこれが餘る。どう著るものぢやぞ。初對面でござる。早々参ります咎でござるを、何かと致し、遅なりました。その段は、をなに免じて御免なれ。▲しうと少も苦しうござらぬ。好うこそ今日は御出なされた。やいく、太郎冠

ざるか。ようござりました。御出なされた通申しましよ。▲女そのとほり申せ。▲冠者申し、をな様の御出なされました。▲女父様、参りました。▲しうとをなか。よう來た。▲女けふはこちの人の参られました。▲しうと聲殿のござつたか。太郎冠者、こちへ通らせられいと云へ。▲冠者畏つてござる。申し、此方へお通りなされませと申されます。▲シテ心得た。追つ付けそれへ参らう。身共は今まで袴を著たことが無いによつて、何とするものやら知らぬ。どう著るものぢやまで。これではこゝにも一つ餘つてある。こちらは何とする所ぞ。▲しうとやいく、太郎冠者、聲殿は何をしてござる。早うござれと申せ。▲冠者畏つてござる。申し、何をなされてござる。早う御出なされと申します。▲シテ追つ付けそれへ参るとおしやれ。▲冠者畏つてござる。早これへ御出なされうと仰せられます。▲シテいやく、これでもこれが餘る。どう著るものぢやぞ。初對面でござる。早々参ります咎でござるを、何かと致し、遅なりました。その段は、をなに免じて御免なれ。▲しうと少も苦しうござらぬ。好うこそ今日は御出なされた。やいく、太郎冠

いばらさかも木の
様な酒一刺
逆茂木の如く刺
すやうによくき
く酒の意なるべ
し

庖丁料理

者、盃を出せ。▲冠者畏つてござる。▲しうとさらば、掣殿から参れ。▲シテいやく、ま
づ舅殿から参つて下され。▲しうとそれなら、たべて進ぜう。太郎冠者、酌をせい。▲冠者畏
つてござる。▲しうとさらば、この盃を掣殿へさしませよ。▲シテ戴きませよ。扱もく、よ
い酒でござる。▲しうと氣に入つたさうな。も一つ進ぜ。▲シテそれなら、も一つたべまし
よ。飲めば飲むほどよい酒でござる。そのまよいばらさかも木の様な酒でござる。祝う
て三獻たべませよ。舅殿、をなも此中は、どうやら氣色がわるいと云うて、只梅漬ばか
り食はれます。さらば、この盃を舅殿へさしませよ。もはや納になされ。▲しうともはや
参らぬか。それなら納めませよ。太郎冠者、とれ。やいく、太郎冠者、汝に言ひつけて
おいた物出せ。▲冠者畏つてござる。▲しうとなうく、掣殿、この所の大法で、初めての掣
殿には、庖丁の手元を見ます。掣殿にも一手なされ。▲シテ如何にも心得ました。されば
こそ、彼の作法はこれぢや。をなく、こよへをりやれく。▲女何事でござるぞ。▲シテさ
あく、むづかしうなつた。今の書いた物讀うで見やれ。▲女心得ました。何々、相撲の

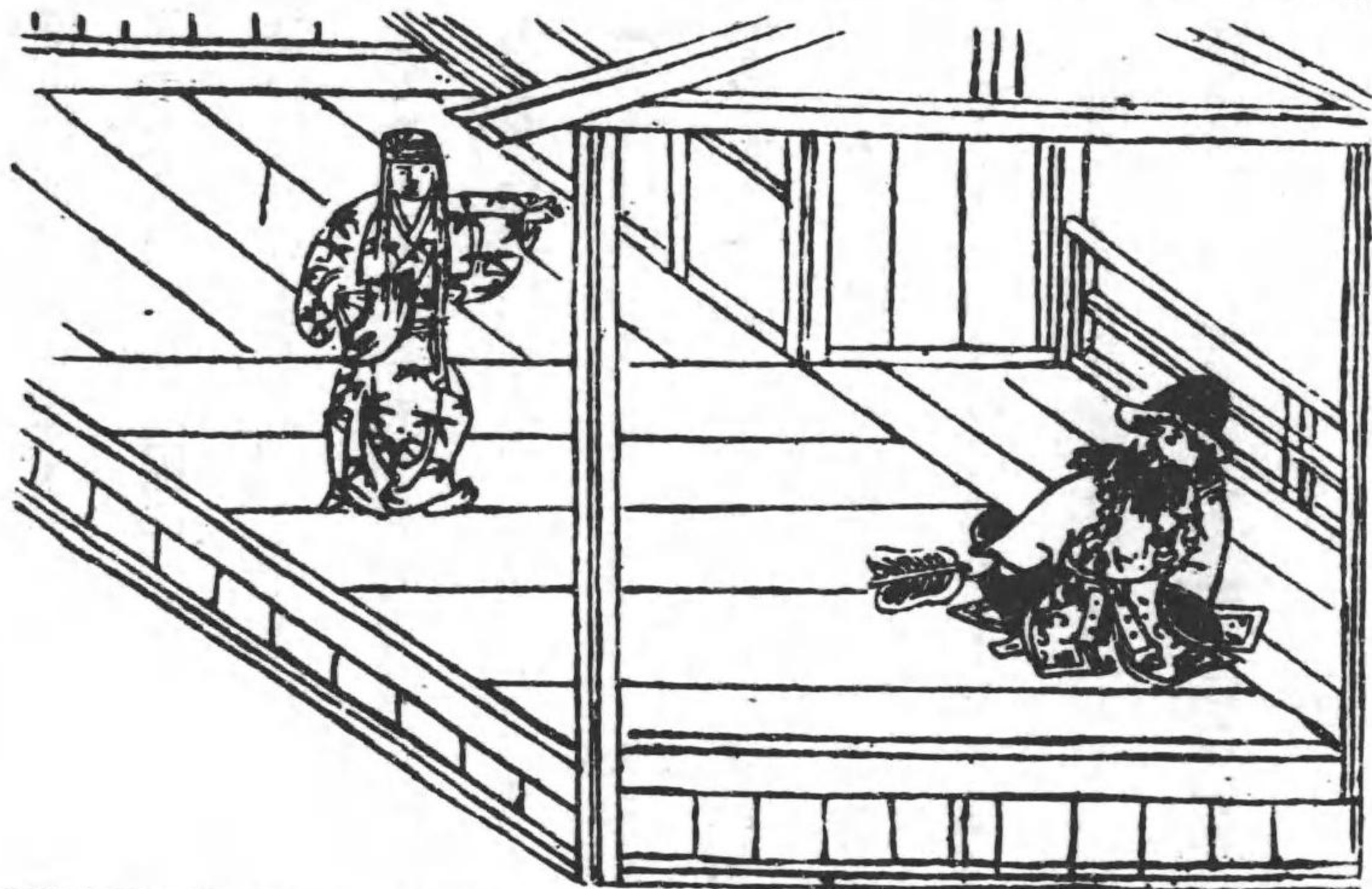
書のこと。まづ一番に烏帽子を脱ぐべし。▲シテ心得た。烏帽子脱いだ。さて何とある。
▲女その次に上下小袖脱ぐべし。▲シテ何と、上下をぬぐか。なうく、嬉しやく。早う脱
がう。扱々窮屈にあつたが、嬉しやく。さあその次を讀ましめ。▲女さて、真中へ出で
力足を踏みて、相手あらば一番取るべし。▲シテ心得た。相撲は身共が好きぢや。取らう
ともく。▲しうとやいく、太郎冠者、掣殿は律義な人と聞いた。定めて誰ぞなぶつて、
あの様に教へておこしたものであらう。さりながら、身共も相手にならずは、舅はもの
知らずぢやと云はれう。一番取らう程に、笑ふな。▲冠者畏つてござる。▲しうとさあく、
是へ来て身拵させい。▲冠者心得ました。▲しうとさあく。太郎冠者行司せい。▲冠者畏つ
てござる。お手つ。▲一人やあくく。▲女なうく、悲しやく。こちの人と父
様と喧嘩が出来た。何とせうぞ。▲シテやいく。な。足を取れく。▲女心得ました。
▲シテ是は己が足ぢや。身共をこかしたら、内へよせぬぞ。▲女心得ました。▲シテおてつ。
勝つたぞく。こちへをりやれく。▲女なうく、父様、祭には來ませうぞ。▲しうとあの

いたづら者め。親をこの様にして 何の祭よばうぞ。やるまいぞく。

茶盞拜—原本茶
盃拜とあり

縁につるれば云
—縁に縁につ
るれば唐土の物
を食ふと云ふ遠
邊の唐土に轉訛
せしなりとぞ

よまひごと—獨
ぶつ—云よこ
と



六 茶 盞 拜

三人

シテ 唐人輕衫、唐人笠、扇持
アド 小袖、薄びなん
教手 長上下、小き刀、扇持

▲女 妾は、この邊の者でござる。まことに縁につ
るれば唐の物でござる。妾が夫は茶盞拜と申して、
唐人でござる。こゝ許に、親類とは無い人でご
ざるによつて、朝夕妾が馳走いたし、随分ねんご
ろに致します。何と致したことでござるやら、常
常よまひごとばかりを云うて、涙をこぼし、泣き
泣き致されます。妾も久々馴染みましたによつて、
大方唐言葉も合點いたしますが、このよまひごと

は、如何様のことやら。何とも合點が参りませぬ。それにつき、こゝに私の存じたお方に、物議がござる程に、今日はこれへ参り、この様子を尋ねて参らうと存じます。まづ急いで参りましょ。まことに縁と申しながら、唐人と夫婦になると云ふは、不思議なことでござる。やあ、参る程にこれにござる。ものも、御宿にござりますか。▲ものしりやあ、表に案内がある。何方でござる。やあ、わごりよか。これは何と申うてをりやつたぞ。▲女されば、その事でござる。久しう御見舞申しませぬども、又妾が用があれば参りましてござる。妾が男のちやさんはいを御存じでござりましょ。▲もの成程存じたが、息災なか。▲女如何にも、息災にはござりますが、つきましては、何とも合點の参らぬ事がござつて、此方へ尋ねに参りました。▲ものそれは何事でをりやる。▲女さればでござる。唯明暮何やらよまひ言ばかり云うて、涙を流して泣き泣き致されます。▲ものして、そのよまひ言には何を云ふぞ。覺はないか。▲女なるほど、覺えて居ります。日本人無心自我唐國妻戀と云うて、泣き泣き召されます。よい事でござるやら、又悪い事でござるやら、

存じませぬ。様子を云うて聞かしてくだされませぬなら、忝うござりましょ。▲もの何と、日本人無心自我唐國妻戀と云うて泣くか。▲女なかなく、さやうでござる。▲ものこれは知れたことぢや。歌に直して見れば、日の本の人の心のなかりせば、我からこくの妻を戀ひしきと、云ふことぢや。つねなく、其方がつらう當るによつて、唐國の妻が戀しいと云ふことでをりやるわ。▲女なうく、腹立やく。妾が唐人ちやと思つて、常々ねんごろに致しますに、まだ唐の女が戀しいとは、なう、腹立やく。▲ものこれく、その様に腹を立ちやるな。只氣に入る様にして、いよくねんごろにしやれ。腹を立つる心なら、云うて聞かすまいもの。▲女これは私が誤りました。それなら、腹を立てますまい。さりながら、まだござります。▲ものそれは、何事でをりやる。▲女泣きましたあとには、茶盞拜々々と云うて、みなきくめされます。▲ものそれも、なるほど知れた事ぢや。常々よい茶酒も飲まいで、悲しいと云ふことぢや程に、随分今から酒肴も調へ、馳走さしましょ。▲女なるほど、心得ました。もはや歸りましょ。▲ものお行きやるか。さらば

みなきくー見泣きくか

唐の東一下三字
刊本不明

おませう一差上
げやう

さらば。ようをりやつた。▲女はあ、忝うござる。なうく、嬉しやく。如何様の事ぞ
と思ひました程に、歸られたら、酒肴拵へておいて、馳走いたしましたよ。何かと云ふ
中に、歸りました。茶盞拜の戻られますを待ちましょ。▲シテ唐の東□□日本地に住
めるなり。詞これは、唐土茶盞拜と申す者でござる。我十ヶ年以前に日本へ捕へれ、箱
崎の浦に住居せり。日本人無心自我唐國妻戀々々。▲女なうく、腹立やく。今まで
こそ知らなんだれ。それは妾も合點ぢや。これほど馳走するに、まだ唐の女が戀しいか。
腹だちやく。▲シテ茶盞拜々々々。▲女なうく、それは尙合點ぢや。よい酒茶が飲みたい
と云ふことであらう。今日は其方におませうと思つて、酒肴を調へておいた。まづ下に
ゐて、一つ飲ましませ。さあ、この盃で飲まませ。▲シテうらிரいやうすうらん。
▲女さうでござる。一つ参れ。▲シテはとあふうれいらしや。▲女如何にも、よい酒を調へ
て置きました。氣に入つたら、も一つ重ねさせられ。▲シテちんふんちやは。▲女妾にさ
させらるよか、戴きましょ。妾も一つ飲みました。又、此方へさしましょ。▲シテさるま

にやちやりさそ。▲女なかく、参れ。▲シテすうらいかほちや。▲女何とおしやるぞ。
受持つた程に、妾に肴をせい。小舞をまへとおしやるか。▲シテしやがとくりんらい。▲女
なるほど舞ひましょ。とかく此方の機嫌さへよければ、嬉しうござる。▲女舞論あはれ、一
枝を花の袖に手折りて、月をもともに詠めばやの望は残り。この春の望残り。▲シテ
さらはにやまにはるちやそ。▲女また妾たべましょ。▲シテどんしやちやそ。▲女それなら
も一つたべましょ。過ぎましょか知らぬ。なう茶盞拜殿。此方のいつも機嫌のよい時は、
唐人の小歌を唄はせらるよ。妾もうけ持ちました肴に、小歌を唄はせられ。わけは知ら
ねども、聞きましょ。▲シテちうらいどんまんきん。▲女それは、面白ござらう。論はせ
られく。▲シテすうらんどんにこいてう、ぶゆがなんつるほろけ、なんかんこいもん
かんごい、せつば。せいやらてう、おたら。▲女扱もく、わけは知らねど面白ござ
る。さあく、も一つ参れ。▲シテさらはにやしやりはらい。▲女いやく、是非とも参
れく。それなら妾をさめましょ。なうく茶盞拜殿。唐土には、樂を舞うて樂しむと

聞いてござる。此方も樂を舞うて見せさせられ。▲シテふうれいらしやてうらんすう。▲女何と、舞うて見せう。さあく、舞はせられく。▲シテ舞樂を奏して舞ひ遊ぶ。日本人無心自我唐國妻戀。▲女なうく、腹だちやく。これほどにねんごろにして馳走するに、まだ唐の女の事云ふか、腹だちやく。▲シテらいれうちやるやそまかはん。▲女何の、許せとは。もはや堪忍がならぬ。こよには置かぬぞ。出てゆけく。腹だちやく。

七人馬

三人 シテ 烏帽子、素襖、小き刀
 アド 二人、半上下、腰帶

▲シテこの邊に隠れない大名。某の召使ふ者は只一人でござる。殊の外一人では不自由で、使ひ足らぬ。新座者を抱へうと存ずる。まづ、太郎冠者に申し付けう。やい／＼太郎冠者、あるかやい。▲冠者はあ、お前に居ります。▲シテ念なう早かつた。汝呼び出すは、別の事でない。汝一人では人が使ひ足らぬほどに、今一人抱へうと思ふ程に、そちは上下の海道へ行て、よささうな者を抱へてこい。▲冠者畏つてござる。▲シテもはや行くか。▲冠者かう参ります。▲シテ聽て戻れ。▲冠者はあ。▲シテえい。▲冠者はあ。やれく、俄な事を仰せつけられた。まづ街道へ参り、何者ぞよささうな者が通らば、抱へて参らう。まことに只今までは、某一人で殊の外苦勞を致したが、新座が参つたら、身共もちと休息いたさうと存ずる。参るほどに、これぢや。この所に待つて居やうと存ずる。▲東國罷出

でたる者は、東國方の者でござる。この度思ひ立ち、都へ上り、こよかしこをも見物致し、又よささうな所があらば、奉公をも致さうと存する。まづ、そろくくと参らう。皆人の仰せらるゝは、若い時に旅をせねば、老いて物語が無いと仰せらるゝにより、俄に思ひ立つてござる。▲冠者されば、これへよささうな者が参つた。なうく、これく。▲東こちの事か。何事でござるぞ。▲冠者なるほど其方の事ぢや。近頃聊爾な申し事ぢやが、若し其方は奉公の望ではないか。▲東なかく、私は奉公が望で上方へ上ります。▲冠者それは幸の事ぢや。某が頼うだお方は御大名ぢや。これへ肝入りて申し出さうぞ。▲東それは忝うござる。御肝入りされて下され。▲冠者何と、只今でもをりやらうか。▲東参ります。▲冠者まことに。かりそめに詞を掛けて同道するは、よい縁でをりやる。▲東袖の振合ふも他生の縁とは、かやうのことでござらう。▲冠者やあ、何かと云ふ中に、これぢや。まづそれに待たしませ。▲東心得ました。▲冠者申し、頼うだお方、ござりますか。▲シテやあ、太郎冠者が戻つたさうな。太郎冠者、戻つたかく。▲冠者ござりますか。▲シテえ

い、戻つたか。▲冠者只今歸りました。▲シテ何とく、新座の者を抱へて来たか。▲冠者如何にも、抱へて参りました。▲シテ出かしたく。どこ許に置いた。▲冠者御門外に待たして置きました。▲シテ初あることが終あると。彼奴が聞く様にくわを云はう。汝は數多に答へ。▲冠者畏つてござる。▲シテやいく、太郎冠者居るか。▲冠者はあ。▲シテ床几をくれい。▲冠者はあ、お床几でござる。▲シテ何と、今の聲を聞かうか。▲冠者なかく、承りましょ。▲シテそれならあれへ行て、頼うだもの只今廣間へ出られた。あれへ出て目見えをせい、お目に入つたら、當座に御見参である。又お目も参らすは、五三日も逗留があらうと云うて、汝が云ふ分でこれへ出せ。▲冠者畏つてござる。なうく、をりやるか。▲東これに居ります。▲冠者頼うだお方、只今廣間へ出られた。あれへ出て目見えをめされ。御目がるたら、當座に御見参である。御目も参らすは、五三日も逗留が参らう。さあさあ、お出やれ。▲東心得ました。▲シテやい、太郎冠者、居るか。▲冠者はあ。▲シテ今日はよい天氣ぢやなあ。▲冠者さやうでござります。▲シテ暮がよかる。暮に及うだら、若い衆

が鞆たづを遊あそばさう。かよりへ水みづを打うたせておけ。▲冠者かんしやはあ。▲シテしえい。▲冠者かんしや新座しんざの者ものでござる。▲シテし彼奴きゃんめか。▲冠者かんしやあれでござる。▲シテしとつと利根りこんさうな奴やつぢや。さりながら、見掛みかけと違ちがうて鈍どんな奴やつがある。彼奴きゃんに何も藝げいはないか。問とうて来こい。▲冠者かんしや畏かしこまつてござる。なうく、其方そなたに何も藝げいは無ないかと仰おほせらるよ。▲東あづまいや、私わたくしは何も藝げいはござらぬ。▲冠者かんしやそれは氣きの毒どくぢや。何なりとも藝げいがあれば、抱かかへさせらるよが、何も無ないか。思おもひ出して見みやれ。▲東あづまいやく、何もござらぬが、若もしこれも藝げいになりましょか。▲冠者かんしや何なにでをりやる。▲東あづま人を馬うまにすることをえてるます。▲冠者かんしやこれは變かはつたことぢや。その通とほり申まをさう。申まをしますは、何も藝げいはござらぬが、人を馬うまにすることを得えてゐると申まをします。▲シテし何なにぢや。人を馬うまにすると云いふか。▲冠者かんしやなかく。▲シテしこれは珍めづらしい藝げいぢや。急いそいでして見みせいと云いうて、これへ出だせ。▲冠者かんしや畏かしこまつてござる。さあくこれへ出だて、急いそいで馬うまにして見みしやれ。▲東あづま畏かしこまつてござる。どなたなりとも、お人を下くだされませ。▲シテしされば、誰たれを馬うまにせうぞ。誰たれ彼かれと云いうても人ひとがない。太郎冠者たろうかんしや馬うまになれ。▲冠者かんしやこれは迷めい惑わくなことござ

る。私わたくしも久々ひさびさ御奉公ごほうこう致いたしました。もはや御取立ごとりだてに預あづかり、侍さむらいにもならうと存ぞんじます處ところに、馬うまになつてよいものでござるか。これは御免ごめんされませ。▲シテしはて扱あつか、主しゆの爲ためには命いのちさへ棄すつる。急いそいで馬うまになれ。悪わるうは使つかうまいぞ。▲冠者かんしやさやうに御意ごいなさるれば、是非ぜいひもござらぬ。なりませうか。扱あつかもく迷めい惑わくな事ことかな。なうく、其方そなたもまた藝能げいのうこそ多おほいに、馬うまを人ひとにしてこそよかるけれ、人を馬うまにすると云いふ事ことがあるものか。身共みどもが馬うまになつたらば、其方そなた口取くちどりをするであらう。必かならず重おもい物ものを負おほせてたもるな。馬屋うまやに獨居ひとりるたらば寂さびしからう。どれぞ腰元こしもと衆しゆうの中うちを一人馬ひとりうまにして、身共みどもが側そばに置おいてたもれ。そのうち駒こまでも出でくれば、頼たのうだ人の爲ためでをりやる。頼たのむぞ。▲東あづま如何いかにも、氣遣きつかひめ召めさるな。身共みどもが悪わるうは致いたすまいぞ。▲シテしさあく、早はやう馬うまにせい。▲東あづま畏かしこまつてござる。これへ出だやれ。▲東あづま毛詞もうしいでく馬うまになさんとて、まづ楊梅やまももの皮かわを水みづにてとき、顔かほにぬれば、顔かほより馬うまにぞなつたりける。▲シテしはあ、まことに顔かほから馬うまになつたわく。さあく、皆みなどこも馬うまにして見みせい。▲東あづま畏かしこまつてござる。今度こんどは手足てあしも皆馬みなうまに致いたしましよ。手綱たづなを拵こしらへ、乗のる用意よういを

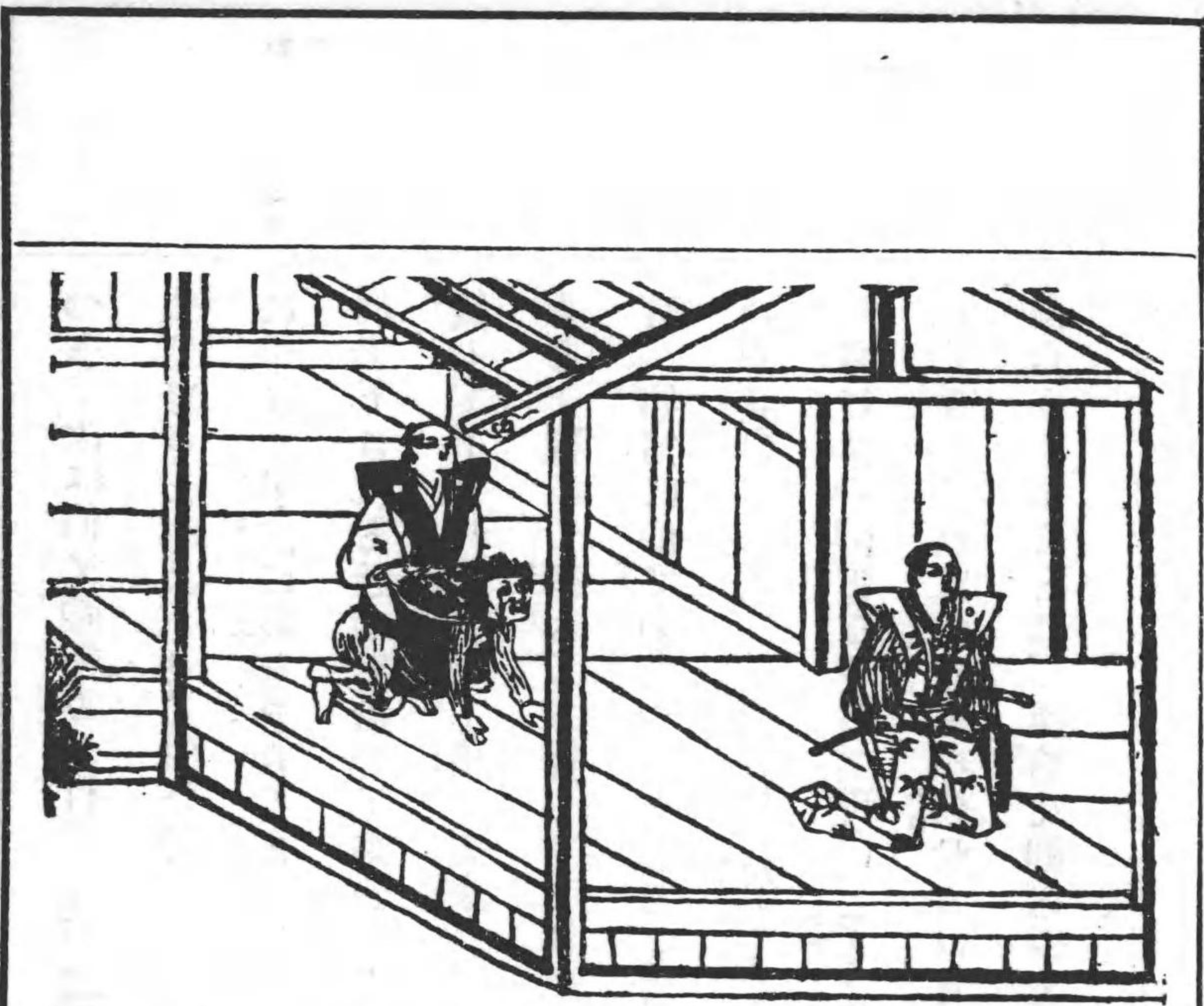
なされ。▲シテ心得たく。▲東色あづまいろ 尙々馬なまになさんとて、陳皮乾薑ちんぴかんきやう色々の、加薬かやくを取りかへく塗りけれど、馬なまには更さらにならざりけり。▲東逃あづまにがへシテ どうくく。▲冠者かむか申し、私わたくしでござる。▲シテ 太郎冠者たろうかむかか。▲冠者かむかなか。▲シテ 最前さいぜんの奴やつは、たらしめぢや。逃にがすな。やれ逃にがぐるわ。やるまいぞくく。

師したらしめ—詐偽しやゐ

八 止動方覺

四人 主、伯父、二人長袴、小さ刀
馬 輕衫、黒頭、ばせん

▲主しゅこれはこの邊あたりに隠かくれない者ものでござる。此中このちゆうの方ほう方に御參會ごさんくわいは、夥おびただしい事ことでござる。又今日またけふは、山やま一つあなたへ茶ちやの湯ゆに參まゐる。それにつき、太郎冠たろうかむか者ものを呼びだし、申しつくることことがござる。やいやい、太郎冠たろうかむか者もの、あるかやい。▲シテはあ、御前おまへに居ゐります。▲主しゅ念ねんなう早はやかつた。汝なんぢを呼び出す事こと、別べつの事ことでない。今日けふは山やま一つ彼方あなたに各おのづか立ち寄より、茶ちやの會くわいがある。これへ參まゐらねばならぬが、それに



わたし一磯茶壺のこと

つき、汝は伯父御の方へ行て、借る物がある。借つて来い。▲シテ畏つてござる。何を借つて参りましよ。▲主あれへ参り云はうは、今日は山一つ彼方へ茶の湯に参ります。それにつき 手前に茶をきりました。御無心ながら極上一袋わたしに入れて、お貸しなされて下されと云うて借つて来い。▲シテ畏つてござる。▲主又、各馬上でござる。御馬も貸して下されと云うて借つて来い。▲シテ心得ました。▲主まだある。何れも太刀を持たせらるゝ程に、御太刀も貸して下されと云うて借つて来い。▲シテ畏つてござる。さりながら、如何に伯父御ぢやと申して、その如く様々の物を貸さうとは仰せられまい。▲主いや、苦しうない。追つ付け戻しましよと云うて借つて来い。▲シテ畏つてござる。▲主追つ付けはや御出なさるゝ程に、早う行て来い。▲シテ心得ました。▲主えい。▲シテはあ。やれく、これは急な事を仰せつけられた。さりながら、借りに参らざるはなるまい。急いで参らう。まことに、扱伯父御ぢやと云うて、この如くに、様々の物を貸さうとは仰せられまい。日頃頼うだ人が不嗜によつて、かやうの時、迷惑致さるゝことぢや。やあ、

重代一家傳の物

何かと申す中に、これぢや。ものもう。案内も。▲をぢ表に案内がある。どなたでござる。えい、太郎冠者か。ようこそ来たれ。只今は何と思つて来たぞ。▲シテその儀でござります。頼うだる方より、お使に参りました。今日、山一つあなたへ、各茶の湯の會がござる。是へ、頼うだ人も参られます。打節茶が切れて、ござりませぬ。此方の御茶を一袋わたしに入れて、お貸しなされて下されませいと、申しておこされました。▲をぢ如何にも安い事ぢや。幸挽かせておいた。貸してやらう。それに待て。▲シテそれは忝うござります。▲をぢこれく、太郎冠者、わたしに入れて貸すほどに、損はぬ様にして、役に立てたら戻しやれと云へ。▲シテ畏つてござる。まだござります。各太刀を持たせられます程に、お太刀もお貸しなされて下されませ。▲をぢ何と、各が太刀を持たせらるゝ。それなら持たせいでなるまい。貸してやる。さりながら、この度は貸してやる。侍の、太刀を持たぬと云ふことはないことぢや。拵やれと云へ。▲シテ畏つてござる。▲をぢこりやく、これは重代なれど貸すほどに、損はぬ様にして戻しやれと云へ。▲シテ畏つてご

とつて出る一跳
ね出す也

ざる。まだござります。▲をぎそれは何ぢや。▲シテいづれも馬上でござります。とても
ことに、御馬も借つて参れと申されました。▲をぎなるほど尤ぢや。これも貸してやる。
こりやく、この馬を貸してやる。引いて歸れ。▲シテこれは、久しう見ませぬ中に、遅
しうなりました。定めて待ちかねて居られましよ。追つ付け歸りましよ。色々の物をお
貸しなされて下されて、忝うござります。もはやかう参ります。▲をぎやあ、その馬に
はちと癖があるわ。▲シテそれは如何様の癖でござる。▲をぎされば、その馬の後で咳拂す
れば、必ずとつて出るほどに、さう心得。▲シテそれは氣の毒にござる。私は承りまし
た。致しますまいが、さりながら、道で人などが致したら、何共氣の毒でござる。▲をぎ尤
ぢや。さりながら、その時は馬の鎖る文がある。教へてやらう。寂蓮童子、六萬菩薩、
鎖り給へ、止動方覺々々々と云へば、その儘鎖るわ。▲シテ是は調法な事でござる。覺
えましてござる。もはやかう参ります。▲をぎ行くか。用に立てたら早く戻せ。▲シテ畏つ
てござる。▲をぎよう來た。▲シテはあ。なうく嬉しやく。まんまと借り濟した。急い

ひつそつて一引
探ひて也

で歸らう。扱もく、結構なお方ぢや。残らずお貸しなされて下さつた。よい伯父御ぢ
や。▲主太郎冠者めは何をして居る知らぬ。遅い事かな。もはや何れも御出なされた。
扱もく、憎い奴かな。▲主やい、其所な奴。おのれは今まで何をして居つた。各早御
出なされて、身共ばかりぢや。扱もく、憎い奴ぢや。▲シテ此方は聞えませぬ。この様
様の物を、色々と云うて借つて参つたに、まだ其様なこと仰せらるゝか。聞えませぬ。
▲主何をぬかし居る。おのれは又酒がな食うて、口をきいて居つたものである。こちへお
くしをろ。その壺も太刀も持つて、早ううせい。▲シテ扱もく、聞えぬこと云はるゝ。
これほど色々の物を借つて参つたに、よう借つて來た、出かしたは云はいで、腹を立て
らるゝ。▲主やい、其所な奴。おのれは其所に何をして居る。早ううせぬか。馬にひ
つそつてうせい。▲シテあ、心得ました。▲主これは如何なこと。ひつそつてと云へば、負
はれかゝるやうにし居る。後からうせい。▲シテ心得ました。▲主これはく、後からと云
へば、何をして居るやら、はてる事ではない。先へうせう。▲シテ心得ました。▲主やい

えへんく〜咳
拂をして落馬せ
しむ

やい〜。先へうせいと云へば、分量もなう早ううせをる。扱も〜、憎い奴ぢや。何
 のれ歸つて何とするぞ。待てよ。▲シテこれは如何な事。さきへ行けば行くとおしやる。
 後から行けばさがるとおしやる。憎さも憎し、落してくれう。思付けた。えへんく〜、
 ▲シテ 寂蓮童子、六萬菩薩、鎮り給へ、止動方覺々々々々。申し〜、何となされました。
 痛みますか。それへ参りたうござれど、御馬を乗り鎮めて居ります。もはや鎮りました。
 御馬に召しませ。▲主 扱も〜、悪い馬かな。したよか腰をうつた。もはや乗るまい。徒
 歩で行かう。汝乗つて来い。▲シテ いや勿體ない。私は乗られますまい。其上私が乗りま
 して、此壺からお太刀を持つて、口の剛いこの馬には乗られますまい。此方召しませ。
 ▲主 いや〜、乗る事は厭ぢや。それなら是非に及ばぬ。その太刀や壺は身共が持たう。
 汝乗つて来い。▲シテ さやうにござらば、乗りましようか。▲主 さあ〜、乗れ〜。身共が
 持つて行くぞ。▲シテ 御免されませ。乗ります。▲主 乗れ〜。ゆるすぞ。▲シテ 申し〜、
 この如くにして参りますを、人が見ましては、此方を下人で、私が主かと存じましよう。▲主

のし切つて〜遠
慮なく思ひ切つ
て

如何様、知らぬ人が見たらばさう思ふである。▲シテ それにつきまして、ちと此方へ申
 し上げたい事がござります。▲主 それは何事ぢや。▲シテ まづ私も、後々はお取立に預りま
 して、立身いたしましたらば、定めて馬に乗ることもござりましよう。▲主 それ〜。▲シテ
 その時には、人も使ひまするでござる。俄に使ひつけも致さいで、使ふも不調法にござ
 る。その時の爲でござる程に、只今此方を下人にして、いや、もはやおきましよう〜。
 御免されませ。▲主 いかにも聞き届けた。今度そちが立身にして、人を使ふ時の稽古に、
 今身共を内の者にして、使うて見たいと云ふ事か。▲シテ いや〜、左様ではござりませ
 ぬ。御免されませ〜。▲主 いや〜苦しい。よかる。許すぞ〜。さあ〜、呼ぶ
 で見よ〜。▲シテ 何と、御免されますか。▲主 なかく〜、苦しい。許すぞ〜。▲シテ そ
 れなら呼んで見ましよう。やい〜、太郎冠者。▲主 はあ。▲シテ ござりますか。いや〜、
 如何にしても、呼ばるゝ事ではござりませぬ。もはやおきましよう。▲主 はてさて、ちつと
 も苦しい。許すほどに、思ひ切つて呼んで見よ。▲シテ それなら、のし切つて呼びま

しよ。御免されませ。▲主許すぞく。呼べく。▲シテやいくく、太郎冠者。▲主はあ。
 ▲シテ居るか。▲主はあ。▲シテおのれは憎い奴の。今まで何をして居つた。何もはや御出
 なされた。又酒飲うで口をきいて居つたか。扱もく憎い奴かな。先へうせい。やい
 やい、先へと云へば、むしやうに早ううせる。後からうせう。これはく、後からと云へ
 ば、分量もなう後からうせる。とかくひつそうてうせう。憎い奴かな。何とせう知らぬ。
 ▲主これはいかな事。餘りなことぢや。のきををろ。扱もく、憎い奴かな。おのれは、
 最前の云ひかへしに云ひ居るなあ。▲シテ此方は許すと仰せられた。▲主いかにも、許せば
 とて、今の様なことぬかすものか。早ううせう。▲シテ心得ました。やあ、又おどして
 れう。えへんくく。寂蓮童子、六萬菩薩、鎮り給へく。▲主やあ、これは身共ぢや。
 罰當何としをる。▲シテあ、許させられく。▲主やるまいぞくく。

九 拄 杖

三人 シテ 頭巾、衣、腰帶
 アド 半上下、腰帶
 女 箔小袖、ゆばうし

邊土一片田舎
 拄杖一禪僧などの
 持つ杖

▲シテ罷出でたる者は、邊土に住居致す僧でござる。某、いつぞや都へ用事ありて上り、
 その次手に、拄杖を誂へ置きました。漸う頃日は出来時分でござる程に、とりに参らう
 と存ずる。まづ、そろくと参らう。やれく、出家ほど世に樂なものにござらぬ。今
 日も又、行先にどれになりとも逗留いたし、佛詣をして戻らうと存ずる。やあ、参る程
 に、彼の拄杖屋はこれにござる。ものもう。御亭主内にござるか。▲亭主表に案内がある。
 どなたでござる。▲シテいや、身共でござる。▲亭主やあ、これはいつぞや、拄杖誂へさせ
 られた御坊か。▲シテなかく、さやうでござる。何ともはや出来ましたか。▲亭如何に
 も、よう出来ました。それに待たせられ。見せましよ。▲シテ心得ました、見せて下さ

れ。▲亭これく、これでござる。▲シテ扱もく、これはよう出来ました。身共の誂に
 少も違はないさうな。▲亭随分念の入れました。それにつき、此方はいつぞや御目に掛つ
 た時より、如何にしても殊勝に存ずる。何とこの拄杖について、一句持つて参らうか。
 ▲シテこれは亭主奇特でござる。何とく。▲亭如何なるかこれ白木の拄杖。▲シテ漆な
 ければ塗ることなし。▲亭善哉々々。▲シテ扱は花塗になさるよか。▲亭この拄杖折れて
 の後は如何に。▲シテ一念はつくとも二念をつかず。▲亭扱もく、此方は愈殊勝千萬に
 ござる。身共もかやうの職を致しますれど、常々出家の志でござる。まづ奥へ通らせ
 られ。一飯も進ぜ、その上、愈ありがたい教化にも預りたうござる。まづ通りせら
 れ。▲シテ如何にも、人を勧むるは、出家の役でござる。なるほど通りましょ。その拄杖
 もこれへ下され。心得ました。▲亭なうく御出家、内々私も只今申す通、出家の望
 でござるほどに、此方の弟子になされて下され。ともくくに、國々修行いたしたうござ
 る。▲シテ如何にも、身どもの弟子にいたして、只今髪を剃り、出家に致すは、何より易

陀羅尼一呪文

い事でござる。さりながら、かやうのことは、とくと親類兄弟又は御内儀とも、よう相
 談召され。かりそめに、ふと出家しても、後悔することもあるものでござる。出家にな
 れば、それくの法を勤め、經陀羅尼も覚えねばならず、身持がとつとむづかしうござ
 る。さりながら、勤むべき事さへ勤むれば、外に心に苦勞はない。どれへなりとも参り
 たい方へは、心の儘に参り、とまりたいところにはとまる。何につけても、惜しい欲し
 いと思ふ貪慾を離れてからは、なかく心に苦がなうて、この世からの佛でござる。▲亭仰
 せられた通でござる。それ故、私も俄のことでもござらぬ。常々の望でござる。なるほ
 ど萬事心得て居ます。是非とも弟子にして下され。▲シテ何と、篤と合點が参つたの。▲亭
 なかく、合點致しました。▲シテそれなら、剃刀をあてましょ。親類衆お内儀も同心で
 ござるか。▲亭なるほど、女どもも日頃に云ひ聞かせて置きました。身共次第でござる。
 ▲シテそれならようござる。さらば用意なされ。▲亭心得ました。月代を揉みましょ。▲女
 こちの人は、最前拄杖を誂へた出家が、取りに参られた。表へ出られたが、何をして居

そのつれ一其様な事
うせた一来た
うせぬか一行かぬか

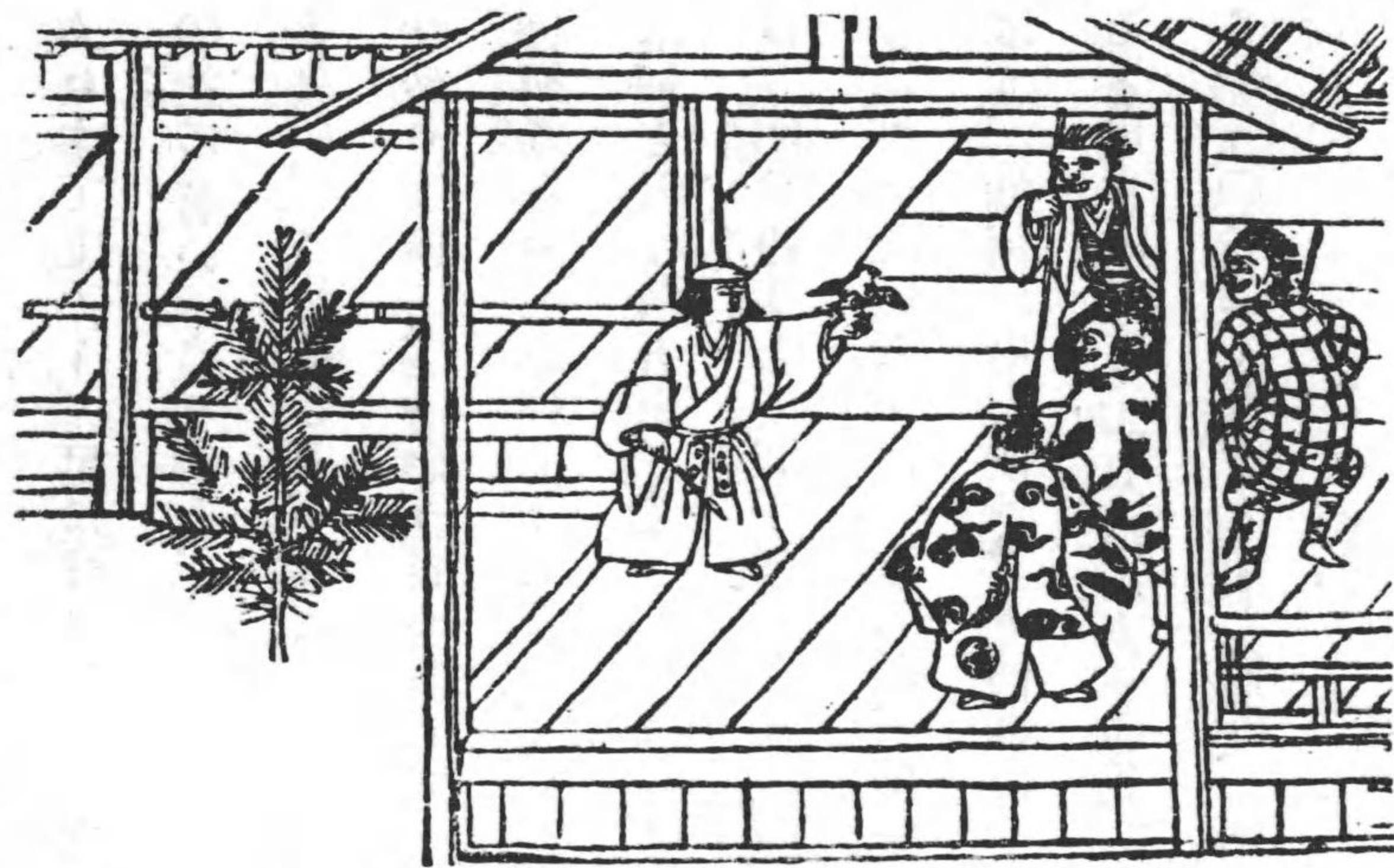
らるよ。暇ひまがいる。見みに参まゐりましよ。やあ、これはこちの人、わごりよは坊主ぼくしになるか。それは誰たれに問とうてなるぞ。こよな坊主も、よう髪かみを剃そらうと思おもふなあ。腹はらだちやく。まづこの剃刀かみそりをこちへおこせ。▲シテこれは何と召めさる。お内儀ないぎも合點あてんぢやと云はれた。▲女まだそのつれを云ふか。妾わらわを何とせうと思おもふぞ。坊主ぼくしになる。おのれはまづ何所どこからうせた。あちへうせぬか。去いなぬか。▲シテこれは何とするぞ。身みどもは無理むじりに勸すすめはせぬ。内々望ないくのぞぢやと云はれた。▲女まだその様な事云ふか。おのれ賣ばい僧坊主すぼうずめ。やらぬぞ。▲シテあゝ悲かなしや。許ゆるせ。▲女やい、わ男おとこ、よう妾わらわに合點あてんもさせいで、坊主ぼくしにならうと云うた。妾わらわは何となれと思おもうて。腹はらだちや。▲卒すいや、最前さいぜんの出家しゆつげが、坊主ぼくしは樂らくな者ぢや、なれと云うたによつて、剃そらうかと思おもうて。▲女まだそのつれなこと云ふか。おのれ何とせうぞ。腹立はらだちやく。▲卒すもはや思おもひ止とまるぞ。やれ許ゆるせ。▲女あゝ腹はらだちやく。どちへうせる。やるまいぞ。なう腹はらだちやく。

十 餌差十王

五人 シテ 白水衣、半袴、竿持
十王 狩衣、奴袴、
鬼 頭巾、半袴

▲えん王次第 地獄ぢごくの主閻魔王あるじえんまわう、六道だうたうにいざや出でうよ。やいく、眷屬けんぞくども、居をるか。▲三人鬼はあ、これに居をります。▲えん 罪人ざいにんが参まゐつたら、地獄ぢごくへ責せめ落おし候へ。▲三人畏おそつてござる。▲シテ次第 罪つみも作つくらぬ罪人のく、誰たれかは寄よつて塞せかうよ。詞ことこれは娑婆しやばに隠かくれもない、清頼せいらいと申まをす餌差ゑさしでござる。われ壽命じゆみんのほども、定さだりけるか、無常むじやうの風かぜに誘さそはれ、只今いま冥土めいどへ赴おもひ候。謠うた住すみなれし、娑婆しやばの名残なごりを

餌差十王一名
歌頼
十王一冥府の王
十あり閻魔はそ
の一也
清頼一政頼齊頼
など書く後冷泉
の朝の人出羽國
司にて鷹飼の達
人たり
餌差一鷹の餌と



なる小鳥を捕る人

興がつたなり
面白い風體

ふりすててく、足に任せて行く程にく、六道に早く著きにけり。詞これははや六道の辻に著いてござる。これより見計ひ、極樂へ参らばやと存する。▲もにはあ、いかう人臭い。さればこそ、罪人が来た。まづこの由申し上げう。如何に申し候。一段の罪人が参りて候。▲えん 急ぎ責め落し候へ。▲もに 畏つて候。如何に罪人。地獄遠きにあらず、極樂遙なり。急げくとこそ。やいく、汝は常の罪人と變り、興がつたなり。娑婆では何と云うた者ぞ。▲シテ 某は、娑婆に隠ない清頼といふ餌差でござる。▲もに 餌差ならば、明暮殺生して罪が深からう。地獄へ責め落して呉れうぞ。▲シテ いやく、某はさやうに罪の深い者ではござらぬ。極樂へやつて下されい。▲もに いやく、まづ閻魔王へ伺はう。如何に申し候。▲えん 何事にてあるぞ。▲もに 罪人は、娑婆に隠れもない餌差にてあると申すほどに、一入殺生して罪が深くござらうする間、地獄へ落さうと申し候へば、さやうの者にてなきて申し候が、何と仕らうするぞ。▲えん さあらば、その罪人の、此方へ呼び候へ。▲もに 畏つて候。こりやく、閻魔王の召す。此方へ來り候へ。▲シテ 畏

つてござる。▲もに 罪人の召して参り候。▲えん 如何に罪人 汝は娑婆にて明暮諸鳥をさし、大悪人にてある間、地獄へ落さうするぞ。▲シテ 仰御尤に候へども、鳥をさし、鷹と申すものに食はせて養ひ候ほどに、餘り科にてはなく候。▲えん さては、鷹と云ふも、同じ鳥にてあるよな。▲シテ なかく、さやうでござる。▲えん それならば、餘り汝が科でもない。▲シテ 御意の通、鷹が科でこそござれ、私の科ではござらぬ。極樂へやらせられて下され。▲えん それならば、この閻魔王も、終に鳥と云ふ物の味を知らぬほどに、鳥と云ふ物が、死出の山に澤山にある程に、汝が持つた竿でさいて、閻魔王に振舞へ。それなら、汝が望のやうにして取らせうぞ。▲シテ それは何より安い事でござる。さらば、鳥をさいて進上申しましょ。誦いでく諸鳥を差さんとて、地く、死出の山路の南原より、鳥どもあまた飛び來るをば、見るより早く、中にて差いてぞ取つたりける。さらばこの鳥を焼鳥にして進ぜましょ。さらば参りませ。▲えん どりやく、食うて見よ。めりよくめりよ、扱もいかう旨い事かな。▲シテ さらば眷屬達も参れく。▲もに 心得たく。めり

死出の山—冥途の山

ましろ—ませう

りくく。これはく、旨いことかなく。▲まん扱もく、いかう旨いものぢや。この様な旨い物をくれたほどに、暇を取らするぞ。娑婆へ歸り、三年が間諸鳥をさいて暮らせ。▲シテこれはありがたい事でござります。▲まん誦いでく、暇を取らせんとて、地く、娑婆に歸り、三年が間諸鳥をさして、鶴、雁、雉子、鴨、小鳥も慥に届くべしと、仰を委しく承りて歸りければ、閻魔王も名残を惜しみ、玉の冠を清頼に與へ給ひければ、忝くも頂戴いたし、く、二度娑婆へぞ歸りける。

卷之五

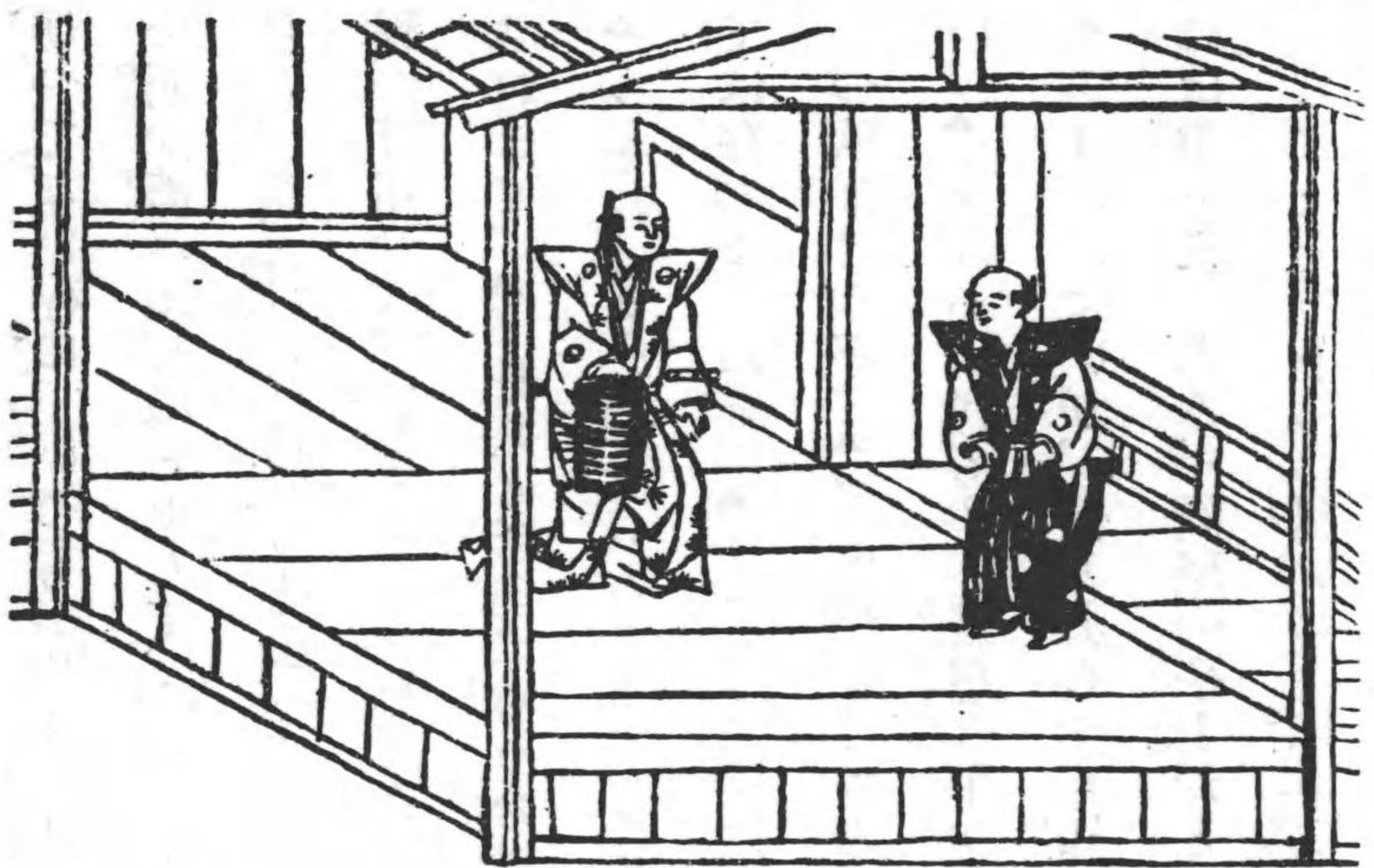
一對馬祭

三人 シテ 牛上下、腰帶、扇さす
ワキ 長袴、小さ刀
アド 長袴、小さ刀

▲主これは、この邊に住居いたす者でござる。俄に客來ござる程に、太郎冠者に、いつもの酒屋へ酒を取りに遣さうと存する。やいく、太郎冠者あるか。▲シテはあ、これに居ります。▲主汝を喚び出すこと、別の事でない。俄に客がある。汝はいつもの酒屋へ行て、酒を一樽取つて來い。▲シテ畏つてござる。代物を遣されませ。▲主いや、代りは遣ひ

代り代金

對馬祭一名千鳥



切つてない程に、いつものやうに通で取つて来い。▲シテその義でござる。只今までの通の面が濟みませぬと申して、それはく酒をおこす事ではござらぬ。▲主それは尤なれども、追つ付け算用せうと云うて、取つて来てくれ。頼むぞ。▲シテいやく、唯今まで何程か算用せう、濟まさうと云うて騙しましたによつて、もはや合點しませぬ。代りを遣されませ。▲主身共も手前に有り合せぬ。どうぞ、代りなしに取つて来てくれ。頼むぞ。▲シテそれほどに仰せらるゝ事でござる。なにとぞ致して、随分取つて参りましよ。重ねては存じませぬぞ。▲主重ねてはその時のこと、まづ今日は早う取つて来てくれ。汝にも一つ飲ませうぞ。▲シテ畏つてござる。かう参ります。▲主頓て早う戻れ。▲シテはあ。▲主えい。▲シテはあ。扱もく迷惑な事かな。さりながら、取りに参らずはなるまい。酒屋がおこすればよいが、何とあらうも知らぬ。まづそろりくと参らう。さりながら、ものには取りえがある。酒屋の亭主がとつと話好きで、その上身共とは合口でござる。今日もなにとぞ、有る事無い事を取り集め話して、そのうちに隙を見て取つて退かうと存ず

る。やあ、参るほどにこれでござる。ものも。内にござるか。▲酒やあ、聞いたやうな聲ぢや。案内とは誰ぢや。▲シテ私でござる。▲酒やあ、太郎冠者、そちに逢ひたうをりやつた。▲シテそれは何ごとでござる。▲酒や何事とは。唯今までの通の埒は何とするぞ。▲シテさればく。けふは持つて来う、明日は算用せうと存ずれど、私かすきと隙なしで、おそなはります。明日は急度算用いたさうぞ。▲酒何時逢うても、何かと云うて埒が明かぬ。必ず明日の違はぬやうにめされ。▲シテもはや違はござらぬ。持つて参らう。▲酒いかにも頼むぞ。▲シテ心得ました。扱、今日参るは別事でござらぬ。頼うだ人が俄に客がある。又いつもの様な、よい酒を一樽詰めて下され。▲酒扱もく、こよな者が言出す事は今までの算用さへ濟まぬに、その上に又遣らるゝものか。▲シテ身共も定めてさうおしやらうと思つて、今日のばかりは代りを持つて来ました。▲酒何と、今日のは持つて来た。▲シテなかく。▲酒それなら詰めて遣らうぞ。▲シテよい酒を詰めて下され。▲酒心得た。これく、これは随分念を入れ詰めて置いた。餘所へ行く酒なれど、そちが急ぐさうな。

分限一富貴の意

取つて行きやれ。▲シテ過分にこそござれ。何とよう詰りましたか。▲酒なかく。▲シテ扱こなたは、愈仕合でござる。近年こなたの酒がよくなつた。少しでも入るならば、取りに遣らうと、何方でも、この沙汰ばかりでござる。▲酒それは身共も満足ぢや。▲シテ是はこなたの、いよく分限にならせられう瑞相ぢや。▲酒やいく、それは何所へ持つて行く。▲シテまことに、私はいつもの様に通の合點いたした。さらば代りを渡しませよ。▲酒何と見えぬか。▲シテされば、不思議な事でござる。代りを持つて來ましたが、はあ、思ひ出しました。是へ参るとて、帯を仕直しましたが、柵の端に忘れて置いた。取つて参らう。▲酒やいく、とりに行くなら、この樽を置いて取りに行け。▲シテはて氣遣はない。今の間に取つて來ます。▲酒いやく、それでも遣る事はならぬ。こちへおこせい。▲シテはて扱、きつしくな人ぢや。▲酒きつしくなとは、そちは聞えぬ事ぢや。總じて代りがあれば、他所へ取りに行き、又代りがなければ、これへ取りに來る。どうした事ぢや。▲シテいやく、終に他所で酒を取つた事はござらぬ。なぜにさうおしやるぞ。▲酒い

きつしくな人一
律義者

對馬祭一津島町の牛頭天王の祭也例祭六月十五日神事船上にて備さる

やく、他所で取ればこそ、この十日餘見えなんだわ。▲シテ扱はこの十日餘参らぬを、他所で取ると思召すか。▲酒なかく。▲シテこの間は頼うだ人の御供を致して、尾張の對馬祭を見物に参つた。▲酒それは内々聞き及うだ祭ぢやが、何と面白い事か。▲シテこなたはまだ見ずか。それはく、見ると聞くと違つた事でござる。面白ともどうとも、云はれた事ではござらぬ。まづ伊勢浦へ参れば、子供が集つて千鳥をふせるが、扱扱面白ござる。▲酒それはどうした事ぢや。さあく、話して聞かしてやれ。▲シテいかに話しましよ。とてもものことに、その様子をして見せましょか。▲酒それはよかる。仕形でして見しやれ。▲シテ如何にも、して見せませうが、相手が入ります。▲酒それはむづかしいか。▲シテいや、むづかしい事はござらぬ。扇をかざして、こちらを見ぬ様にして、はんま千鳥の友呼ぶ聲は、と仰せらるゝ分でござる。▲酒それほどのことは云はう。さあさあ、早うして見しやれ。▲シテ心得ました。さあ囃させられ。ふせませうぞ。▲酒はんま千鳥の友呼ぶ聲は。▲シテちりくちりくちりく。ちりちりちりくちりく。ちりと

はんま千鳥一濱千鳥の濱をはんまと云ふ山をやんまと云ふ類也

山一山舜

んだり。▲酒やいく、その樽は何所へ取つて行くぞ。▲シテいや、真中にあつて妨にな
る。退けて置かうと思ひます。▲酒いやく、邪魔になれば己が退くる。こちへおこし
やれ。何とこれはこの分か。▲シテなかく、この分でござる。▲酒これはあまり面白う
ない。▲シテいやく、この次に對馬祭が面白うござる。まづ山を作り、船に載せ、片端
から抑す。引く。囃子物には鼓、太鼓、鉦で囃し立つる。扱々面白いことでござる。▲酒
それは面白かる。さあく、して見せい。▲シテなるほど、して見せましょ。これにも對手が
入ります。こなたは扇擴ろけて、ちやうさようさあと仰せられ。▲酒心得た。云はうぞ。
▲シテ幸ぢや。此樽を山にして引きましょ。樽を巻いた繩がある。さあく、囃させられ。
引きますぞ。▲酒囃すぞ。ちやうさようさ。▲シテえいともくくなあ。▲ちや
うさ、ようさあ。▲シテえいともくくなあ、▲酒やいくく、それは何所へ取つて行
く。▲シテこれは小路へ引き入れた所でござる。▲酒いやく、どうやら樽を取つて去なう
とする。面白うない。▲シテそれはこなたの氣が廻つてぢや。▲酒何と、これもこの通か。

面白こと面白
いことの誤なる
べし

して退き居つた
しては巧に騙
しての意

▲シテなかく、この分でござる。▲酒それなれば、是も面白うない。もはや面白ことはな
いか。▲シテこの次に、流鏑馬と云うて、馬に乗つて駈ける内に、的を射ることでござる
が、なかく面白うござる。▲酒さあく、その面白い事が見たい。して見せい。▲シテし
て見ませうか。これも相手が入る。こなたは先へ廻つて、馬場退けくと云うて、馬場な
人を退けさせられ。身共が馬に乗つて、御馬が参るくと云うて駈けますぞ。▲酒心得
た。さあく、馬に乗れ。▲シテこれに竹がござる。竹馬に乗りませう。さあ乗りました。
▲酒馬場退けく。▲シテ御馬が参るく。▲酒馬場のけく、やいく、それは何所へ取つ
て行く。▲シテこの樽か。▲酒なかく。▲シテ御馬が参るく。▲酒これはさて、又して
退き居つた。横著者、遣るまいぞく。▲シテ御馬が参るく。

二 蛸

三人
 シテ 頭巾、腰帶、扇持
 ワキ 頭巾、水衣、半袴
 アヒ 長袴、小き刀

▲ワキ 次第茶がはりもなき往來の、く、行末何となるらん。詞これは筑紫方より出でたる僧にて候。われいまだ都を見ず候程に、路次すがら鉢を開き、都へ上らばやと存じ候。諸 筑紫人、空言するとや思ふらん、く。われはまことの修行にて、しみづのうらに著きにけり。詞 急ぐ程に、この所は清水の浦と申すけに候。▲シテなうく、あれなる御僧に申すべきことの候。▲ワキこなたのことにて候か、何事にて候ぞ。▲シテこれは、ごぞの春みまかりたる蛸の幽霊なり。かまへてくよくくお弔ひあれと、かきけすやうに失せにけりく。▲ワキあまり不思議なる事にて候間、所の人に尋ねばやと存ずる。所の人の御入り候か。▲問所の者と御尋は、如何やうの御事にて候ぞ。▲ワキ 近頃、聊爾なる申

鉢を開き一鉢鉢
 すること
 筑紫人空言す
 此詠謡曲監染川
 にも出づ
 清水の浦一駿河

し事にて候へども、去年の春の頃、この所にて、蛸など御取りありたることはなく候か。▲問なか。去年の春のころ、この浦へ大蛸の上りたるを、この浦の者ども寄り合ひ、賞翫仕り候處に、その蛸を引き上げたる者共に祟をなして候間、これなる標を立て置き、弔ひ申し候が、何と思召し御尋にて候ぞ。▲ワキ尋ぬること、別のことにもなく候。某この所に著きて候處に、いづくとも知らず、愚僧に申すべきこと候と申すほどに、其方を見申して候へば、去年の春の頃みまかりたる蛸の幽霊なり、跡をとひてたべと申し、搔消すやうに失せて候間、こなたへ不審申すことにて候。▲問それは疑ふ所もなき、蛸の幽霊なるべし。御僧も逆縁ながら、弔うて御通りあれかしと存じ候。▲ワキあらば逆縁ながら弔うて通らうするにて候。▲問又御用のこと候はど、重ねて仰せられ候へ。▲ワキ頼みましよ。▲問心得ました。▲ワキ 詞色扱も幽霊蛸の承が、佛事は様々多けれど、心經をもつて弔ひけり。あのくたこ三百三錢で買うて、佛にこそは手向けけれ、く。なまだこく、なまんだこ。▲シテあよらありがたの御弔やな。あらありがたや候。▲ワキふ

心經一般若心經
 あのくたこ一阿
 耨多羅三藐三菩
 提のもぢり
 なまだこ一南無
 阿彌陀佛のもぢ
 り

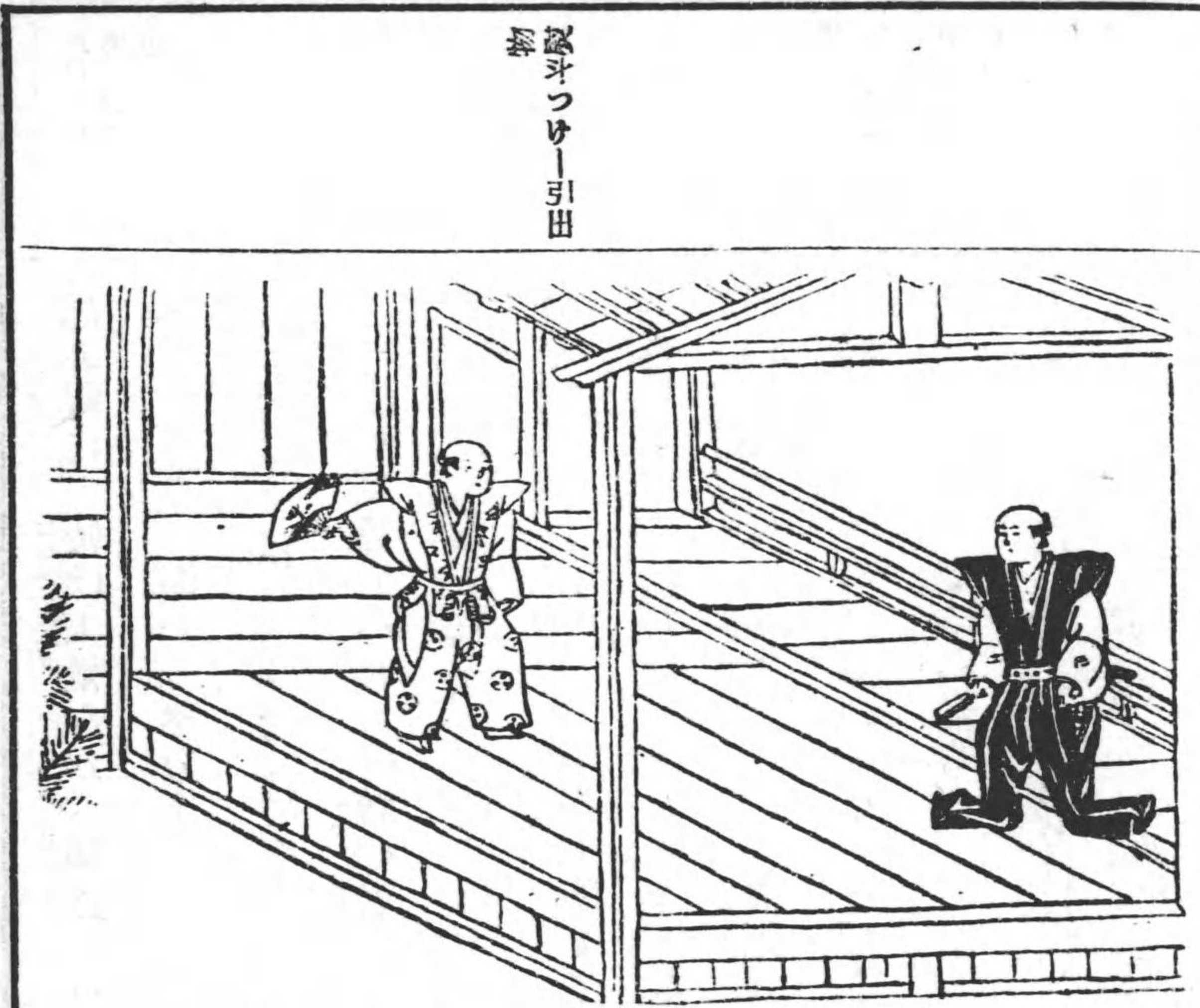
しぎやな。人家も見ゆる晝中に、人かと思へば人でもなし、如何なるものぞ名を名乗れ。▲シテこれは、最前御僧に言葉を交したる蛸の幽霊なるが。御弔のありがたさに、これまで現れ出でて候。▲ツキさては蛸の幽霊なるか。最期のありさま語り候へ。尙々後を弔ひ候べし。▲シテさあらば最期のありさま語り申さん。後をとうて給はり候へ。詞扱もわれこの浦に年久しく住んで、獵師の網を彼方此方遁れしに、去年の春は、大網を沖の方より置きまはし、遁れもやらで引き上げられ、削りたてたる俎の上に引き据ゑられて、後より、地く、庖丁を押當てらるれば、眼もくらみ息つまつて、うつぶしに押伏せられて、頭をはいてぞふしたりける、く。▲シテ而して起き上がれば、地く、或は四方へ張蛸の、照る日にさらされ、足手をけづられ、鹽にさられて隙もなき、苦みなるを、妙なるみのりの、庭に出て、佛果に至るありがたさよ。唯一聲ぞ、南無阿彌陀佛。只一聲ぞ、なまだことと、かきけすやうにぞ、失せにける。

三鐘の音

二人

シテ 半袴、腰帶
主 長袴、小さ刀

▲主これは、相摸の國三浦に住居致す者でござる。某は世倅を數多持つてござるが、どれくも、殊の外成人いたしてござるほどに、元服をさせ、その上、鬘斗つけに刀を拵へて取らせうと存する。まづ太郎冠者を喚び出し、申し付くことがある。やいく、太郎冠者あるか。▲シテはあ、お前に居ります。▲主汝を喚び出すこと別の事でもない。汝が知る如く、世倅どもが殊の外成人した。此度名をもかへ、又鬘斗つけに、刀を作つて取らさうと



鬘斗つけ引出

かねのね—金の
値と鐘の音と取
違ふる也

五大堂—明王院
又は大行寺と云
ふ將軍賴經の祈
願所
なりのよい—形
の好き意
壽福寺—五山の
一開山は榮西
極樂寺—開山は
良觀
じやもふ—鐘の
音の形容

思ふ程に、汝は大儀ながら鎌倉へ行て、かねのねを聞いて来い。▲シテこれはおめでたい事でござる。聞いて参りましよ。▲主その儀なら、はやう行て来い。▲シテ畏つてござる。▲主頓て戻れ。▲シテはあ。▲主えい。▲シテはあ。やれく、俄な事を仰せつけられた。まづ急いで鎌倉へ参り、鐘の音を聞いて参らうと存する。扱もく、めでたい事でござる。御成人なされて、かやうに刀を作つて遣さるゝは、めでたい事でござる。やあ、何かと申すうちに、はや鎌倉に著いた。まづ、どれから先へ参つて聞かうぞ。まづ五大堂へ参らう。これぢや。扱もく、なりのよい鐘かな。さらば撞いて見やう。くわん。これは破鐘ぢや。役立つまい。壽福寺へ参らう。はやこれぢや。いかさま、是もなりのよい鐘ぢや。さらば撞いて見やう。こん。はあ、これは餘り固い音ぢや。これではなるまい。さらば極樂寺へ参らう。何かと云ふうちにこれぢや。扱もく、これはどれくよりのなりのよい鐘ぢや。さらば撞いて見やう。じやもふもうく。はあ、これがよい音ぢや。まづ急いで歸り、この通申さう。定めて頼うだ人の待ちかねてござらう。やあ、こ

れぢや。申しく、頼うだお方ござりますか。太郎冠者歸りました。▲主やあ、太郎冠者が戻つたさうな。太郎冠者戻つたかく。▲シテ唯今歸りました。▲主何とく、かねの音を聞いて来たか。何程するぞ。▲シテされば、まづ私も五大堂へ参り、聞いて見ましたが、何とやら破鐘の音でござる。これはなるまいと存じ、壽福寺へ参り、聞いて見ましたが、是は殊の外固い音でござるほどに、これでも役に立つまいと存じ、極樂寺へ参り、聞いて見ましたが、これがなるほど訝えたよい鐘でござる程に、極樂寺の鐘になされたらようござらう。▲主これはく、苦々しいことかな。刀を黄金作りにして取らすほどに、鎌倉へ行て、黄金の値を聞いて来いと云ひ付けたに、おのれ撞鐘のことを誰が聞いて来いと云うた。▲シテそれなら黄金と、初めからおしやつたがようござる。▲主まだそのつれな事を云ひ居るか。あちへうせい。▲シテこれは如何なこと。身共の存じたとは格別違うた。▲主扱もく、憎い奴でござる。彼奴が様な奴は、せめて撞鐘の音なりと聞いて、うせたらようござる。それも鎌倉へも行きも致さず、参つたと申すやら知れますまい。様

入相鎌倉へ入ると云ふを鐘の縁にて入相と續けたり
建長寺一五山の師
そくび一頸を早しめて云ふ頸を取つて突かるゝ意に續けたり
はなをぞなをりける一未詳或は思ふ花をぞ手折りけるにて鼻を折ると言掛けたるか

子を尋ねうと存する。やい其處な奴。おのれ鎌倉へ行たが定ならば、こゝへ来て、様子
を云うて聞かせい。▲シテ 畏つてござる。とてもものことに、拍子にかよつて申しましょ。
謠まづ鎌倉につうと入相の鐘これなり。東門にあたりては、壽福寺の鐘これなり。諸行
無常と響くなり。南門にあたりては、五大堂の鐘これなり。是生滅法とひどくなり。扱
西門は極樂寺、これ又生滅々爲の心、北門は建長寺、寂滅爲樂と響き渡れば、いづれも
鐘の音聞きすまし、急いで上るか、また立ち歸り、子持が方への土産にせんと、紅皿一
つ貰ひ持ちて、急いで上る心もなく、さもあらけなき主殿に、そくびを取つて撞鐘の、
そくびを取つてつき鐘の、ひどきにはなをぞなをりける。詞 これも鐘の威徳でござる。
▲主 何でもないこと、あつちへうせい。▲シテ はあ。▲主 せい。▲シテ はあ。

四 腰 祈

三人 シテ 兜巾、篠懸、水衣、珠數持
祖父 頭巾、腰帶
冠者 半上下、腰帶

▲シテ山伏 貝をも持たぬ山伏が、く、みちくうそを吹かうよ。詞 これは、出羽の國羽黒
山より出でたる山伏でござる。某 大峯葛城山の役目を相勤め、只今本國へ罷下る。ま
づ急いで參らう。又こゝに身どもの祖父御を持つてござるが、久々見舞ひませぬ。此度
は見舞はうと存する。總じて山伏と申すは、難行苦行をいたすによつて、行力さへ達す
れば、忽ち飛ぶ鳥も祈り落す事でござる。やあ、はやこれぢや。まづ案内を乞はう。も
のも。案内もう。▲冠者 表に案内とある。何方でござる。▲シテ いや、身共ぢや。▲冠者 やあ、郷
の殿でござるか。ようこそお出なされました。ひさく御目にかよりませぬが、御息災
でおめでたうござります。▲シテ それく、わごりよも無事で一段ぢや。何と祖父御には

郷の殿山伏の未だ部屋住にて院號などなきを云ふとぞ

御無事でござるか。▲冠者なかく、御息災にござります。明暮こなたの事ばかり、仰せ出されますぞ。▲シテさうである。まづ御目にかよりたい。身共の参つた通をおしやれ。▲冠者畏つてござる。その通申しましょ。それにござりませ。申しく祖父御様、郷の殿の御見舞なされてござる。▲もほぢ何と云ふぞ。今日はよい日和ぢやど云ふか。▲冠者いやいや さやうではござりませぬ。郷の殿の御見舞なされてござる。▲もほぢ何と云ふぞ。郷の殿が見舞つた。身どもは、もはや年寄つたれば腰が痛い。床几をくれい。▲冠者畏つてござる。お床几でござる。▲シテ申し祖父御様、郷の殿が御見舞ひ申しました。▲もほぢ何ぢや。郷の殿が見舞うた。わごりよはどち風が吹いて見舞はしました。あの、郷の殿は、飴が好きであつた。飴をとらせ。▲シテまだ身どもが幼少の時のことを、忘れずに仰せられます。私も、毎年々々大峯葛城の山の役を相勤めますにより、一圓暇を得ませいで、御見舞も申しませぬ。やあ太郎冠者、見れば祖父御の腰が殊の外屈うだが、あれは何時もあるか。▲冠者なかく、何時とてもあゝの如くでござる。殊の外屈ませられて、御苦勞

どち風が吹いて
—いかなる風の
吹廻して也

なと仰せられます。▲シテさうである。あれは御苦勞にある。身どもが日頃の行力で、あの腰を祈り直して進ませうとおしやれ。▲冠者畏つてござる。申しく祖父御様、郷の殿の仰せられますは、こなたの御腰が屈ませられて、御苦勞に見えます、行力をもつて祈り直して進ませましょと仰せられます。▲もほぢ何と云ふぞ。この祖父が腰を、郷の殿が行力で、祈り直さうと云ふか。▲冠者さやうでござります。▲もほぢなにとぞ行力で直ることなら、祈つてくれさしめ。▲シテ畏つてござる。追付祈りまして、よう致して進ませましょ。それ山伏と云つば、山に起き臥すによつて山伏なり。兜巾と云つば、布切一尺ばかり黒く染め、襷を取りて戴くによつての兜巾なり。又この珠数は、苛高にては無うて、むざとした珠數玉を繋ぎ集め、いらたかと名づく。かほど貴き山伏が、一祈祈るものならば、などか奇特の無かるべき。ほろおんく。いろはにほへと、ほろおんく。何とく太郎冠者、奇特を見たかく。▲冠者扱もく奇特千萬、驚き入りましてござる。▲もほぢやいく太郎冠者、久しうて月星を拜うで、この様な嬉しい事はない。あゝ嬉し

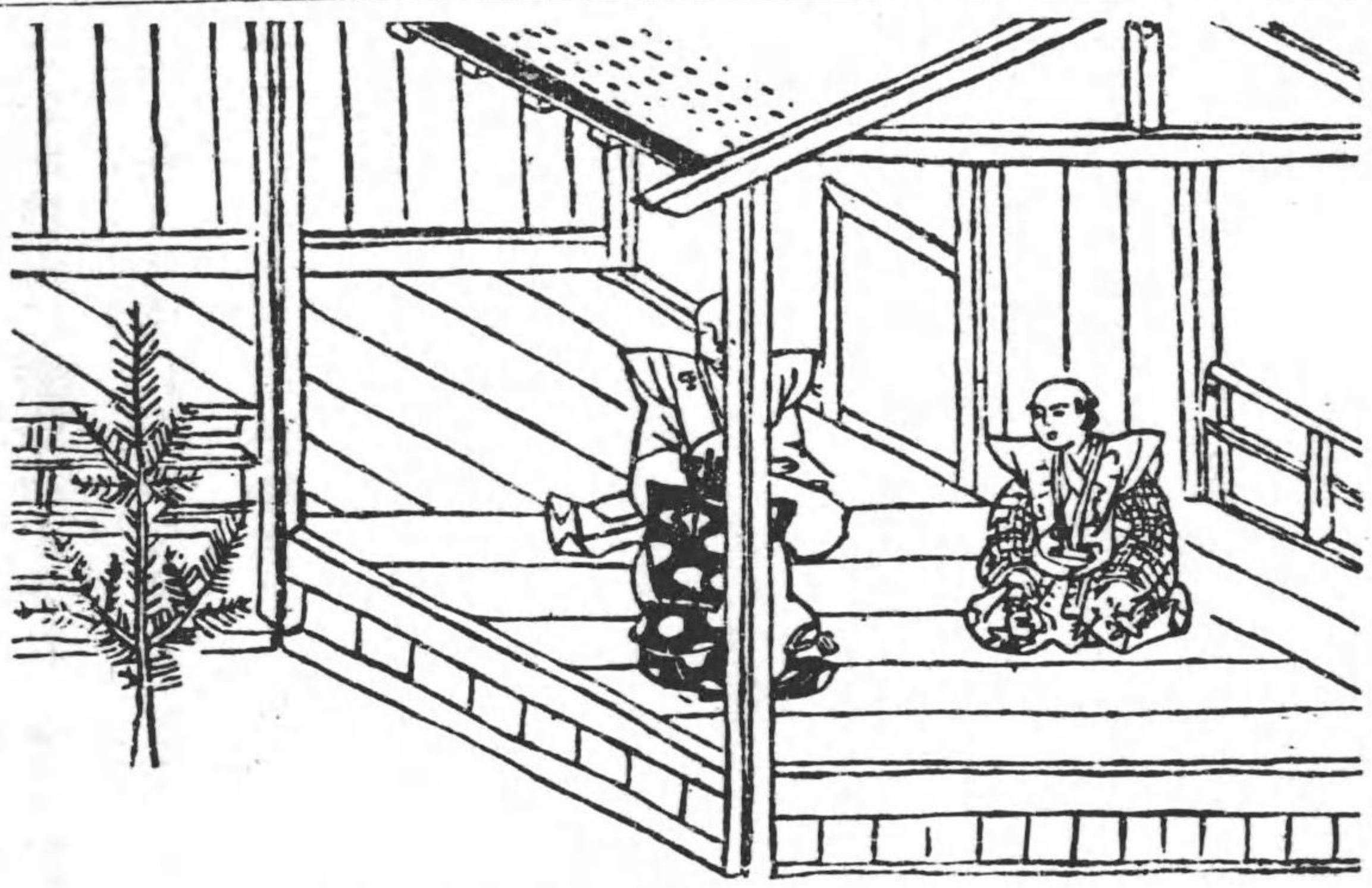
奇特—靈驗

やく。▲冠者申し、殊の外御機嫌でござります。▲シテいかにも、身共も満足ぢや。
 ▲おほぢやい、太郎冠者。これは何時までかうして置くことぢや。▲シテ何時までも、
 こなたの一生さやうでござります。▲おほぢなう、軽忽やく。此様にして一期居らる
 るものか。元の様にして返せと云へ。太郎冠者。▲冠者申し、只今語られたを御聞き
 なされましたか。▲シテなるほど聞いた。餘り身どもが行力が強さに、祈り過ぎた。こん
 どは後から祈つて、よい加減にして進ぜう。▲冠者申し、この度は後から祈つて、よ
 い加減にせうと仰せられます。▲おほぢ早う祈れ。▲シテさらば祈らう。行者は加持に
 参らんと、役の行者のあとをつぎ、苛高珠數をおし揉んで、も一祈祈るなら、などか奇
 特のなかるべき。ほろおんく。橋の下の菖蒲は、誰が植ゑた菖蒲ぞ。ほろおんく。
 これはく、又祈り過ぎた。▲おほぢやい、郷の殿は、祖父を見舞には来いで、騷りに來
 たと見えた。元のやうにして返せと云へ。あゝ悲しやく。▲シテこれく、太郎冠者、こ
 れはまた祈り過ぎたと云へ。某が行力が強さぢや。又前から祈らうほどに、汝は後から

加持祈禱

よいかけんに突張をかやれ。▲冠者畏つてござる。▲シテ如何に悪心の深い祖父の腰なりと
 も、明王の索にかけて祈るなら、などか奇特の無かるべき。ほろおんくくく。
 ▲三人ひやあり、ひやあり。ほつばい、ひやろ、ひい。

地頭一莊園の領主



五 佐渡 狐

三人 シテ 半上下、腰帶
奏者 長袴、小き刀
アド 半上下、腰帶

▲アド 罷出でたる者は、越後の國の百姓でござる。毎年都の地頭殿へ、御年貢を納めに上ります。只今もいつもの如く、上らうと存する。まづ急いで参らう。まことに、この如く相變らず上るは、めでたい事でござる。▲シテこれは佐渡の御百姓でござる。毎年都へ御年貢を納めに上ります。當年も上らうと存する。やれくいつも相變らず、この如くに上るは、めでたい事でござる。▲アドやあ、こ

れに似合うた道連が参つた。言葉をかけ同道いたさう。なうく、これく。▲シテやあ、こちの事か。何事でをりやる。▲アドなかく、そなたの事ぢや。わごりよは、どれから何所へ行かします。▲シテ身共は、佐渡の國の百姓でをりやるが、都の地頭殿へ、御年貢を納めに上るわ。▲アドそれは一段の連ぢや。身共は越後の國の百姓ぢや。身共も都へ年貢を納めに上る。いざ、同道いたさう。▲シテそれは似合うた連ぢや。いざ同道致さう。まづ、さきへお行きやれ。▲アドそれなら、身共が先ぢや程に、参らうか。▲シテなかく。行かします。▲アドさあく、をりやれく。▲シテなかく。参るく。▲アドなうく。世間には似合うた連もある、似合はぬ連もあるが、そなたと身共のやうな連は有るまいぞ。▲シテいかにもその通でをりやる。あはれ御館も一つ所であれかしの。▲アドさうでをりやる。歸りにも又同道して下らうもの。やあ何かと云ふ内に、身共の御館はこれでをりやるわ。▲シテ扱はこれか。身共が御館はとつと上ぢや。▲アドそれなら、これで御暇申さう。下りには最前の所で待ち合うて、又同道して下らうぞ。▲シテなかく、さやうに致

さう。▲二人さらばくく。▲シテとは云うたが、身共の御館もこれでをりやる。▲アドは
て扱わごりよは、戯言をいふ人ぢや。扱お奏者は決つてあるか。時ので上げさします
か。▲シテいかにも、時のお奏者でをりやる。▲アドそれなら、そなたから上げさしませ。
▲シテ心得てをりやる。ものもうく。▲奏者何者ぢやく。▲シテはあ、これは佐渡の國の
御百姓でござる。毎年の如く御年貢を納めます。上へはお奏者の御心得をもつて、よろ
しう仰せ上げさせられ下されませ。▲奏いかに聞き届けた。お藏の前へ納めませい。
▲シテはあ、畏てござる。さらくく。なうく。越後の、居さしますか。▲アドなかく、こ
れに居ます。▲シテ身共は上げた。そなたも上げさしませ。▲アド心得た。さらば上げう。も
のもうく。▲奏何ぢやく。▲アドはあ、これは越後の國の御百姓でござる。いつもの如
く、御年貢を納めます。▲奏ようこそ持つて参つた。御藏の前へ納めませい。▲アドはあ、畏
つてござる。さらくく。なうく。上げてをりやる。▲シテそれは一段のことでをりや
る。▲奏申し上げます。兩國の百姓、毎年の如く御年貢を納めます。あゝその通申し渡し

ましよ。やいく。兩國の百姓ども。▲三人はあ。▲奏仰せ出さるとは、毎年々々相變らず
御年貢を納めますとあつて、上にも殊の外御機嫌ぢや。いよく。又來年も、早々納めに
のほりませい。▲シテはあ、畏つてござる。▲奏又いつは下されねど、御通を下さるとぞ。
▲二人はあ、有難うござります。▲奏さあく、これへ寄つて飲め。身共が酌をするぞ。▲二人
これは慮外でござります。これは有難い仕合でござります。それならもはや御暇申しま
す。又明年参りましよ。▲奏なかく。明年相變らず参りませい。▲二人はあ、有難うござり
ます。▲シテさあく、をりやれく。いざ下らう。▲アドなうく、何と當年はよい首尾で
をりやるの。▲シテなかく。残るところもない、よい仕合でをりやる。▲アドそれにつ
き、わごりよに尋ぬる事があるわ。▲シテ何事でをりやる。▲アドそなたの國の佐渡は、最
もよい國なり。何不足もないが、狐が無いと云ふが、定か。▲シテいやく。それは虚言ぢ
や。なるほど居りやる。▲アドいやく。確か無いと聞いたが、有るが定か。▲シテなかく、
有るわ。▲アドそれなら狐は、どの様な物ぢや。▲シテはて、狐は犬のやうな物ぢやわ。▲アド

かけろく一賭祿也勝負事に何物かを賭けにする也

すれば、有るにきはまつたが、さりながら、犬とは違^{ちが}うた所があるが、知^しつて居^ゐるか。
 ▲シテなかく、存じた。まづ顔^{かほ}が犬より細^{ほそ}長^{なが}うての。▲アドいかにも。▲シテ尾^{おし}がふつさり
 として。▲アドそれく、これも合^あうた。扱^あはよう合^あうたが、有るが定^{ぢやう}か。確^{たしか}に佐渡^{さざ}には無
 いと聞いたが合^あ点^{てん}いかぬ。やあ思^{おも}ひつけた。尋^{たづ}ねる事がある。これく。▲シテ何事ぞ。
 ▲アドどうでも、無いにきはまつた。何とかけるくにして、有るが定^{ぢやう}なら、身^みどもも國^{くに}に牛^{うし}
 を持^もつたほどに、これをそちへ遣^やらう。又^{また}無いならば、そなたも牛^{うし}があらう、おこしや
 れ。▲シテいかにもさう致^{いた}さう。違^{ちが}はないぞ。▲アド必^{かな}らずその極^{きは}めでをりやるぞ。▲シテさ
 やうでをりやる。▲アドそれなら、問^こふ事^{こと}が一^{ひと}色^{いろ}あるわ。狐^{きつね}があるなら、狐^{きつね}の啼^なく聲^{こゑ}は何と
 云^いうてなくぞ。▲シテはてさて狐^{きつね}は、ものと云^いうて啼^なくわ。▲アド何と。▲シテまづ、それに待^{まち}
 ちやれ。はあ、何とやら云^いうて啼^なくが。▲アドこれく早^{はや}うおしやれ。何と啼^なくぞく。
 ▲シテはあ、思^{おも}ひ出した。物^{もの}と啼^なくわ。▲アド何と。▲シテ物^{もの}と。▲アド何と。▲シテちよくわいと
 啼^なくわ。▲アドそりや違^{ちが}うたぞ。そちが牛^{うし}を取^とるぞ、く。▲シテあ、許^{ゆる}してくれ。牛^{うし}は遣^や

る事ならぬぞく。▲アドいやく、どうでも牛を取るぞ。やるまいぞく

六 八尾地藏

二人

シテ 鬼頭巾、半袴、杖つき出る
アド 頭巾、白水衣、半袴

八宗九宗一八宗
は律俱舍成實法
相三論華嚴天台
眞言也禪を加へ
て九宗となる
ぞろめく一歩き
行くこと
がしん一餓死

▲シテ 地獄の主閻魔王く、邏齋にいざや出うよ。詞これは地獄の主閻魔王なり。扱も、今は人間が利根になつて、八宗九宗に法を分け、彌陀の淨土へ、ぞろ／＼とぞろめくにより、地獄のがしん、以ての外、それ故只今この閻魔王が、六道の辻へ罷出で、罪人が來つてあらば、地獄へ責め落してくれうと存する。誰住みなれし、地獄の里を立ち出でて、く、足に任せて行くほどに、く、六道の辻に著きにけり。詞急ぐ程に、これははや六道の辻でござる。まづこの所に待つて、罪人が來らば、一責めて責め落さばやと存する。▲罪人 罪科もなき罪人を、く、誰かは寄つて責めうよ。詞これは河内の國八尾の近所に住居致した者でござる。某不圖無常の風に誘はれ、只今冥土へ赴く。そろり／＼と參らう。▲シテ あら、いかう人臭い。されば罪人が來た。地獄へ責め落

八尾の地藏一初
日山常光寺本尊
小野宣作地藏著
薩

えんもじ一閻魔
の頭字を女房詞
にて書く

南瞻部洲一南閻
浮提に同じ須彌
山の南の國なり

みたむなかる一
見ともなからう
にて容貌の醜き
意

してくれうぞ。いかに罪人、急げく／＼とこそ。やい／＼、汝がその差し出す物は何ぢや。▲罪人 是は娑婆に隠れもない、八尾の地藏よりの御文でござる。見させられい。▲シテ さればその古、この閻魔も地藏と懇したによつて、その文をば用るたれど、今は地獄もがしんぢやによつて、用るる事はならぬ。今一責めてくれうぞ。いかに罪人、地獄遠きにあらす、極樂遙なり。急げく／＼とこそ。やい／＼、汝は餘り文を差出すほどに、見てとらせう。まづ床几くれい。▲罪人 心得ました。▲シテ その文をおこせ、見やう。さあ／＼、汝も是へ寄つて、とも／＼に讀め。▲罪人 心得ました。▲シテ まづ言上書を見やう。えんもじ様參る、地よりと書かれた。これはまだ古のことを忘れずに、書いておこされた。▲二人 謠そもく、南瞻部洲、河内の國八尾の地藏の爲には旦那、その名を又九郎と申せし者のためには、この罪人は小舅なり。詞扱は汝は又九郎が小舅か。それならば又九郎が女房も推量した。汝に似たらば、みたむなかる。▲罪人 いや／＼、私は似ませぬ。美しくござる。▲二人 小舅なり。われを信じて月詣で、佛供をそなへ歩を運べば、我が爲一の旦那

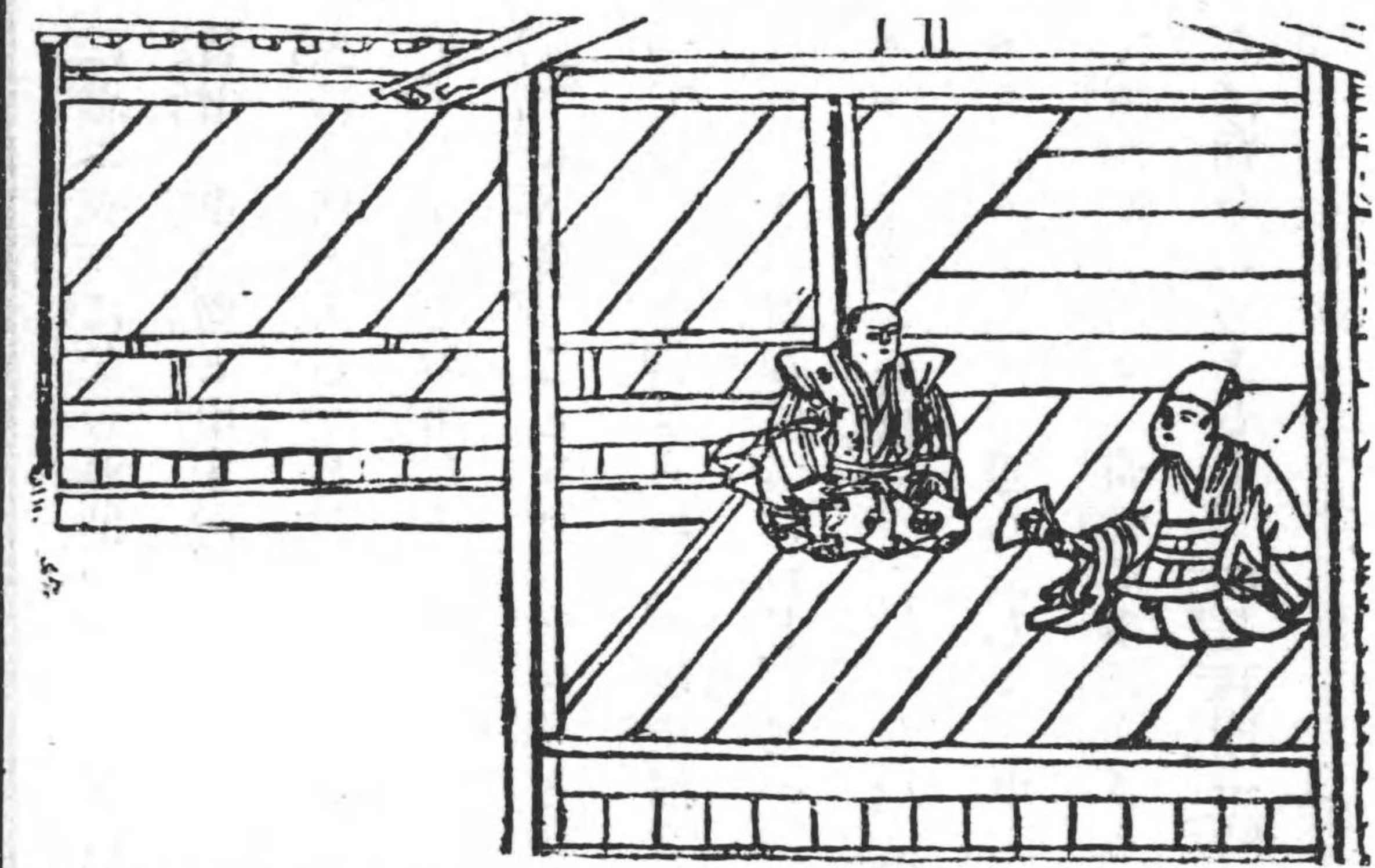
九品極樂往生の等級にて上中下の三品に各上中下の三生あり上品上生が最上也
がうけはつたる一剛け張りたるか強力の意なるべし

那なり。しかるべくは閻魔王、この罪人の、九品の淨土に送り給へ。それもならずは、地獄の釜をば蹴破るべし。おう、がうけはつたる罪人なく。▲シテこの上は力なし。
▲二人この上は力なしとて、罪人の手を執つて、閻魔王の案内者にて、九品の淨土へ送り給ひ、それより地獄へ歸りしが、又立ち歸り、さるにても、あら名残惜しの罪人や、くとて、鬼は地獄にかへりけり。

布施ない一名

常齋朝の食事

動讀經



七 布施ない

二人 シテ 頭巾、袈裟、衣、珠數持
アド 長袴、小き刀

▲シテこれは、常寺の住僧でござる。今日は誰どのと申す方へ、常齋に参る筈でござる。参らうと存する所に、又さる初めてのお方から、参つてくれいと仰せられ、餘儀無うてこれへ参り、只今歸りました。常齋のこととござる。定めて待ち兼ねてござらう程に、只今からなりとも参り、勤ばかりなりと致して歸らうと存する。又これへ参れば、定めて鳥目十正つつの布施物を下さるよ。一つはこの下心もござり、まづ、そろく参らう。まこと

非時—午後の食
事
貧僧の重ね齋—
診

に思ふやうにならぬ世の中でござる。どちらぞを非時にすればようござるに、ちやうど貧僧の重ね齋と申すが、これでござる。参るほどにこれぢや。ものもう。案内もう。▲アド表に案内とある。どなたでござる。▲シテいや、私でござる。▲アドやあ、お住持様でござるか。ようこそお出なされました。今朝は待ち兼ねて居りました。▲シテさうでござらう。私も常齋のことなり、参らうと存する所に、さる初めてのお方から、是非とも齋に参つてくれいと仰せられて、餘儀無うこれへ参り、只今歸りました。定めて待ち兼ねてござらう。遅なはつたれど、せめて、勤ばかりなりと致して歸らうと存じ、参りました。▲アドようこそお出なされました。御勤をなされて下され。まづかうお通いなされませ。▲シテ心得ました。通りましょ。申し、こなたには、何時参つても持佛堂を綺麗にして置かせらるよ。奇特な事でござる。▲アドいや、さやうにもござりませぬ。▲シテさば勤を始めましょ。如是我聞一時佛在須菩提王、三千大千世界。やあ、日外は見事な花を下されました。▲アドされば、進せましたが、御役に立ちましてござるか。▲シテ折節寺

奇特—神妙

に客がござつて、佛前にたてましたれば、扱も見事な花ぢやと云うて、皆褒物でござつた。▲アドそれは役に立ちまして、満足に存じます。▲シテさらやく。佛説功德布施且息災延命。詞やあ、あの花は庭前にござるか。またどれからぞ賞はせられたか。▲アドいや、私の庭前にござります。▲シテそれなら、あの花の種を貰うて植ゑましょ。▲アドいかに進せましょ。▲シテ必ず忘れさせらるよな。▲アド心得ました。▲シテ經南無きやらたんのふとらやく。もはや勤をばしまひました。かう参ります。ちと寺へもお出なされ。▲アド畏つてござる。参りましょ。▲シテさらば。▲アドようござりました。▲シテこれは如何なこと。お布施の沙汰がない。忘れられたものであらう。但し今日は遅う参つたによつて、くれられぬか知らぬ。いや、このやうな事は、必ず例になりたがるものぢや。教化にこと寄せて取つて参らう。申し、ござるか。▲アドやあ、これはまだお歸りなされませぬか。▲シテいや、もはや歸りますが、何時ぞはこなたに教化を致さうくと存じますれど、終に教化致したこともござらぬ。何と、今日はお暇ではござらぬか。

教化—説教

▲アドなかく。暇ひまでござる。忝かたじけなうござる。教化けうかなされて下くだされませ。▲シテそれなら、まづ通りましよ。▲アドお通りなされませい。▲シテ扱けうけ教化と申して、別べつして格別かくべつな事もござらぬ。まづ人間の果敢はかないことを申さば、電光でんくわう、朝露てうろう、石の火、風の前の燈火とほしび、朝顔あしがほの花はななどにも喻たとへおかれてござる。朝顔の花と申すものは、御存ごぞんじでござらう、早朝さうてうに開ひらき、日の出でれば凋しぼみ、夕ゆふべにははらりと落おつる、果敢はかない物でござる。▲アドなかく。左様さやうでござります。▲シテまだ朝顔の花は、朝開あさひらけ夕ゆふを待まちつ樂たのしもござる。人間の果敢はかないことを申さば、出る息いき、入る息を待まちたぬ世よの中でござる。果敢はかないことことでござる。▲アド最もつじ左様でござります。▲シテ又佛説ぶつせつにも、傳法でんぽうせんと欲ほつせば、供佛くぶつ、施僧せそう、捨身しゃしんの専もつらとせよ。雲くもとなり雨あめとなる不晴ふせい々々の時ときと、説ごかせられた。かう申しては合點がてんが參まるまい。これを一々いちいち和やはらけて申す時は、傳法でんぽうせんと云ふは、よき法ほつを傳つたへんと思はど、佛ぶつに佛ぶつ具ぐを供そなへ、施僧せそうと申して、我等われら如ごときの貧僧ひんそうに、何なんでも施ほすを施僧せそうと申す。又捨身しゃしんを専もつらにせよと云ふは、身みを捨すつると書かいた字じぢや。さういうて、この身を淵河ふちがはへ持もつて行いて、

不晴—布施ほせをきかす

捨すてるではない。唯世たひを厭いとふと厭いとはぬ事ことぢや。後世ごせのことならば、身みも命いのちも惜おしまず、財さい寶ほうも擲なげつて後世ごせを願ねがへと云ふ事ことでござる。又雲くもとなり雨あめとなる。これは世間せけんにある事ことぢや。或あるひは只今ただいままでこれをあの人ひとに何程なんぢやうやらうと思おもうたを、不圖ふと惜おしいと思おもうてやらぬ心こころが出來できる。その惜おしいと思おもふ心の出來できたところが、晴天せいてんに叢雲じゆうくものかよつたやうに、雲くもとなり雨あめとなりでござる。▲アド尤もつとでござります。▲シテ何なんと、合點がてんが行いきましたか。▲アドなかなか。合點がてん致いたしました。▲シテ又不晴ふせい々々の時ときと申すは、晴はれやらす、晴はれやらぬ時ときと云ふことことでござる。唯今ただいまも申すごとく、彼かの遣やるものは、さらりくとはれやり、又取とるものもさらりくと取とつて、とかく晴はれやつたがようござる。又先まづの貴きぶ者の身みになつて見たみたがようござる。いつも、物を何なんかかくれらるらよが、今日けふは忘わすれられたか、但ただし惜おしいと思おもうてかと、心こころに千萬せんまんの罪つみを作る。すれば大きな科かぢや。その科かを作る者の科かではござらぬ。いつも遣やる物をやらぬによつて、とやかうと作つくる故ゆゑ、皆みなそのやらぬ者の科かになります。とかく遣やる物は、さらりくと晴はれやらしやれ。▲アド畏おそつてござる。▲シテまづ

遇ふ時は云々
出典未詳

教化と申すも、これまででござる。又寺へも御出なされ。重ねて教化いたしましたよ。合
 點が參つたの。▲アドなかく、合點いたしました。▲シテ合點が行けばようござる。さら
 ばかう參らう。なうく、不圖おもひ出した。或歌にもござる。遇ふ時は、語りつくす
 と思へども、別となれば残る言の葉と、申して、遇ふ時には忘れて居て、必ず別になれ
 ば、何を云はうもの、いや、ものを遣らうものと思ふものぢや。何も忘れさせられた事
 はござらぬか。▲アドいやく、何も忘れは致しませぬ。もはや御歸りなされますか。▲シテ
 さらばでござる。▲アドちと御酒でも參つてござりませぬか。▲シテはて扱こなたは、氣を
 つけさうなことには附けはせいで、身共がどこに酒を飲みます。▲アドまことに參らぬを
 忘れしました。▲シテもはや參る。▲アドござりまするか。ようござつた。▲シテはあ、これは如何
 なこと。今のほどに手を執つて引き廻はす様に云うても、合點しられぬ。何とせう。合
 點しましたくとあれば、何を合點した知らぬ。扱も是非もないことかな。いやく、
 もはや思ひ切らう。まことに受けこひぬれば、こんりいたす。受けこはぬ時は、長く生

參らぬ一酒を飲
まぬ

こんり一様離敷

錢の周これ
布施を調する語
ふせ一習ふ意上
り布施をきかす

死に落つる。彼の十正の布施物を二つに押し切り、大海へさらりくと投げ、無有も無
 もなうして往ぬるに、何の往なれぬことかあらう。あよしない事を、くどく思うた
 ことかな。往なうくとは思へど、又彼の十正の布施物を取ると取らぬは、愚僧が身の
 上では大分の違ちや。何とぞして取りたいが、やあ、思ひつけた。方便の以て取らう。申
 しくござるか。はて不思議な事かな。▲アドやあ、まだ歸らせられぬか。何ぞ見えませ
 ぬか。▲シテされば、不思議な事でござる。最前教化をいたす時、私は袈裟をかけて居ま
 したとも覺えます。又とつて下に置いたとも覺えますが、若し跡にはござりませぬか。
 ▲アドされば、存じませぬ。尋ねませう。▲シテいやく、尤も私の袈裟には印がござる。
 出たらば後から持たして下され。他所から歸つて、竿の端に掛けて置きましたれば、鼠
 がちやうど錢の周ほど食ひました。それを小僧が、十正のふせ物を、あちらへふせやり、
 こちらへふせ起し致しました。これが印でござる。いつそ此穴をふせ縫がう、ふせ縫ひ
 にいたさうと存じました。今につぎもいたさぬ。出ましたら後から持たして下され。も

はやかう参る。▲アア申し、それにつき、ちと用がござる。まづ待たせられ。▲シテ心得ました。▲アアやれ、いつも十疋の布施物を遣します。これを忘れてやらぬにより、何かと云うて歸らるよ。遣さうと存する。申し、▲シテ何事でござる。▲アア忘れたことがござる。いつも進めます布施物を、はつたと忘れました。取つて歸らせられて下され。▲シテ忘れたと仰せらるよは、これでござるか。▲アアなか。▲シテはて扱あなたは律義な。それを今日取らぬと申して、何と存じましょ。重ねてついでもござらう。もはや歸ります。▲アアいや、進ねば氣にかよります。是非とも取つてござれ。▲シテいや、何程仰せられても、今日は取られぬ事がござる。▲アアそれはどうした事でござる。▲シテ最前から教化を致さうの、袈裟が見えませぬのと申して歸つたは、この布施が欲しさにと思召す前もござる。どうあつても取られませぬ。▲アアいや、是非共に。▲シテいや、こなたへ預けます。▲アアいや、どうでも取つてござれ。はあ、申し、これ袈裟が出ました。▲シテはあ、扱もめでたい事がござる。▲アア何事でござる。▲シテ御布

前―手前と同じ

やくたもない
袈裟も無い、ツマ
らぬ

施を下されたれば、袈裟まで出ました。▲アア何のやくたもないこと。とつとござれ。▲シテはあ、面目もござらぬ。なう、恥かしや。

八米市

七人

シテ 半上下、棒擧げ出る
アド 皆々長袴、小き刀

▲シテこれは、この邊の者でござる。一日々々と暮す程に。今日ははや、大晦日になつてござる。世間を見ますれば、仕舞好うして、歳暮の禮などに歩く人もあるに、私は仕舞ふことは措いて、何を一色、年とり物を調へもいたさぬ。氣の毒な、しまひかねた事でござる。又こよに誰殿と申して、私に御目をかけらるゝ御方がござる。何時もこれから定めて、年とり物を御合力なさるゝが、今に沙汰がない。これから参らねば、何とも年を取らうやうもない。只今かう参つて、御氣の附くやうに申して、貰うて参らうと存ずる。その下心で、この棒を持て参る。まづ急ぎ参らう。やれく誠に、来る年もく、この如くにしまひかねて、迷惑な事でござる。まるるほどに是ぢや。ものもう。御案内も。▲アド表に案内とある。誰ぢや。▲シテいや、私でござります。▲アドやあ、わぢりよか。

御合力御加勢の意めり

晩じた一暮れた
ふせいー不精也
精を出さぬこと

半石の又半石ー
五斗の半分なり
二斗五升也

定めてしまつて、歳暮の禮に出られたか。▲シテいや、まだ仕舞ひましたやら、しまひませぬやらでござります。▲アドはて扱、今日は大晦日、もはや日も晩じたに、まだしまはぬとは。それも常々働がふせいなによつてぢや。▲シテ私も随分常にも稼ぎますれど、何と致しましたやら、この如くにしまひかねまして、迷惑致します。▲アドはて扱、それは苦しいことぢや。それにつき、いつも其方へ遣す合力米は行たか。▲シテいや、まだ参りませぬ。▲アド何と、まだ行かぬか。それなら云ひつけてやらう。▲シテそれは忝うござります。▲アドやいく、いつも誰へ遣す合力米はやつたか。何と、藏をしめ松飾をします。ちとでも出たはないか。何と、半石の又半石出たがあるか。それは少いなあ。なう、藏をはや締めて、飾をしたによつて、出たが無いと云ふが、半石の又半石あるが、これなりともまづ遣らうか。▲シテそれは忝うござる。それ程ござれば、ざつと年を、夫婦の者が取ります。▲アドそれなら、遣らうほどに、まづそれに待ちやれ。これく、これを遣る程に取つて行て、姥にも見しやれ。▲シテ忝うござります。取つて歸り、喜ばしま

しよ。▲アド又春、藏を開いたら、早々遣らうぞ。▲シテそれは愈忝うござります。それにつきまして、今日路次で、近附に逢ひましたれば、棒を言傳てました。棒にかけて参りましょ。▲アドいかに、よかる。▲シテ申し、これ程なものが、此方にも一つござればようござるが、片荷すつて持たれませぬ。▲アドさうであらう。▲シテやあ、幸どれからぞ負うて参つたやら、負繩がござる。負うて参りましょ。▲アド一段よかる。手をかけてやる。さあ立て。▲シテはあ、丁度よいわ。▲アドまづ早う歸つて仕舞やれ。▲シテ毎年々々御蔭でしまひます。忝うござります。もはや御暇申します。▲アドお行きやるか。ようをりやつた。▲シテはあ。なうく、嬉しやく。まんまとまづ合力米は貰うた。さりながら、いづもおごう様から、女ども方へ、古著の御小袖を下さるよ。これは忘れさせられたか、沙汰がない。これも序にお氣の附くやうに申して、貰うて参らう。申し、ござりますか。▲アドやあ、わごりよはまだ往なぬか。▲シテもはや歸りますが、女どもが、おごう様へお言傳申しましたを、失念致しました。▲アドそれは何と云ふ言傳ぞ。▲シテまづ近い正月

おごう様—女の
尊稱也こゝは奥
様のこと

でござります。定めて正月お小袖が、出来ましたでござりましょ、姥らは寒うてこそ居ります。春暖になりまして、お小袖を見に参りませうでござりますと申して、御言傳を申しましてござります。▲アドそれはようこそ言傳をしられた。それにつき思ひ付けた。いつもおごうが方から、其方の女房へ古著を遣すが、それは行たか。▲シテいや、まだ是も参りませぬが、それはようござります。▲アドいや、よいと云ふ事はあるまい。云ひつけてやる。これく、いつも遣る物忘れた。さあく取つて行かしめ。おごうが方から、著古したれど遣すと云うて、女房衆へやりやれ。▲シテこれは結構なお小袖を、忝うござります。女どもに見せて喜ばしましょ。さてこれを、どうして持つて参りましょ。後の俵と相應致さぬ持物でござる。▲アドまことに相應せぬが、やあ、致しやうがある。こちへおこしやれ。此俵に打ちかけてやらう。これく、ようをりやる。それでは俵もかくす、その儘人を負うた様なわ。▲シテやあ、人を負うたやうなと仰せられますが、時分柄でござる。若し道で人が咎めましたら、何と致しましょ。▲アドそれはよいこ

儀藤太云々藤原秀郷を儀(元は田原)藤太と云ふよりこそはその秀句を用ひたる也

とがある。若し人が答めたらば、儀藤太のお娘御、米市御寮人の御里歸りぢやとおしやれ。▲シテさてもく、まづは儀につき米市、面白うござります。それなら女共も、待ち兼ねて居りましょ。かう参りましょ。まづは御蔭で年を取ります。春は早々夫婦連で御禮に参りましょ。▲アドいかにも、早々御出やれ。さらばく。▲シテはあ。なうく、嬉しやく。まんまと二色ながら貰うた。まづ歸つて女共に見せて喜ばせう。まことに結構なお方ぢや。あの様な人が無ければ、身共は立たぬ。はあ、大勢歳暮の禮に行く人が来るよ。▲立衆 何れもござるか。▲立衆 四人 皆々これに居ります。▲立衆 いざ、歳暮の禮に参らう。▲四人 なかく、参りましょ。▲立 なうく、あれを見させられたか。人を負うて参る。何人ぢや。尋ねて見ましょ。▲四人 ようござろ。問はせられ。▲立 これく其處な人。▲シテ ouchi no koto ka. 何事ぢや。▲立 其方の負ひまして居るは、どなたぢや。▲シテ 何と、この御方か。▲立 なかく。▲シテ 是は儀藤太のお娘御、米市御寮の御里歸りぢや。▲立衆 夫ならちと用がある。待つてくれさしませ。▲シテ 用はあるまいが、待てなら待たう。さればこそ答むる

人體―相當の人柄

聊爾―粗相

なかくてもない―勿論盃はならぬの意

わ。▲立 なうく何れも、米市御寮は承り及うだ美人ぢや。いざ盃を望みましょ。▲四人 一段ようござろ。▲立 これく、御寮人のことは承り及うだ美人ぢや。盃を戴きたいと皆云はるよ。どうぞ頼む。盃をさしてたもれ。▲シテ はてさて、わごりよ達は人體と見えたがこ、の途中で、その様な事がなるものか。それはならぬぞ。▲立 尤もさうでをりやれども、これはよい所で御目にかよつた。どうでも盃が戴きたい。どうぞ好いやうに申して、さしてたもれ。▲シテ はてさて、聞き分もない。その様な聊爾なことがあるものか、それはならぬことぢや。さりながら身共はさう思へど 又お御寮の何と思召すも知らぬ。まづ伺うて見よ。とつとそちへ寄つて居りやれ。▲立 心得たく。伺うて、なるやうにしてたもれ。▲シテ 必ずこちを見やるな。申し、あれに居られます若い衆が、こなたのこゝと聞き及び、是非とも御盃を戴きたいと申されます。はあ、御尤でござります。私もさやうに存じました。その通申しましょ。これく若い衆、伺うたれば、たとへ人が云ふとも、その様なことを取り次ぐものか、なかくてもないと云うて、殊の外おむづかる

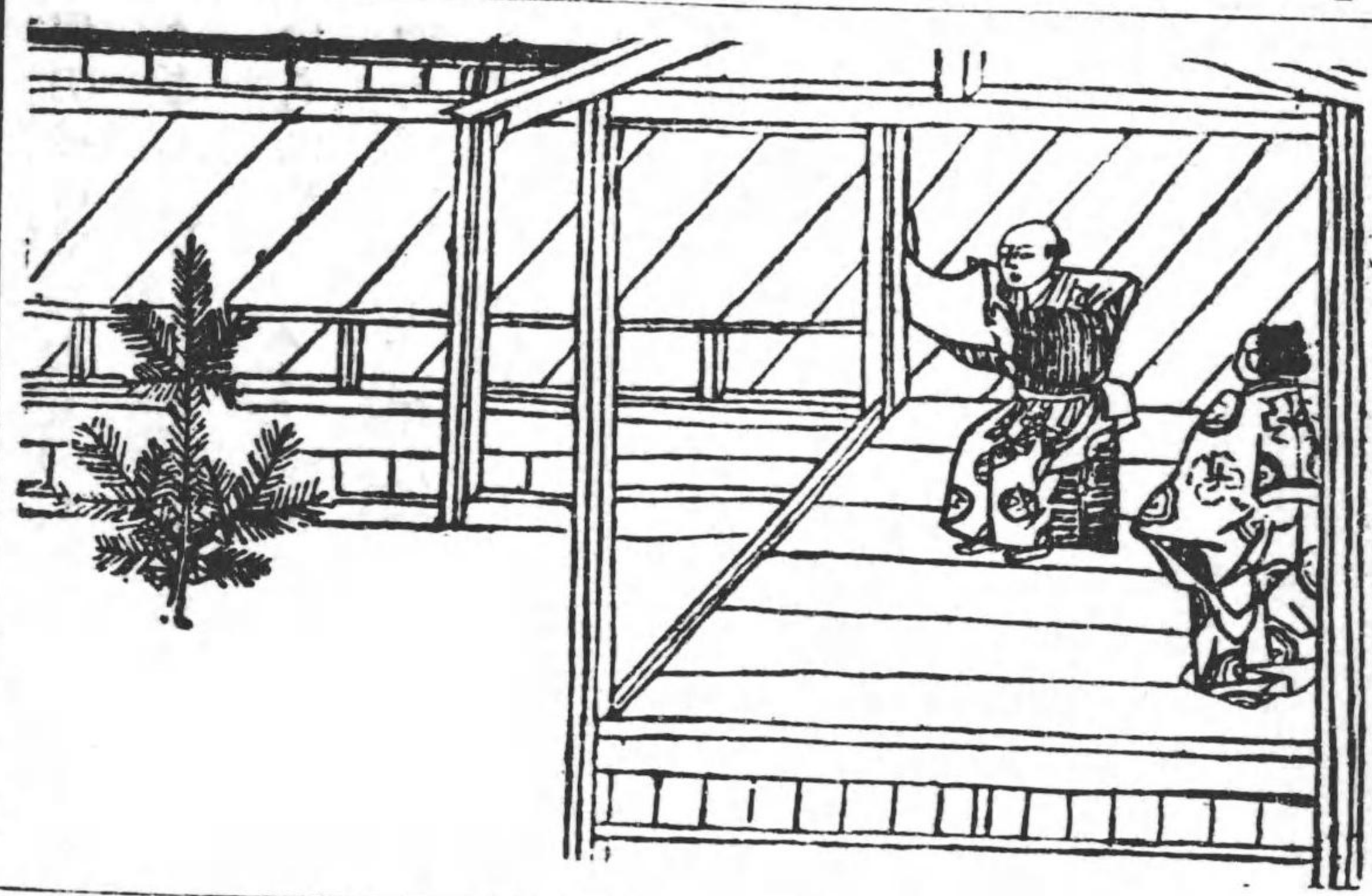
如才一原本如在
に作る

によつて、ならぬぞ。▲立はてさて、それは聞えぬ。其所をわごりよに頼む。よいやうに申して、是非とも、御盃をさしたもれ。▲シテ身共も如才でない。ならうかと思つて申し上げたれど、おむづかるによつてならぬ。思ひ切りやれ。ならぬぞ。ふつとりとならぬ。▲立やあ、わごりよは、若い者共が、これ程いろくくと最前から頼むに、聞えぬ。此上は厭でも應でも、盃をせねばならぬ。若しならねば、目に物見せうぞ。▲シテそれは無理な事を云ふ。目に物見せだてしたと云うて、何程の事があらう。おいてくれ。▲立悔むなよ。▲シテ悔むことはないぞ。▲立おのれ憎い奴の。たつた今思ひ知らせうぞ。さあ、いづれも、とかく埒が明かぬ。皆寄せさせられ。▲四人心得ました。▲五人えいとうえいとうく。▲シテおのれら何程の事があらう。▲五人扱もく、強い奴でござる。何とせうぞ。▲立これく、身共は後から廻つて、あの御寮人を連れて参らうほどに、又いづれもは、も一度寄せさせられ。▲四人心得ました。えいとうくく、▲シテえいとうく、えいく、おう。▲四人さてもく、強い奴でござる。▲立はあ、これは騙された。俵ぢや。

何の役に立たぬものぢや。何れも歸らせられく。▲四人扱もく、騙されたことかな。▲シテやいく、これと盃がなるならせいでな。▲立おのれ、これと盃がなるものか、いらぬやい。▲シテやあく、盃をせいでな。さうもをりやるまい。それなら、これは身共取つて歸つて、年取物にするわやい。

鎧一名鎧腹巻

御道具競一道具
を見せ合ふこと



九 鎧

三人

シテ 半上下、腰帶
主 長袴、小き刀
アド 長袴、小き刀

▲主 罷出でたる者は、この邊に住居致す者でござる。この間の、彼方此方に御道具競は、夥しい事でござる。それにつき、この度は鎧をくらべさせられうとある。身共が内に、鎧が有るか存せぬ。まづ太郎冠者に尋ねうと存する。やい、太郎冠者存るかやい。▲シテ はあ、御前に居ります。▲主 念なう早かつた。汝喚び出すは別の事でない。このごろの、彼方此方に、御道具競は、夥しい事で

をどす物一鎧の
絨(をどし)の事
と人を嚇す事と
を間違ふる也

南無三寶一これ
はしたりの意

はなかつたか。▲シテ 御説の通、夥しい事でござる。▲主 それにつき、この度は鎧をくらべうと仰せらるゝが、身共が藏に鎧があるか。▲シテ されば、御道具は残らず預りました。が、鎧と申す物は存じませぬ。▲主 汝が知らずは有るまい。何と都には有らうか。▲シテ なかく、都にはござりませぬ。▲主 その義なら、汝は都へ上り、鎧を求めて来い。▲シテ 畏つてござる。▲主 序に、ざつくと著てをどす物も買うて来い。▲シテ 心得ました。▲主 もはつてござる。▲主 序に、ざつくと著てをどす物も買うて来い。▲シテ 畏つてござる。▲主 えい。や行くか。▲シテ かう参ります。▲主 行たらば頓て戻れ。▲シテ 畏つてござる。▲主 えい。▲シテ はあ、やれ、俄なことを仰せつけられた。まづ都へ上り、鎧を求めて参らうと存する。まづ、そろく参らう。都へ上つてござらば、これを序に致して、此所彼所を見物致さうと存する。やあ、何かと申すうちに、これが都でござる。南無三寶忘れた事がある。かの鎧と云ふ物が、どの様なものやら、又何所許にあるも知らぬ。何と致さう。やあ、流石都ぢや。知らぬ物は呼ばはつて廻れば、調ふと見えました。私もこれから呼ばはらう。なう、其所許に鎧屋はないか。鎧買はう。▲アド これは、都に隠れもない、

心も素直すなはに無い者でござる。見れば田舎者いなかものが、何やらわつばと申す。ちと當あたつて見やうと存ぞんずる。なうく、これく。▲シテやあ、こちの事か。何事でござる。▲アドなかく、其方そなたの事ぢやが、何やらわつばと云うて尋ねらるゝが、何でをりやる。▲シテ私は田舎者でござるが、鎧よろひが求めたさに、この如ごとくに呼ばはります。▲アド何と、其方そなたは、その鎧と云ふを見知つてをりやるか。▲シテやら、此方こなたには都人みやこびととも覺おぼえぬ。夫を見知れば是を求むると申せども、存ぞんぜぬ故ゆゑにこの如ごとくに呼ばはります。▲アドこれは身共みどもが誤あやつた。其方そなたは仕合しあな人ぢや。身共みどもは鎧屋よろひやの亭主ていしゅぢや。鎧よろひが望のぞみなら賣うつてやらう。それに待たしめ。▲シテそは忝かたじけうござる。見せて下され。▲アド心得こころえたく。やれく田舎者で、何も知らぬと見えた。これに鎧よろひの注文ちうもんがある。是を鎧よろひぢやと申して、賣うつてやらうと存ぞんずる。なうく田舎衆いなかしゅ居ゐりますか。▲シテこれに居ゐります。▲アドこれく、是が鎧よろひでをりやる。これを讀ようで見れば、鎧よろひの仔細しさいが知れる。その上、是を頭かしらに戴いたげば甲胸かぶせほに當あつれば腹巻はらまき、こてに當あつれば籠手かごて當あつれば臍すねに當あつれば臍當すねあてでをりやる。▲シテいかにも合點がてん致いたしました。さて、ざ

腹巻—鎧の如くにして袖無き物

路次—途中
代り—代金

つくと著きておどすものも欲ほしうござる。▲アドそれもなるほどある。賣うつてやらう。それに待ちやれ。▲シテ心得こころえしました。▲アドこれく、このなかにおどす物が入いれてある。必ず路次ろじで明あけて見やるな。持つて歸かへり、頼たのうだ人の前まへで明あけて見やれ。▲シテ忝かたじけうござる。二色ふたいろの代物だいぶつは何程いかにでござる。▲アド萬正まんじやうでをりやる。▲シテいかにも求もとめましたよ。代かりは明日あした三條さんじやうの大黒屋だいこくやで渡わたしましよ。▲アドなかく。あれで受取うけとらう。もはやお行きやるか。▲シテなかく。▲二人さらばく。▲アドようをりやつた。▲シテはあ、なうく、嬉うれしや嬉うれしや。まんまと二色ふたいろながら求めた。まづ急いそいで歸かへり、御目おめにかけう 定さだめて待まちちかねてござる。これを見みせたらば、御機嫌ごきげんであらう。歸かへるほどにこれぢや。申し、頼たのうだ御方おなたござりますか。▲主まやあ、太郎冠者たろうくわんじゃが戻もどつたと見えた。戻もどつたかく。▲シテござりますか。唯今いま歸かへりました。▲主まやれく骨折ほねそりや。何と鎧よろひを求もとめて來きたか。▲シテなかく。求もとめて參まゐりました。急いそいで御目おめにかけましよ。▲主ま早はやう見みせい。▲シテ畏かしこまつてござる。申し、是こゝが鎧よろひでござる。▲主ま何と、それが鎧よろひぢや。▲シテなかく。▲主まその書かいた物を鎧よろひと云ふ

緋緘—好き日と
續けたり紅絲に
て緘すこと
著香長—鏡のこ
と
小櫻緘—紅白の
絲を交へて緘し
又は小櫻革(藍
染の地に白く小
き櫻花の模様あ
る革)にて緘し
たる鏡
卯の花—卯の花
緘は白絲を用ゐ
る
洗革—桃色に染
めたる革
勝色—褐色、軍
に勝つ意に續け
たり

には仔細があるか。▲シテなかく、仔細がござる。これを読みますれば、鎧の仔細が知れます。よう聞かしましよ。▲主それなら讀うで聞かせい。▲シテ畏つてござる。鎧へ恐れでござる。床几にかけて讀みましよ。さらば讀みます。よう聞かせられ。語初春のよき緋緘の著香長は、小櫻緘となりにけり。さて又夏は卯の花の、垣根の水に洗革。秋になりてのその色は、何時も軍に勝色の、紅葉にまがふ錦革。冬は雪けの空晴れて、甲の星も菊の座も、皆華やかにこそをどし毛の、馬の上にて、無手と組み、くみの上帯引締めて、思ふ敵をうち糸や、長くわが名はあけまきの、いはるの上の塵とりて、大づつしゆくわい据ゑる井べ、唄ひ、酒もり、舞遊び、弓は袋を出さずして、劍は箱に納むれば、治まる御代とぞなりにけり。秘すべしく、口傳にあり。▲主尤も聞えた。その口傳にあると云ふは、どうしたことぢや。▲シテその事でござる。これをこの如く卷きまして、頭に頂けば甲、手にあてますれば籠手、腹に當つれば腹巻、臍に當つれば臍當でござる。▲主さては調法な物ぢや。又ざつくと著て、をどすものを求めて來たか。▲シテなかく、

錦革—紫地に白
く模様を染出せ
る革
甲の星—兜の鉢
の粒状の物
菊の座—胃の頂
上八幡座のこと
あげまき—鏡の
背につけたる總
角結のこと我が
名は上ぐと續け
たり
いはめの上—岩
井の水とあるべ
きか
大づつ—大筒は
鏡の胴の事と云
ふ
しゆくわい—手
蓋か籠手當のこ
と
口傳—口づから
奥儀を傳授する
こと

求めて参りました。お目にかけましよ。いで、食はうく。▲主なうく、怖しやく。太郎冠者が鬼になつたく。▲シテいで、食はうく。▲主あゝ悲しやく。▲シテ取つて嚙まうく。▲主なうく怖しやく。許せく。▲シテいで、くらはう。

十 雙六僧

三人

シテ 角帽子、水衣、大口、太刀佩く
ワキ 水衣、頭巾
アヒ 長袴、小さ刀

遠近の云々道
行誦也曲にか
る
てうす袋―未詳

▲ワキ次第 我は貴く思へども、く、人は何とか思ふらん。謂これは東國方の者でござる。某諸國修行申さず候間、この度思ひ立ち、北國にかより、それよりまた西國修行いたさばやと存じ候。遠近のたづきも知らぬ修行者を、く、たれか哀とおもふらん。彼方此方で鉢開き、知らぬ所に著きにけり。謠やあ、これなる石塔を見候へば、でうす袋を數多かけ置かれて候。これは如何様仔細の候べし。所の人に尋ねばやと存じ候。所の人の渡り候か。▲問所の者のお尋は、如何なる御用にて候ぞ。▲ワキこれなる石塔を見申せば、でうす袋を數多かけ置かれ候。いはれの無きことは候まじ。教へてたまはり候へ。▲問御不審御尤にて候。あれは古、この所に雙六僧と申して、雙六打の候ひしが、ある

目一賽の目也

一雙―謠ふし
おくれを打つ―
不詳

時雙六の上にて口論の致され、對手を切り殺し、その身も當座に相果て申され候。即ちその僧の標にて候。それにつき、不思議なる事の候。この石塔に袋をかけ候へば、雙六の目が、思ひのまよに出ると申して、今において、かやうに袋を掛け申すことにて候。御僧も逆縁ながら、弔うて御通あれかしと存じ候。▲ワキ懇に御教へ、満足申し候。さあならば、逆縁ながら弔うて通らうするにて候。▲問又御用候はど、おほせられ候へ。▲ワキ頼みましょ。▲問心得ました。▲ワキ謠扱は雙六僧の舊跡かや。いざ、跡とひ申さんと、鉦からくと打鳴らし、今宵はこよに旅寝して、かの御跡をとふとかや、く。▲シテ一雙雙六のおくれを打つ、その心、半一つばかりのたのみなりけり。▲ワキ不思議やな。これなる塚のかけよりも、まほろしの如く見えたまふは、如何なる人にてましますぞ。▲シテ謂これは雙六僧と申す雙六打の幽霊なるが、御弔ひのありがたさに、これまで現れ出でたるなり。▲ワキ雙六僧の幽霊ならば、最期のありさま語りたまへ。跡をば弔ひ申すべし。▲シテ謂さあならば、昔のありさま、語りて聞かせ申すべし。跡を弔うて給はり候へ。さて

朱三云々以下
曲にかゝる朱
三、五六、三六
などすべて賽の
目の名
四の二一死にの
意に言掛く
五二一鬼と言掛

も、ある徒然のことなるに、例の友達打ち寄りて、競ひおくれを打ちけるに、相手の曲者石を撒き散らす。こは如何にと怒りて、腰の刀に手をかくる。朱三さらりと引抜けば、地く、五六のやうなる相手もぬき持ち、白黒になつて、追うつまくつつ、鎗をけつり、切つつ切られつ、われはおくれになりしかば。▲シテ敵はじと思ひて、地かなはじとおもひつと、三六かけにかどむ所を、つどけ切に切り立てられて、われは其所にて四の二けり。四三をはなれて五二となつて、修羅道に落ちにけり。▲シテあよら、ものくし、いざ、うたう。あよら、苦しや。かやうに、苦を受くる事、雙六の、地最期の一念悪鬼となつて、修羅道の苦しみななるを、助け給へや御僧よ、くくと、云ふかと思へば失せにけり。

狂言記外編

卷之一

一張 蛸

三人
大名 立烏帽子、素襖、袴、小き刀
冠者 半袴、腰帶、
盗人 長袴、小き刀

▲大名御存じの者。天下をさまり、めでたき折からでござる。毎年一門中を、呼び入れまする。太郎冠者を呼び出し、申しつけまうせうと存ずる。あるかやい。▲くわじや お前に居まする。▲大名そちを呼ぶも、別の事でもない。毎年一門振舞をする。いつもの如く、張蛸を高盛にせう。そちは、都へ上つて、張蛸を買うて来い。▲くわじや 畏つてござる。さりながら、どのやうなる物でござる、存せぬ。▲大名隠れもない物ぢや。疣がたくさんに

呼び入れ招待
まうせうませ
う也
張蛸一千蛸のこ
と
隠れもない物
有名なる物



あるものぢや。買かうて来こい。▲くわじや 心得こころました。▲大名だいめいやがて戻もれ。▲くわじや 畏おそつた。▲大名
 えい。▲くわじや はあ、旦那だんなのやうに、急きゆうに物をいひつけて、只今ただいまから都みやこへのほり、はりだ
 こを買かひ取とつて参まれと申まさるよ。さりながら、上のほらずばなるまい。まづ、そろりく上のほり
 まうせう。参まる程ほどに都みやこさうな。まづ 賑にぎやかな事ことぢや。さてく、はつたと失念しつねんした。はり
 だこのあり所ところを問とうて参まらなんだ。何なにと致いたさうぞ。さてもく、都みやこの者ものは、知らぬこと
 は呼よばはつて通とほる。某それがしも呼よばはつて歩ありませう。張はり蝮だま買かひませうくく。▲盗人たうじん都みやこに
 隠かくれもないすつばでござる。田舎者いなかものが、何事なにごとやら、呼よばはりまする。この者に、あたつ
 て見みませう。これく。▲くわじや 何事なにごとぞ。▲盗人たうじん其方そのほうは、何なにを呼よばはつて通とほるぞ。▲くわじや
 某それがしは田舎者いなかものでおぢやるが、はりだこを買かひたい處ところで、呼よばはりまする。▲盗人たうじんそなた
 仕合人しあひまぢや。▲くわじや なぜに仕合人しあひまとおぢやるぞ。▲盗人たうじん某それがしがはりだこを賣うる亭主ていしゆぢや。
 ▲くわじや まことに、お目めにかよつた事は、仕合人しあひまぢや。はりだこ見みせて下くだされ。▲盗人たうじん其方そのほう
 ははりだこ見み知しつたか。▲くわじや いやく、見たみたことはをりない。▲盗人たうじん追付おつつけお目めにかけま

合人仕とわやぢ
 るぞ一刊本かく
 あり仕合人と仰
 (おしや)るぞ
 か或は仕合人て
 おぢやるぞか

疣があるわし
の足の疣と太鼓
の胴の紙とを問
違ふる也
きびのよい一氣
味好く云ふがま
まにあつさり
買へる意

うせう。▲くわじや 早うく見せて下され。▲盗人心得た。田舎者で、何を知らぬ。ことに古い太鼓がある。はりだこぢやと云うて賣らう。これく。▲くわじやこれがはりだこか。▲盗人 其方のいふは、はりだこ。左様ではござらぬ。はりだここと云ふ物ぢや。▲くわじやそれなれば、おほえごこなうてござる。張太鼓でござるか。▲盗人 なかく。この如く、皮を引張り申するによつて、張太鼓と申す。▲くわじや また、疣がたくさんにあると申されてござる。▲盗人 これく、疣こそあまたござれ。▲くわじや あゝ、疣があるわく。買ひませうが、代物はいか程ぞ。▲盗人 五百疋でござる。▲くわじや 則ち、五百疋に買ひまうせう。▲盗人 代物は、何方で受取らうぞ。▲くわじや 三條の大黒屋でわたしませう。▲盗人 めでたう、大黒屋でうけとりませう。そなた程、きびのよい買手もない。みやけに、主の機嫌直しする噺子物教へまうせう。▲くわじや それは何より忝ない。何と。▲盗人 耳のはたに。▲盗人 これこれ、今の如くにおしやれ。▲くわじや おほえました。忝なうござる。▲盗人 さらばく。▲くわじや やれく、うれしい事かな。早う持つて下らう。まるる程にこれぢや。申しく。

ぬかれて一だま
されたること

冠者が歸りました。く。▲大名 やれく、戻つたか。く。はりだこ求めて来たか。早う見せい。▲くわじや 心得ました。これく。▲大名 そちは、子供へみやけに、太鼓を持つてきたか。まづ、はりだこ見せい。▲くわじや はりだこではござらぬ。張太鼓が本でござる。即ちいほも澤山にござる。▲大名 おのれめは、都の者にぬかれて来た。▲くわじや いや、ぬかれはしませぬ。▲大名 はり蝟と云ふ肴物ぢや。▲くわじや 肴ならば肴と、とうから云うたいものでござらぬか。▲大名 その様にぬかれて、まだものを云ふか。あちへうせいくく。▲くわじや 頼うだ者が叱らるとは尤ぢや。これが、高盛にはならぬ筈ぢや。都者ぢや。たどもぬかずに、この如くに、主のきけんが悪うならうと思つて、きけんなほしの噺子ごとを教へた。急いで噺しまうせう。噺子物 張太鼓と申すはく、中に木を押し入れ、兩に皮を引つぱつて、まはりに疣の候へば、張太鼓と申すよ。けにもさあり。やよ、けにもさうよのくくくくく。▲大名 某の機嫌直しに、噺子物をする。ことばをかけませう。いかにやくく太郎冠者、だまされたるはにくけれど、噺子物が面

諸白一酒の極上

白い。内に入りて、泥鰯の鰯をほつばつて。諸白を飲めやれ。▲くわじや 兩に皮をひつばつて、まはりに疣のあるをこそ、はり太鼓と申すよ。▲大名なにかの事もいるまいぞ。内に入りて餅食へ。▲くわじや けにもさあり。やよ、けにもさうよのく。
あとしや
ざりどめ

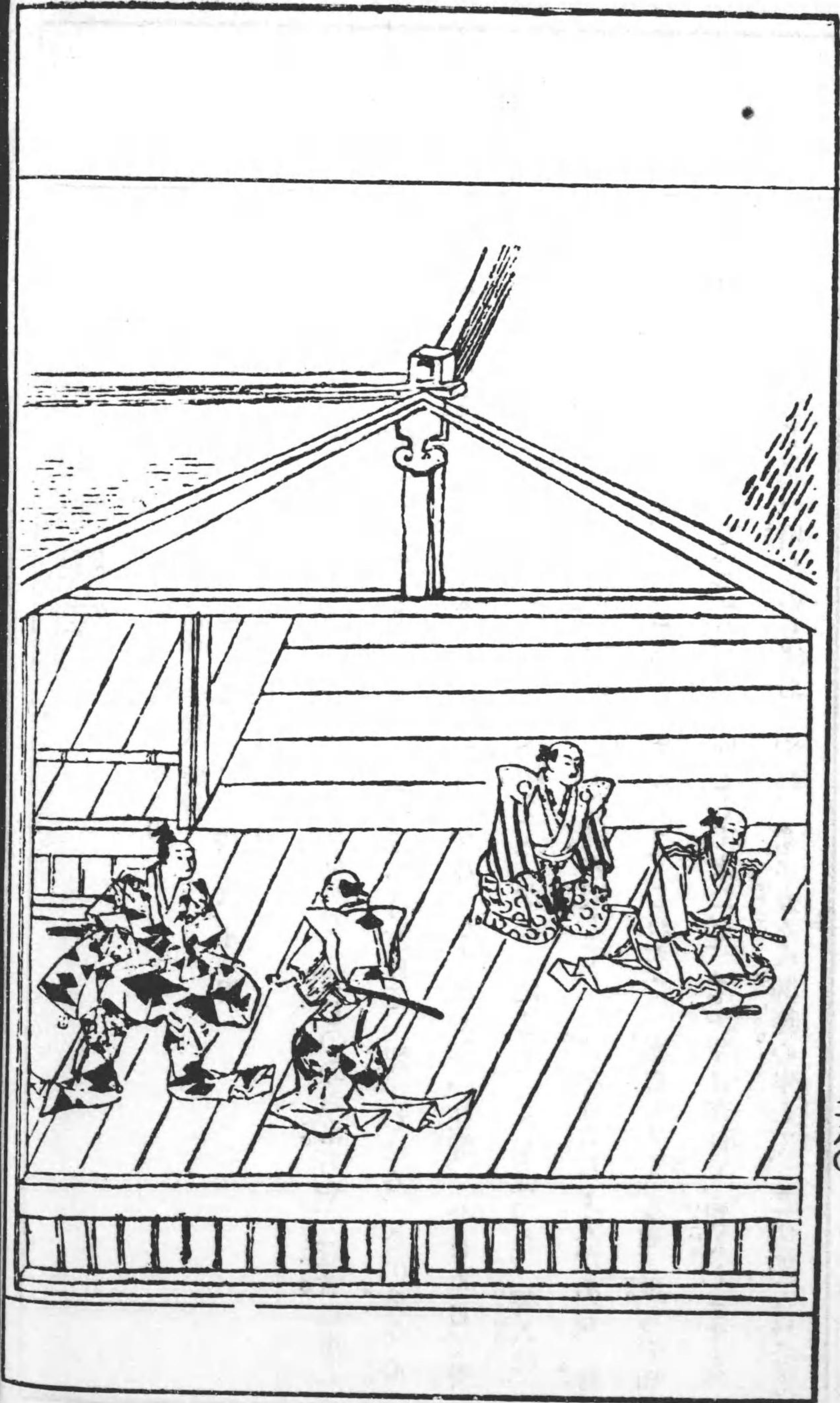
二 口眞似聾

四人

舅 長袴、小き刀
冠者 半袴、腰帶
聾 烏帽子、素襖、袴、小き刀
権六 長袴、小き刀

わせる一來られ
るの意

▲しうとこのあたりの者。今日は最上吉日でござる所で、聾どののお出ぢや。冠者に申しつけまうせう。在るか。▲くわじや お前に。▲しうと今日吉日で、聾がわせる。その分を心得。▲くわじや 畏りました。▲むこ 人のいとしがら、かくれもない花聾。今日吉日で聾入仕る。あなたへ無心申し、こなたへ頼うで、かやうにこしらへを仕つた。聾入に、いろく辭儀作法があると申す程に、こよに権六殿とて、お目かけらるゝ人がある。参つて、習うてまるらう。まづそろくまるらう。これぢや。案内もく。▲権六 誰ぢや知らぬ。誰ぞ。▲むこ 某でござる。▲権六 何として来たぞ。▲むこ 今日吉日で、聾入します。▲権六 めでたい事ぢや。用があらばおしやれ。▲むこ 方々へ御無心申して、この如くにこし



らへました。掣入の辭儀がいろくあると申す。教へて下されませい。▲權六 やすい事ぢや。物の本に書き記してある。見て參らう。▲むと 頼みまする。▲權六 あの様なる者には、ちと、恥をかよしたがい。無い事を教へてやらう。なうく。▲むと 何事でござる。
 ▲權六 掣入の辭儀いろく書き付けてある。中にも當世様のむこいは、何事もく、皆、舅の云ふ如くにさへすれば、ようおちやるぞ。▲むと それは、心安い事でござる。舅の云ふやうにしまうせうか。▲權六 なかく。引出物があらば、見せさしませ。▲むと いろくこしらへてあると申す程に、持つてまるつて見せませう。さらばく。うれしやく、急いで掣入致さう。待つて居られう。お案内もく。▲むと 誰そ。どなたでございませう。▲むと 花掣ぢや。舅殿へそのとほり云へ。▲むと 畏つてござる。申し掣様の御出でござる。▲しうと この方へ通せ。▲むと 心得ました。申し、こちへお通りなされませい。▲むと 汝は冠者か。▲むと 冠者でござる。▲しうと 内々待ちまする所、早々御出、忝うござる。▲むと 冠者、さかづき出せ。
掣口まねする。舅はちたつる。掣はちたつる。後つかみあひて、掣をうちこかし、舅はいる。むと、冠者が耳をとり、ひきまはし、

うちこかして、お手つて云うて入るなり。

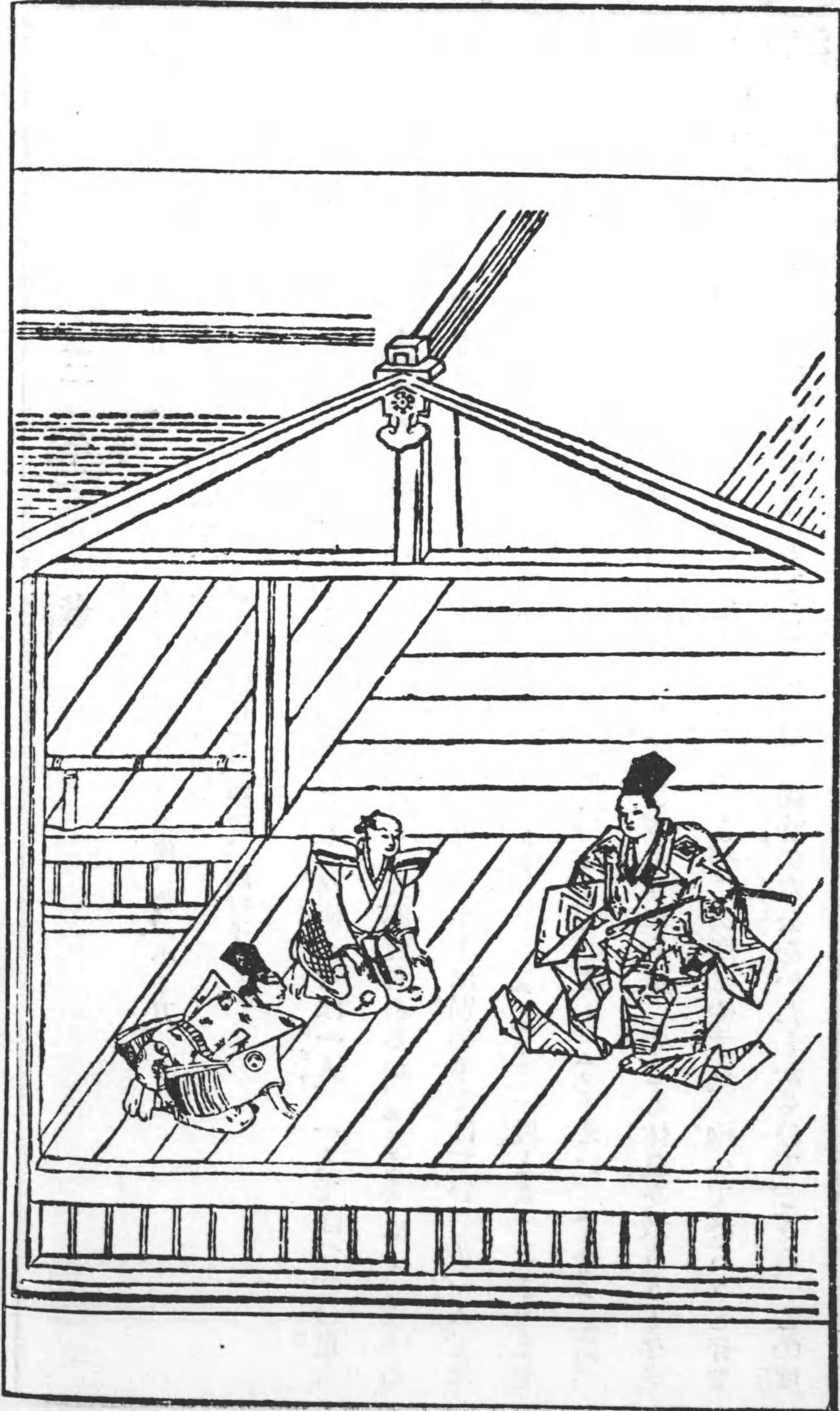
三 今

参

三人 大名 立烏帽子、素襖、袴、小さ刀
冠者 半袴、腰帶
参り 括り袴、腰帶、烏帽子

▲大名 隠れもない大名。かやうにくわは申せども、召使ふ者は一人、一人ではつかひ足らぬ。まづ太郎冠者を喚びいだし、まづ申しつけう。太郎冠者あるか。▲くわじやはよ。▲大名 たか。▲くわじやお前に。▲大名 念なう早かつた。汝よび出すは別の事ではない。汝一人ではつかひたらぬ。新座の者を抱へうと思ふが、何とあらう。▲くわじや 一段とようござりませう。▲大名 急いで上下の街道へ出て、抱へて来い。▲くわじや はよ。▲大名 えい。▲くわじや まづ、急いで参らう。やあさて、新座者を抱へてござらうならば、すこし休息を致さうと存ずる。や、何かと云ふうちに、街道でござる。まづこの所にやすみ、抱へて参らうと存ずる。▲今参 これは阪東方の者でござる。某、國許の奉公をいたしからひてござる。この度

阪東方一關東
いたしからひて
一致し枯して即
しつくして杯の
義歟



同心一同意

庖丁一料理

やつと参つた一
相撲剣術などの
勝負事
秀句一合謎な
どの類
しんく一秀句を
辛苦と誤解する
なり

都へ上り 奉公をいたし。その後、國許へ歸らうと存する。やあさて、若い時旅をせねば、老いての物語がないと申すによつて、思ひ立つてござる。▲くわじやなうく。▲今参は、こちの事でござるか。▲くわじやいかに、そなたの事ぢやが、どちへ行くぞ。▲今参某は、奉公の望で都へ上る。▲くわじや身ども抱へうぞ。▲今参それは、忝うござる。▲くわじやさて、今でもおぢやるか。▲今参参りませう。▲くわじややあさて、ふと詞をかけたに、同心めされて、このやうな嬉しい事はない。さて、そなたの國はどこぞ。▲今参坂東方でござる。▲くわじや何も藝はないか。▲今参いや、藝と申すほどの事ではござらぬが、このやうな事も、藝になりませうか。▲くわじや何でござるぞ。▲今参弓、鞠、庖丁、碁、雙六、馬のふせおこし、やつと参つたを致す。▲くわじやもし、秀句はならぬか。▲今参いやもし、最早参るまい。▲くわじやそれはなぜに。▲今参参りもせぬ先から、しんくなどと仰せらるよによつて、参るまいと云ふ事でござる。▲くわじや夫は聞きやうが悪い、秀句でおぢやる。▲今参いや、秀句はなりません。▲くわじや教へては。▲今参習うてならぬと云ふ事があるものでござる

今參—新參の召使をッそへ—居り候へ也
おいやれ—も云ひなさい也
靜かに—靜御前の事を言掛く

か。▲くわじやそれなれば、あれへいたとも、今參と名がつくであらう。今參々々、あれへをりそへ。これへをりそへと仰せらるよであらう。その時、あれへこれへと御説候へども、御座敷を見れば、破れ窓とおいやれ。この心はと仰せられたらば、るどころが候はぬと云はしませ。又、今參々々、早うをりそへ、くと仰せらるよならば、判官殿の思ひ人。また、心はお尋ねならば、靜かに參らうと云はしませ。▲今參かやうに申せば、ようござるか。▲くわじやこれでは、頼うだ者の氣に入る事でござる。いや、何かと云ふ内に、これでをりやる。それにまたしませ。▲今參心得ました。▲くわじや頼うだお方ござるか。▲大名 太郎冠者が戻つたさうな。▲くわじやござるか。▲大名もどつたかく。▲くわじやえい。ござります。▲大名さてく骨をりや。新座者を抱へたか。▲くわじや抱へました。▲大名どれにゐる。▲くわじや門外に居ります。▲大名やい、始あることが、終までであると云ふほどに、ちとくわを云はう。汝あまたに答へ。▲くわじや畏つてござる。▲大名 太郎冠者。▲くわじやはあ。▲大名床几をくれい。▲くわじやはあ、御床几。▲大名やい、今のは聞かうか。▲くわじや大

お目に參る—お氣に入ること

かくり—蹴鞠の場
こざかしい—利口ぶりたること

音でござりました程に、承りませう。▲大名あれへ行て云はうは、大名の事なれば、御目に參つたらば、奉公がすむであらう。又、お目がまるらずは、五日十日も逗留であらうと、汝が分でうかどはせ。▲くわじや畏つてござる。なうく、只今御立關へおいでなされた。大名の事なれば、目がまるつたらば、奉公がすむであらうず、目がまるらずは、五日も十日も逗留であらうほどに、心得さしませ。▲今參奉公の習ひでござるによつて、苦しいござらぬ。▲くわじやあれへ行かしませ。▲今參心得ました。▲大名やい、太郎冠者、此中の五十疋の馬を引き出して、湯洗をさせい。又、若黨たちには、矢の根を磨かれいと云へ。や、今日は暮が好ささうな。各鞍をなされうほどに、かよりの掃除して、水を打たせいと云ひ付け。▲くわじや畏つてござる。しんざの者。▲大名あれか。さてくござかしい者ぢや。あの者が心ばせを目でつかうて見よほどに、これへ出と云へ。▲くわじや畏つてござる。さて、そなたの心ばせを、目でつかうて見やうと仰せられた。お前へ出さしませ。▲今參心得ました。▲くわじやはあ、新座の者。▲大名目で。▲大名やい、太郎冠者、みども

が目でつかへば、あちへちろり、こちへちろり。さてくござかしい者ぢや。さて、何
も藝はないか。▲くわじや 弓、鞠、庖丁、碁、雙六、馬のふせおこし、やつと参つたを致
します。▲大名 さてく萬能なものぢや。中にも得た物は何ぢや。▲くわじや 中にも秀句を
えて居ります。▲大名 やい、ゆくくは名をも付けうけれども、當分今参とつくる。これ
へ出と云へ。▲くわじや はあ。秀句を聞かうと仰せられる程に、出さしませ。▲今参 心得ま
した。▲くわじや 今参。▲大名 今参々々、あれへをりそへ、これへをりそへ。▲今参 あれへこ
れへと御説候へども、御座敷を見ればやぶれまど。▲大名 このころはいかに。▲今参 居所
が候はぬ。▲大名 今参々々、早うをりそへく。▲今参 早うくと御説候へども、判官
殿の思ひ人。▲大名 この心はいかに。▲今参 武藏坊辨慶。▲大名 退り居ろく。▲くわじや 何と
なされました。▲大名 判官殿の思ひ人とぬかすによつて、しづか御前のことを云ひだすか
と思つて、心がおもしろかつたに、判官殿と、辨慶のいつちぎりやつた。あのやうな
者は去なせ。▲くわじや 畏つてござる。▲今参 やい、水でもくれたらば、とりかへせ

いつちぎり一言
ひ契りか

かみ一烏帽子の
中の髪と祠の中
の神とを掛く
かきう眉一未詳
槍願一長く突出
てたるものがひ
也

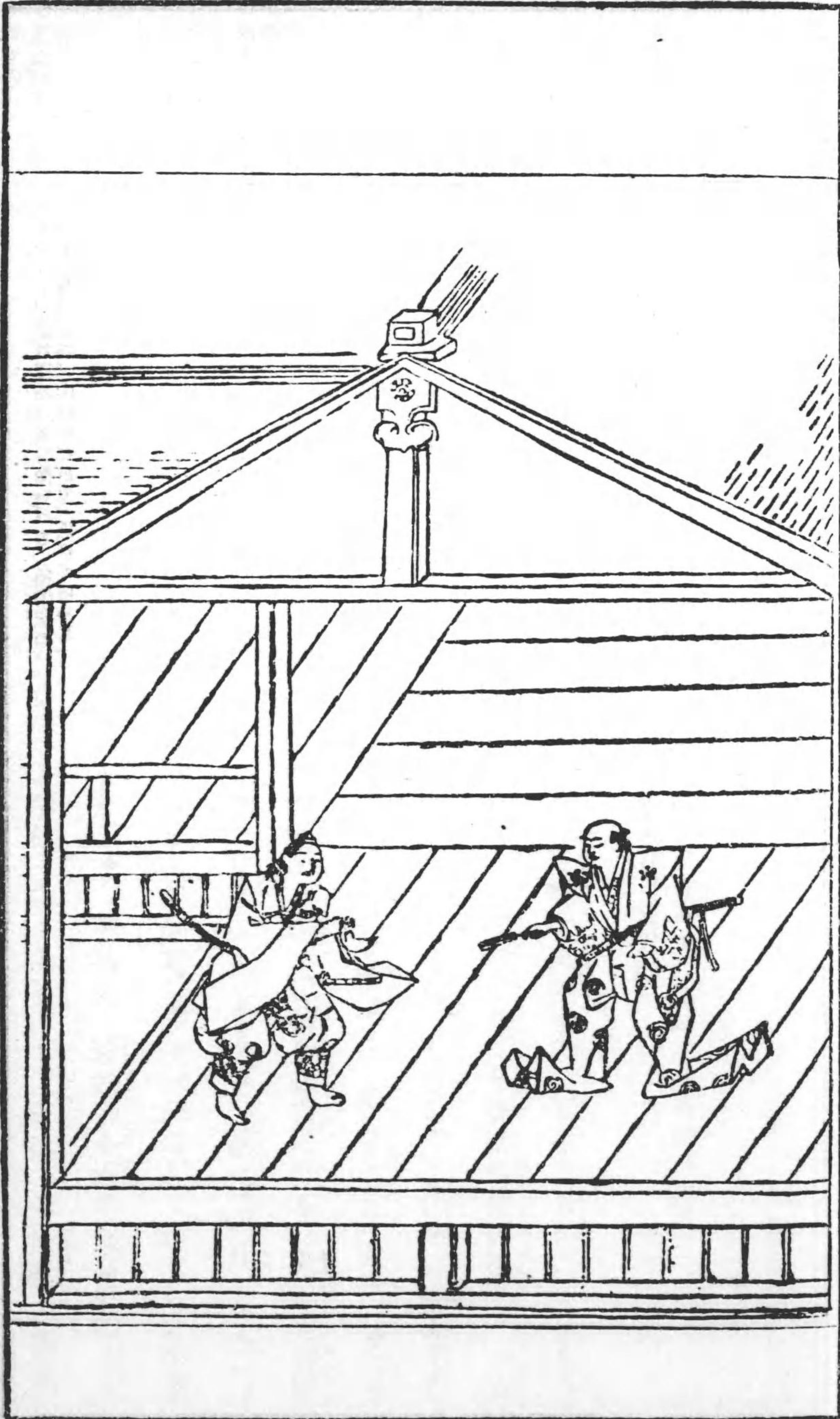
▲くわじや はあ。そなたは何事を云はしますぞ。▲今参 いや、お目の内がくるく致しまし
たによつて、御威勢におそれて申しそこなうてござる。かさねては如何様にも答へうと
云はしませ。いや、なうく、身共の國のならひで、問ふ事も答ふる事も、拍子にかよつ
て申します。頼うだお方も、拍子にかよつてお問ひなさるゝならば、忝うござらう。
▲くわじや 心得た。申し、國の習で、問ふことも答ふることも、拍子にかよつて申します。
▲大名 やい、あの者が著た烏帽子のなりが面白い。烏帽子について問はうほどに、出とい
へ。▲くわじや 畏つてござる。さあく行かします。▲大名 今参々々、参が著たる烏帽子は、
祠にも似てす。▲今参 それはさも候。中にかみの候へば。▲大名 くはへたりや。でかした。
眉は何故に屈うだ。▲今参 かきう眉で候へば。▲大名 腰こそは細けれ。▲今参 蟻腰で候へば。
▲大名 願がさし出た。▲今参 槍願で候もの。▲二人 槍願で候もの。ほつばい、ひうろ、ひ。

四 菌山伏

二人 男 長袴、小さ刀
山伏 兜巾、篠懸、括り袴、腰帶、太刀、珠數

くさびら草の類
九調一靜坐思惟
する事と眼瞞耳
聾等九あり
十乘一坐床觀行
の法に十種あり
瑜伽一切諸法
を云ふ水に譬ふ
三密一身體意の
三密あり修行の
道也月に譬ふ
事
ぐひん一天狗の

▲男 このあたりの者。わたくしが庭に、くさびらが俄に生えた所で、取りて捨て申すれば、あとから生えく仕る。あまり不審な。つねに御懇の山伏殿がある。頼うで見てもひまうせう。急いで参らう。ものも。お山伏殿は内にござるか。▲山伏 九識の窓の前、十乗の床のほとりに 瑜伽の法水を湛へ、三密の月を澄ます所に、案内申さんとは誰ぢや。▲男 それがしでござる。▲山伏 何と思つてお出で。▲男 此中、某の庭にくさびらが生えましてござる。取りて捨てますれば、また生えく致す。不審にござる。お出なされて、御祈禱をなされて下されい。▲山伏 心得た。他所へは参らぬが、そなたの事ぢや 参りてやらう。▲男 追付お出なされませい。▲山伏 心得た。▲男 これく、このくさびらでござる。▲山伏 これはぐひんのわざぢや。一祈してやらう。▲男 忝なうござる。▲山伏の如く、い



きもつぶす。祈る程四つ五つ菌いづる。後山伏の耳ひく。鼻つまむ。山伏いやがり、逃げてはいる。

五 昆布賣

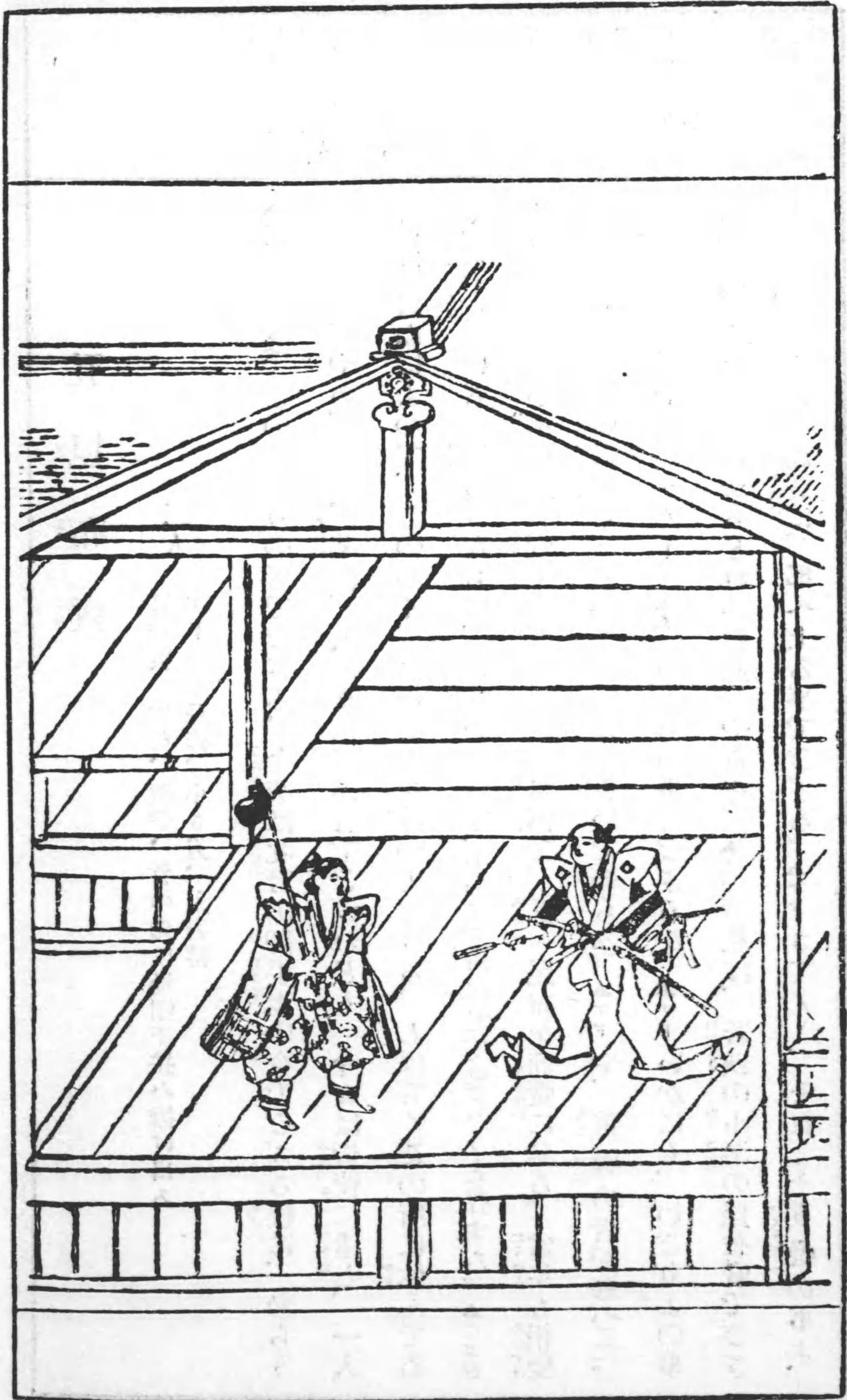
二人

昆布賣 半袴、腰帶、竹の先に烏帽子挟み擔げ出る
アド 長袴、小さ刀、太刀持

北野の御手水の夜一雍州府志に七月七日松梅院主人一人入内々陣歌御手水とある神事也

若狭の小濱の昆布賣一和漢三才圖會に昆布は松前津輕南都共の名有り並に若狭に傳送す小濱の市人之を調製して四方に送るとあり
嘉例一吉例 重疊の者一至極好き者

▲アドこれは、このあたりの者でござる。今夜は北野の御手水の夜でござる程に、参らうと存する。やあ、さて、某は、人あまた使ふ者でござれども、今夜は皆使に遣し、一人も内に居ぬによつて、この如く、自身太刀を持つてござる。しばらくこの所に休んでるて、似合しい者も通らうならば、言葉をかけて、太刀を持たせて参らうと存する。▲こぶ賣これは若狭の小濱の昆布賣でござる。毎年嘉例で、都へ昆布を商賣に参る。當年も相變らず、昆布を商賣に上らうと存する。まづ急いで参らう。▲アドや、重疊の者が参つた。詞をかけう。や、なうく。▲こぶ賣こちの事でござるか。▲アドいかにも、わごりよの事ぢやが、これはどれからどれへお通りやるぞ。▲こぶ賣私は、若狭の小濱の昆布賣でござるが、毎年こぶを商賣に、都へ上る事でござる。▲アドさてく、それこそ重疊の事よ、



御仁體—身分ある人

某も都へ上る者ぢや。同道致さう。▲こぶ賣 いやく、こなたは御仁體と見受けてござる。私がやうな者は、おつれには似合ひませぬ。かうお先へ参ります。▲アドいや、これ、總じて世には似合つたつれもあり、又似合はぬつれもある。是非とも同道申さう。▲こぶ賣 それならばお供致しませう。▲アドさあく、おぢやれ。▲こぶ賣 畏つてござる。▲アドやあさて、ふと詞をかけたに、早速同心のしてくれられて、これ程嬉しい事はをりない。さて、わごりよに始めて會うて、頼みたい事があるが、聞いておくりやらうか。▲こぶ賣 いかにも、わたくしに似合ひました御用ならば、うけたまはりませう。▲アド無心を云へば、早速聞いてくれうとあつて満足いたす。まづ一禮を申す。▲こぶ賣 これは迷惑でござる。▲アドいや、別の事でもない。某は、人あまた使ふものなれども、今日は方々へつかはして、一人も人が無いゆゑ、見らるゝ通り、自身太刀を持つておぢやる。これが、わごりよに持つて貰ひたいと云ふ事でをりやる。▲こぶ賣 いかにも畏つてござるが、さやうの結構な太刀は、見た事もござらず、まして持つた事はなほござりませぬ。これは御免されませ。

ていどきつと
これはざれごと
一刀に手をかけ
て嘯したるを冗
談也といふ

▲アト いや、結構などおしやれば、迷惑いたす。わるい太刀ぢや程に、持つておくりやれ
 ▲こぶ賣 是はどうござつても御免されませ。▲アトさては侍に一禮まで云はせて、ていど
 お持ちやるまいか。▲こぶ賣 いや、持ちませう。▲アトなんぢや、持たう。これはざれごと。
 氣にかけずとも、持つておくりやれ。▲こぶ賣 こなたのおざれごとは、いやなおざれごと
 でござる。▲アトさあくおぢやれ。▲こぶ賣 心得ました。▲アトこれく、そのやうな太刀
 の持ち様があるものか。手に持つておくりやれ。▲こぶ賣 手があきませぬ。▲アトそれく
 左の手があいてある。▲こぶ賣 これはかう、肩をかへる時いります。▲アトすれば、こち
 らの手が遊んである。▲こぶ賣 これもかう、肩をかへる時いります。▲アトこれは昆布が
 あるによつてぢや。どれく、そのこぶを買うておまうせうぞ。▲こぶ賣 それは忝なうご
 ざります。▲アトさあくおぢやれ。▲こぶ賣 参ります。▲アト 是はいかな事、それは進上
 太刀の持ちやうぢや。身にひつ添へてお持ちやれ。▲こぶ賣 心得ました。▲アト おぢやるか。
 ▲こぶ賣 参ります。▲アト これはいかな事。それは子をだいたやうな持ちやうぢや。そなた

がつきめ一餓鬼
めとて斬つてか
かる也

は、眞實太刀の持ち様を知らぬさうな。みどもが教へておまうせうぞ。▲こぶ賣 それは忝
 うござる。▲アト 總じて、自身の太刀は、左にもち、主の太刀は、右に持つものぢや程に
 右に持つておくりやれ。▲こぶ賣 私はおまへの内の者ではござりませぬ。▲アト 内の人では
 なけれども、頼む上からぢや程に、持つてくれさしませ。▲こぶ賣 なるほど心得ました。
 ▲アト さて、この上でまだ無心が有るが、これも聞いておくりやらうか。▲こぶ賣 この上で
 ござる。いかやうな事なりとも 仰せられませ。▲アト いや、別の事でもない。若し道で近
 附に逢うた時、そなたを内の者のやうに云はうが、答へておくりやらうか。▲こぶ賣 何が
 さて、うけたまはりませう。▲アト なんぢや聞いてくれう。某がつかふ者を太郎冠者と
 云ふ。太郎冠者と云はど、答へておくりやれ。▲こぶ賣 畏つてござる。▲アト やいく、太郎冠
 者来るか。▲こぶ賣 はあつ。▲アト ひつついて来い。あはよよ。▲こぶ賣 さてもく、腹の
 たつ事でござる。がつきめ。遁さぬぞ。▲アト あよ、ざれ事をするな。いやく、そちにそ
 れを持たしておくによつてぢや。さあく、その太刀をおくせ。▲こぶ賣 なんの、おくせ。

あくあぶない
太刀を振きて向
へば也

仕儀一具合也都
合也

▲アドあよあぶない。これはなんとするぞいの。▲こぶ賣なんと、これがよいか。最前の様に云うたがよいか。たつた一打にするぞ。▲アドあよ、あぶない。これはまづなんとするぞいの。▲こぶ賣なんとするとは、そのさいて居る物をおくせ。▲アドこれか。▲こぶ賣なかなか。▲アドこれはやりたうはあれども、侍の腰をはなす事はならぬ。▲こぶ賣おくしやるまいか。▲アドあよ、やるてに。これく。▲こぶ賣柄の方からおくせ。▲アドやりやうが氣に入らずは、おかうまで。▲こぶ賣何、おくすまいか。▲アドあよ、はてさて、やると云ふに。これくあぶない。▲こぶ賣やい。▲アドなんぢや。▲こぶ賣この昆布を賣れ。▲アド侍の昆布を賣つた事はない。▲こぶ賣何、賣るまい。▲アドはてさて賣ると云ふに。やいく、昆布買へく。▲こぶ賣やい。▲アドなんぢや。▲こぶ賣そのやうに云うて、皆様が召すものか。なるほど慇懃に賣れ。▲アド慇懃に賣ると、その太刀や刀を返すか。▲こぶ賣それはその時の仕儀によらう。▲アドそれならば賣らうが、さりながら昆布の賣りやうを知らぬ。賣つて聞かせ。▲こぶ賣いかにも賣つて聞かさう。よう聞け。▲アド心得た。▲こぶ賣昆布召され候

へ。こぶめされ候へ。若狭の小溜のめしのごぶを召し上げられ候へくと、かう賣れ。▲アド心得た。昆布めされ候へく。若狭の小溜のめしのごぶを召し上げられ候へく。さあく返せ。▲こぶ賣なんの返せ。この度はまた謠節に賣れ。▲アド賣らでかなはずは、賣つて聞かせ。▲こぶ賣心得た。うたひぶしこぶめせく、おこぶめせ。わかさをばまのめし前の如く淨瑠璃の昆布、若狭の浦のめしのごぶと賣れ。▲アド心得た。ひぶしに賣る。さあく返せ。▲こぶ賣なんの返せ。▲アドこれはなんとする。▲こぶ賣今度は淨瑠璃節にうれ。▲アドこれも賣つてきかせ。▲こぶ賣心得た。つれてんく、てれくてん。まづこれが三味線の心持ぢや。こぶめせく、おこぶめせ。若狭の小溜のめしのごぶ。つれてんく、てんと賣れ。▲アドこよろえた。前の如く淨瑠璃。さあく、かへせ。▲こぶ賣なんのかへせ。今度は小歌節にうれ。これも賣つてきかせう。昆布めせく、おこぶめせ。わかさをばまのめしのごぶ。めしのごぶ。この、しやつき、しやく、しやつきく、しやつきしや、と賣れ。▲アドさやうに賣つたらば、その太刀や刀を返すか。▲こぶ賣その時の仕儀によらう。▲アドそれなら

にじかふむつた者一武士とて二字穿つたる者の意か

よるこぶ喜ぶに昆布を掛く

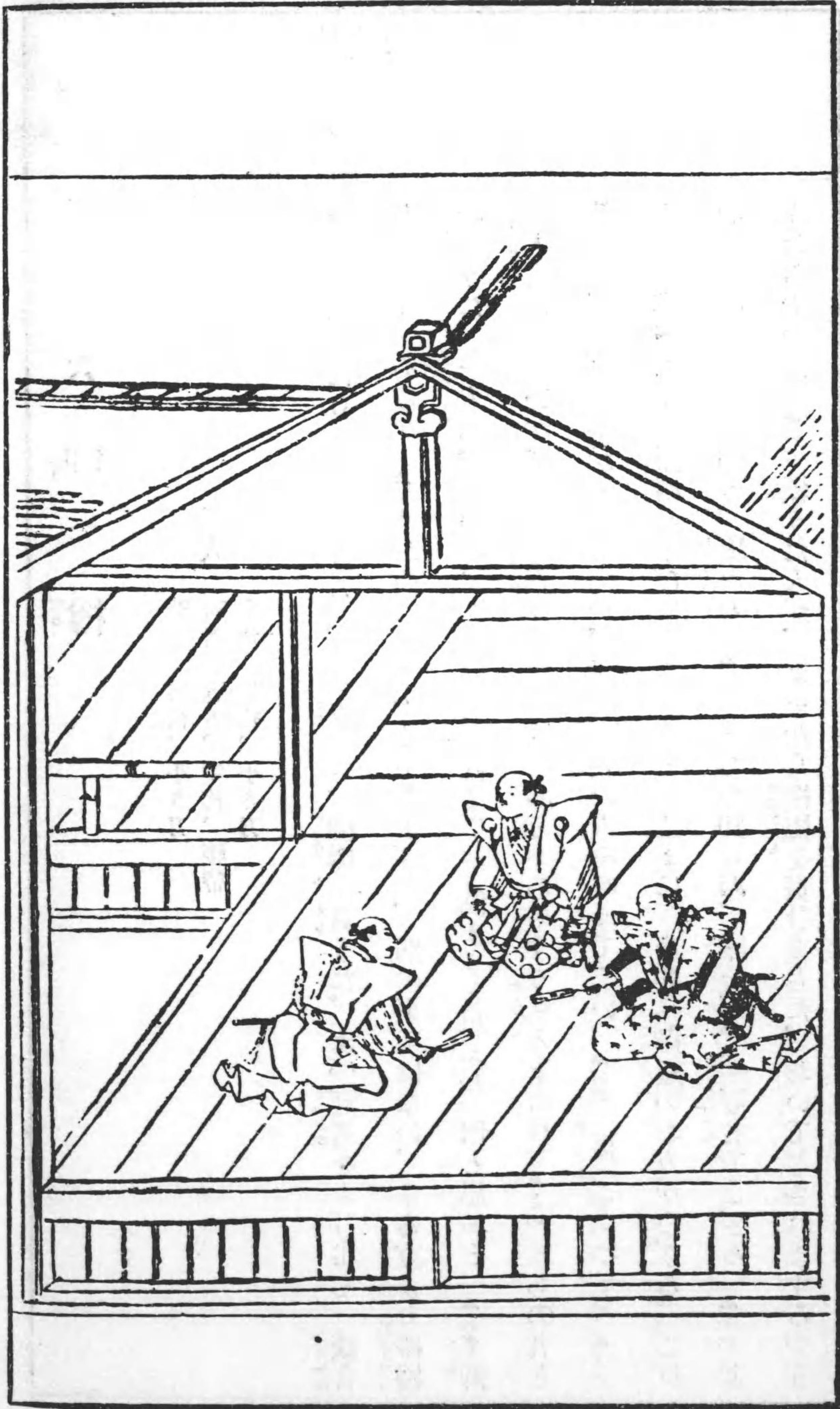
ば賣らう。謂の如く小う。▲こぶ賣やい。▲アドなんぢや。▲こぶ賣にじかふむつた者をいつまでなぶらうぞ。某ゆくすまはんじやが行末繁昌と賣つたらば。この太刀や刀を返さうぞ。▲アドそれはまことか。▲こぶ賣まことぢや。▲アド眞實しんじつか。▲こぶ賣眞實ぢや。▲アド一定いちぢやうか。▲こぶ賣一定ぢや。▲アド誰たれやらく、數知かずしらずの君きみが御代ごよのよろこぶや。▲こぶ賣何なんとよろこぶと。かへすまいぞ。この太刀たち。これがほしいか。▲アドあの横著者わやちやくもの。やるまいぞく。

六柳樽

三人 殿 長袴、小さ刀
冠者 冠者、半袴、腰帶
庄介 長袴、小さ刀

柳樽一漆塗の細長き酒樽也祝事に使用す

▲このこのあたりの者でござる。さる方かたより、柳樽やなぎだるを貰もらうた。まづ冠者くわんじやをよび出し、談合だんがふしませう。あるか。▲冠者 お前に。▲とのそちをよぶも、別の事べつではない。さる方かたより柳樽やなぎだるを貰もらうた。一人飲ひむもいかどぢや。誰たれぞ呼びまして飲のまうと思おもふが、何と思おもふぞ。▲冠者 御お一人ひとりまるるもいかどおほしめと思おも召めす事ことならば、おこころやすう私わたくしとまるれ。▲とのうちの者と飲のうで、面白おもしろい事ことがあるものか。誰たそ心安こころやすい人ひとを呼ようでこい。▲冠者 畏かしこまつてござる。▲とのえい。▲冠者 あよ、誰たれ殿どのをよびにまのらうぞ。ことに、身共みどもへ御懇ごんごんのお方がござる。これをよびに參まらう。物も。案内あんないも。▲庄介 誰たれぢや知らぬ。誰たそ。▲冠者 冠者くわんじやでござる。▲庄介 ようおぢやつた。▲冠者 頼たのうだ人が、よそから柳樽やなぎだるを貰もらいました。おいでなされまするやう



にと申されます。▲庄介おれはつひに行た事がないほどに行かれまい。▲冠者 私にねごんごろを、よく知つてゐられます。おいでなされて下されい。▲庄介それなら参らうか。▲冠者さらばござりませい。▲庄介わごりよ案内に、さきへ行け。▲冠者さらば、案内のため参ります。ござれ。これにお待ちなされい。▲庄介心得た。▲冠者申し、歸りました。▲との冠者戻つたか。誰様を呼うで来た。▲冠者庄介様を呼びまして来ました。▲とのあれは酔狂をする人ぢや。▲冠者それならば、戻しまうせう。▲とのいや、呼うで来て往なされはせまい。さりながら、そばへ使ふ者がない。▲冠者 某をつかはしられい。▲とのおのれめは賤がないところで、使はれぬ。▲冠者教へてつかはしられい。▲との何事も身共が云ふやうにせい。▲冠者 畏つてござる。こなた様の教へらるゝやうに致しまうせう。▲とのこちへ通せ。▲冠者 畏つてござる。▲とのなう、こちへ通らしられい。▲庄介心得た。只今は御使 忝うござる。▲との早々おいで、過分にござる。冠者、さかづきを出せ。▲冠者冠者さかづきを出せ。▲とは何事も主の云ふごとく口まねをする。をさめにうちこかしてはいるなり。

琵琶借座頭一
名伯養

七 琵琶借座頭

三人 伯養 頭巾、下袴、水衣、腰帶
 勾當 角帽子、衣、下長袴、腰帶
 琵琶主 長袴、小さ刀

檢校一官也勾
當座頭の上位

▲はくやうこのあたりの座頭でござる。やがて、檢校様たちの寄合がある。某の頼うだ者も出られます。琵琶が損ねた、借りて来いと申さるよ。参り、借りて参らう。貸して下さるればよいが、何とあらうぞ。これぢや。お案内も。ござりまするか。▲びは主案内とは誰ぢや。▲はくやう 某でござる。▲びは主何と申して来たぞ。▲はくやう 某の師匠坊が、やがて檢校衆の寄合に出られますが、琵琶が損ねましてござる。こなたのびはをお借しなされて下されいと申さるよ。▲びは主近頃やすい事。貸してやらう。▲はくやう 忝うござる。▲勾當これは、このあたりの勾當の坊でござる。近日檢校たちの寄合に、某も、出よとおしやる。琵琶の絃がきれた。ことによい琵琶を持った人がある。これを借りに参



推参―無禮

はくやう！履く
襪に伯養を掛く

らう。ものもく。▲びは主たれぢや知らぬ。誰そ。▲勾當の坊でござる。▲びは主よう
 ござつた。▲勾當ちと御無心がござる。近日檢校たちのよりあひに、某も参るが、琵琶の
 絃がきれました。こなたの琵琶を貸して下されい。▲びは主やすい事ぢやが、早、伯養に
 貸してござる。▲勾當あいつめは琵琶は入るまい。それがしに貸して下されい。▲はくやうい
 やく、わたくしが借つてござるぞ。▲勾當やいく伯養。おれが借る。おのれ推参な。
 ▲はくやうそなたはわがまよな事を云ふ。▲勾當憎いやつの。▲冠者これく、その如く云う
 ては、どちへも貸すことはならぬ。とかく何でも勝負をして、勝の方へ貸しまうせう。
 ▲勾當勝負には歌をよみませう。▲はくやう申しく、勾當の坊が歌をよまれたらば、某も
 よみませう。▲びは主さあくよましられい。▲勾當庭中に齒缺の足駄ぬぎすてて、はくや
 うなくて谷へほうかす。▲びは主さあくよめ。▲はくやう酒もりの座敷へ人の呼ばざれば、
 犬や勾當門にたよすむ。▲勾當おのれ、犬にたとへたか。にくいやつ。▲はくやう足駄にた
 とへたか。▲びは主このとほりでも埒あかぬ。▲はくやう今度は相撲とりまうせう。▲勾當あ

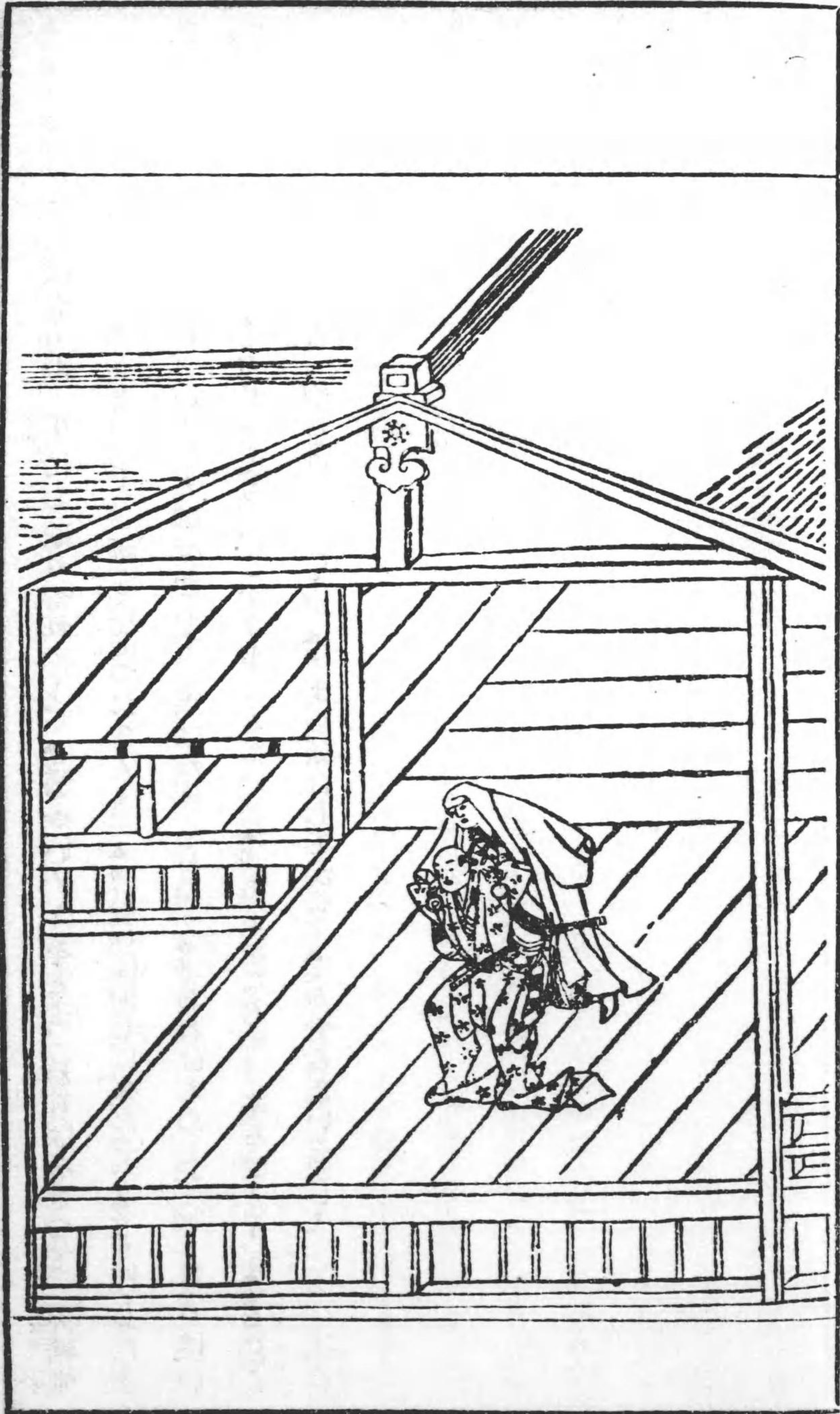
いつがとらば、とりませう。▲びは主さあくお手つ。▲勾當伯養がにけるく。▲はくやう勾
 當が逃げらるよ。▲びは主身共が手をとり組ませうぞ。お手つ。▲はくやうどこへ。負くる事
 ではない。▲勾當おのれに負けうか。▲はくやうなうく、それがしぢや。やあく。▲勾當や
 あく。▲はくやうお手つ。勝つたぞく。▲勾當どこへ。おれをこかして。やるまいぞく。

八因幡堂

二人 男 長袴、小さ刀
女 びなん、箔、さげ帯、かづき

去つて一離縁す
ること
因幡堂一京にあ
り平等寺と云ふ
薬師如来を祀る

▲男 これは、このあたりの者。某の女は大酒飲ゆゑ、去つてござる。因幡堂へ参り、女房の事を、通夜して、御夢想次第に持ちませう。参る程にこれぢや。拜みまして、通夜仕らう。▲女房 妾が男めが、妻の事を、因幡堂へ参り、御夢想次第に致さうと申すと聞いた。去られたは苦しうないが、心がにくい。さればよく寝た。やいく、西門に立つたを女房に持てよ。▲男 はあく、忝やく、まづ西門へ行て見やう。さればく、これにござる。申しく、御夢想のお妻か。女房つまぢやと云うてうなづく。▲男 もはや追付宿へお供申ませう。某が乃負うて参らう。負はれさしられませい。是でござる。おりて、そのかづき取らせられまうせい。▲女房 いやまづ、盃事ませう。男飲みて女にさす。ひきうけく、▲男 また大酒飲ぢや。もはや納めませう。そのかづき取らせられう。いやでもおうでもかづきを取



らねばならぬ。平にお取りやれく。▲女房やいくをとこ。わらはをさつて、因幡堂へようく妻のこと、祈念に籠つたなく。▲男われは何しに來たぞ。▲女房何しにきた。おのれ、いやでも御夢想ぢや。添はねばならぬ。▲男おれはおぬしがやうな者はいやぢや。▲女房どうでも、いごかす事でもない。▲男あよかなしや。ゆるせく。▲女房どこへ。卑怯者。やるまいぞく。▲男まづ談合してから。▲女房やるまいぞく。

九魚説法

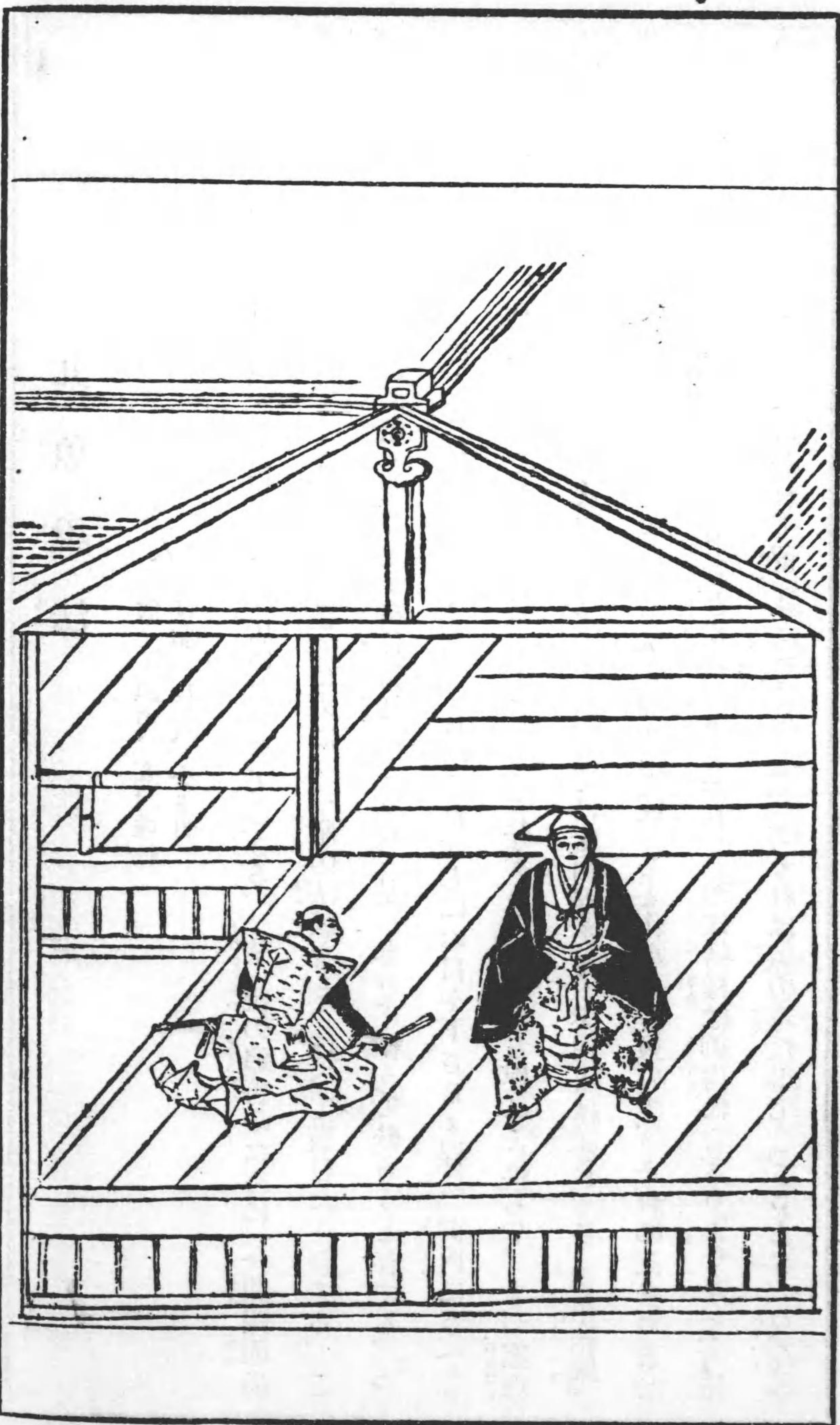
二人 僧 頭巾、衣、珠數
旦那 長袴、小刀

▲與平治 これは、このあたりに住居いたす者でござる。某親の追善のために、一間四面の堂を建立致いてござる。堂供養のために、一座の法談をも、述べて貰ひたう存する。ここに、某にお目くださるゝ御住持様がござる。是へ参りて頼うで参らうと存する。やあさて、内にござればようござるが。日頃それがしにお目を下さるゝ程に、御内にさへござつたらば、定めてお出なされて下されうと存する。や、参る程にこれぢや。まづ案内をかほう。ものも。案内も。▲僧や、おもてに案内がある。案内とは誰ぞ。え、與平治殿。此中は久しう見えませなんだ。▲與平治 此中は、ちと作事など致いて、それゆる参りませなんだ。▲僧それは御尤でござる。▲與平治 して、お住持様は御内にござりますか。▲僧住持は此中田舎へ行かれて留守でござる。▲與平治 それは氣の毒な事でございます。只今参

も目くださるゝ
目をかける

かほうー乞はう
の訛
作事ー普請

氣の毒ー迷惑の
意



ります事、別の事でもござりませぬ。私親の追善のため、一間四面の堂を建立致いて
 ござる。堂供養のため、一座の法談をも述べて貰ひたう存する。御内にござりませいで
 氣の毒に存じます。はや御布施の用意も致いてござる。▲僧その様な事を聞かれたらば、
 一しほ残多う存せらるゝでござらう。▲與平治さてもく、氣の毒な事でござる。え、た
 れかれと申さうより、お前おいでなされて下されませ。▲僧なるほどまゐりませう。暫く
 それにお待ちなされませ。▲與平治心得ました。▲僧なうくうれしや。はや御布施の用意
 もしたと云はるゝ。このやうなうれしい事はござらぬ。さりながら某は、經陀羅尼は存
 ぜず法談は知らず。御布施はほし。これはまづ、なんとせう。や、某せがれの時分
 濱邊にすんで、魚の名をあまた存じてゐる。これをとりあつめ、法談のやうに申しな
 し御布施をとつて歸らうと存する。▲與平治これはおこしらへが出来ましてござります
 か。▲僧私が参れば、内に留守がござりませぬによつて、留守の義を申し付けてござる。
 ▲與平治これは御尤でござる。いざお出なされせ。▲僧お前からござれ。▲與平治参りませ

陀羅尼一呪文の
こと

しんはしやうご
んより起る信
は莊嚴より起る
にて信心は立派
なる威儀を觀る
より生ずとの意
なるべし
導師一説教して
衆生を佛道へ導
く僧のこと
鮑一逢はずの意
を掛く
すししやう鮑
に水晶をきかす
高麗鮫一高麗鮫
の意也
のつしのこと
斗鮑のこと
しのこと
詞にきかす
鮑一逢の意
形に用ゐる音の
なるめ一賜に爲
るを掛く
さばせかい一衆
遊世界の意を鮑
にてきかす
六の衆生一六は
六道也
あめのうをの
雨の後鮑を

う。やあさて、御住持様のお留守で、氣の毒に存じましたに、おまへのお出なされて下
されまして、御住持様同前に存じます。▲僧これは結構な御挨拶でござる。▲與平治や、參
る程にこれにござる。これが即ち今度建立致した堂でござる ▲僧しんはしやうごんよ
り起ると申すが、これは結構なしやうごんでござる。▲與平治これは痛み入った御挨拶で
ござる。▲僧いざ法談を始めませう。▲與平治一段と好うござりませう。▲僧ちいんくち
いん。導師この事を打聞いて、かやうのめでたき御代には、よも鮑とぞ思ふ。すよけに
煤けたる、乾鮭色の袈裟をかけ、すししやうの珠數をつまぐり 高麗鮫の上に、のつし
のしとはひ上り、ほつぐわんの蟹、泥鰌々と打鳴し まづ説法をするめなり。あひた
しとよ、このさばせかいと申すに。佛と衆生とに 魚と水とのごとし。佛ましまさずし
て、六の衆生たすかる事あるべからず。又、水なくして魚の住むべき所なし。されば地
藏のあめのうをの後、水ます惡業のくもだこおほへば、月またくらげなり。眞如のあら
しふけば、月又せいこの如し。およはむあみだ佛と唱ふれば、こひねがふふならくせかい

合めて云ふ
水ます増すに
海を掛く
せ鮭だこ一雲に
は月げ一暗げに
無をきかす
ふをきかす
一む掛く
ふをきかす
こをきかす
をだ陀落世界の
知もをきかす
にちぢる
一此方に鮑
ひだいかい
なり乾鮭具をも
ぢれるならん
たことと一過去
得を鮑と一三藐
三菩提の候り
ぶりを薩一佛菩
薩を鮑に候る
かにはし云々
願以斯功轉皆俱
成佛道の轉記
音讀にして鮑の
事なり明日の
と飛魚一逃ぐるこ

に生れ、こちへくと請せられしかば、佛とぞこしてゐるべし。されば觀音經の要文にも、
ひだいかいらいし、心經には、たことく阿耨多羅三藐三菩提に買うて、ぶり菩薩參らす。
うたひ今日の説法はこれまでなり。かになしぎょうかいぐん成佛道。▲與平治これはいかな
こと。最前より何事を申すぞと存じてござれば、魚の事を申す。何としたものであらう。
やい、そこな賣僧坊主。このやうなめでたい堂供養に、よう曜い事を云ふな。▲僧たい
もない事をおしやる。▲與平治まだ云やるかいの。▲僧こちの驚くやうにする人ぢや、
▲與平治わごりよをなんとしたものであらうぞ。▲僧うたば打たしませ。棒鯨か太刀魚で
うたしませ。▲與平治なんのぎせいぞ。▲僧金頭もたまる事ではないぞ。▲與平治さても
さても、にかくしい事ぢや。▲僧煎鮫の様な顔をする人ぢや。▲與平治そなたに物を云は
すによつてぢや。其方の様な人は、かうしておいたがよい。▲僧あふ、なまたこく。▲與平治
まだおしやるかいの。▲僧名吉まるらう。▲與平治これはいかなこと。▲僧こちやたど、飛
魚したが、ましぢや。▲與平治あの横著者。やるまいぞく。

十首引

八人

八郎 括り袴、太刀、腰帶

鬼 半姫、腰帶

姫 かつら、乙面、箔、さげ帯

鬼 五人、半袴、腰帶、赤頭、面

聞えたー分つたの意

▲八郎 鎮西の八郎爲朝とは、某が事ぢや。おれ程の力は世にござない。鬼が島へわたり、鬼どもと力くらべして、寶物どもを取つて參らう。いかな鬼も、おそらく力は及ぶまい。

▲鬼人臭いが、異な事ぢや。おのれは何者ぢや。▲八郎 娑婆の者ぢや。▲鬼 よい所へ來た。取つて食はう。姫に生きた人を食はせぬ。連れて來て、食ひはじめをさせまうせう。姫

姫。▲姫 なんぞ。▲鬼 來い。よい食物がある。あれく、食ひはじめに食へ。▲姫 わんく。あゝ、こはやく、嚇しをる。▲鬼 にくいやつの。なぜに食はれぬ。▲八郎 とがも

ない者を、食はうとおしやるは無理ぢや。勝負をして負けたらば、いかにも食はれまうせうず。勝つたらば寶物を取らう。▲鬼 聞えたく。いざ來い。勝負に何をするぞ。



▲八郎 腕押を致さう。▲鬼 さあ〜来い。▲八郎 いや〜、お姫様に食はるゝ程に、お姫と勝負しまうせう。▲鬼 尤ぢやく〜。さあ〜お姫 腕押せい。▲姫 おれは腹押がしたい、▲鬼 親のそばで、入らぬこと云はずとも、腕押せい。▲姫 あ痛やく〜。▲鬼 おのれは、姫が手をなせにきつうしたぞ。そろ〜しはせいで、痛がるに。▲八郎 勝負に勝つた。寶物を取りませう。▲八郎 いや〜、まだ餘の勝負せい。▲八郎 今度は臍押致さう。▲鬼 姉、すねおしせい。▲姫 あ痛〜。▲八郎 勝つたぞ〜。▲鬼 いや〜、今一度首引をせい。▲八郎 心得た、▲鬼 姉、首引せい。▲姫 いやでござる。▲鬼 まづ、父次第にせい。そろ〜と引け。噓す程に、そろ〜ひけ。鬼どもみな〜出よ〜、姫がかたが弱いわ。えいさら〜。姫がかたがよわいわ。えいさら〜。

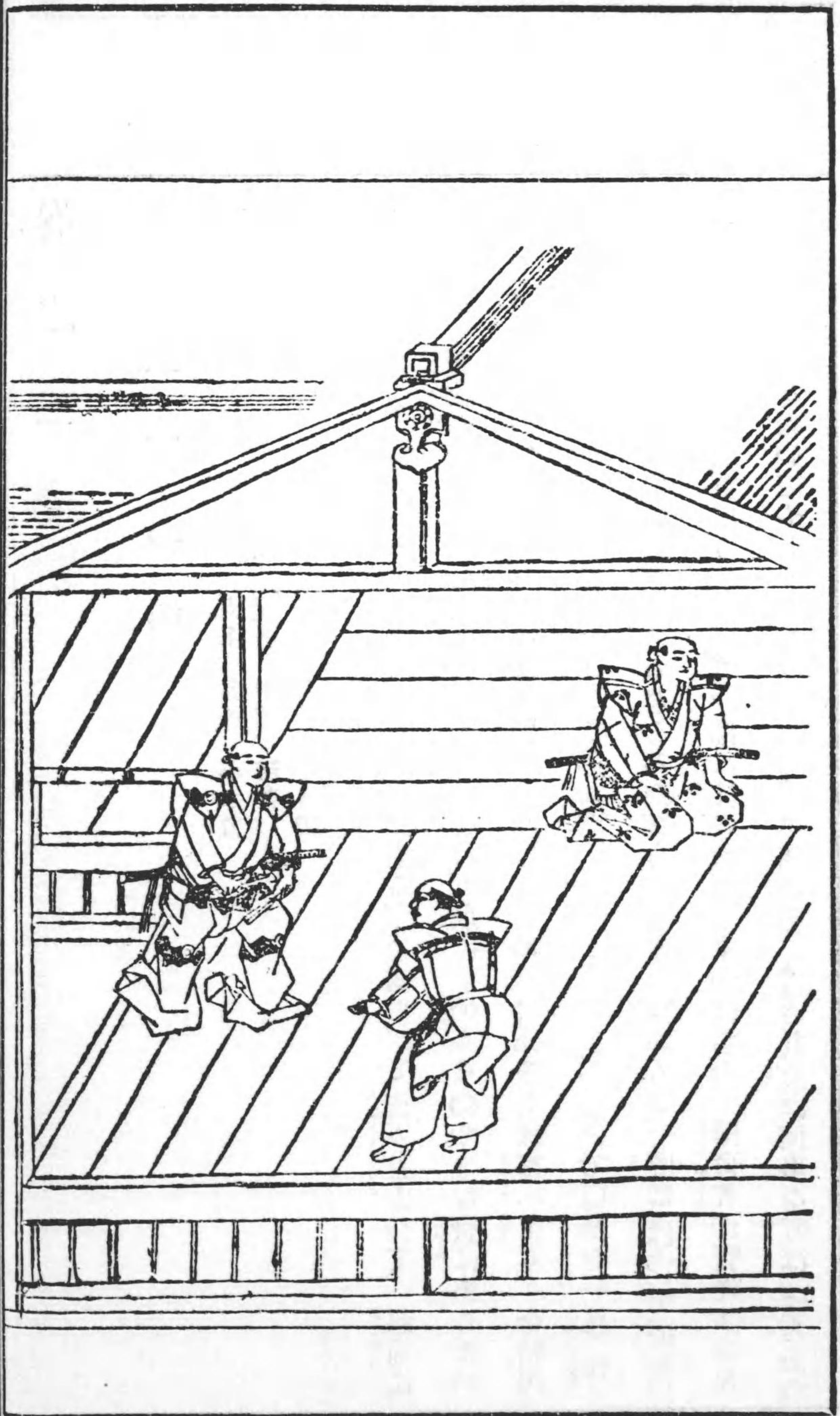
卷之二

一寶の槌

三人
大名 長袴、小き刀
冠者 半袴、腰帶
すり 長袴、小き刀

▲大名 大果報の者、冠者ゐるか。▲冠者 これにゐます。▲大名 やがて皆々打寄つて、眼前に奇特のある寶物を競べさしらるゝ筈ぢやが、おれが所に、何もそのやうな寶はあるまいぞ。▲冠者 さやうの寶はござりませぬ。聞きも及びませぬ。▲大名 そちは都へ上り、奇特のある寶を買うて参れ。▲冠者 畏つてござる。都へ上る。うれしや、ついでに都を一見仕らう。都へは著いたが、寶のありどころを知らぬ。賣り買ふもの、呼ばはつて通る。某もよばはらう。寶買はう〜。▲すり 都に住居致たすつぱぢや。田舎者が寶買はうと云ふ。この者をぬいてやらう。なう〜。▲冠者 何事ぞ。▲すり 其方は何事を呼ばはるぞ。

ぬいてーだまし
て也



▲冠者 寶を買ひたい所で、呼ばはり申する。▲ナリ さて〜、其方は仕合のよい人の。某が
 寶屋の亭主〜。▲冠者 會ひ申したがよい仕合。寶買ひませう。▲ナリ 賣りませう。▲冠者 見
 せて下されい。▲ナリ 畏つた。田舎者ぢや。ぬいてやらう。これ〜寶見さしませ。
 ▲冠者 これに奇特があるか。▲ナリ この寶は、隱篋、隱笠、打出の小槌、三つの寶のうち、
 この槌をもつて打ち出せば、ほしいものが出申する。▲冠者 證據が見たいまで。▲ナリ やす
 い事、其方のほしい物打出してごらうぜ。▲冠者 脇差うちだしませう。▲ナリ 唱へる事があ
 る、教へ申せう。▲冠者 おほえた。蓬來の島なる鬼の持った寶は、隱篋、隱笠、打出
 出の小槌、諸量無量、じよ〜くわつしきこく〜くわつたり。▲ナリ 脇差が出たわ。▲冠者 出
 ました。證據のためぢや。これを某が貰ひませう。▲ナリ 進ずるぞ。▲冠者 代物は何程ぞ。
 ▲ナリ 萬正ぢや。▲冠者 買ひませう。乃ち代物を三條の大黒屋にて進ぜう。▲ナリ 受取りませ
 う。▲冠者 さらば〜。うれしや〜、よい寶を買ひ取つた。この由申さう。冠者が戻つ
 て〜ざる〜。▲大名 何と、寶とよのへたか。早く見せてくれい。▲冠者 寶ごらんなされま

さいく一度々

せい。▲大名これは入らぬ 寶見せい。▲冠者寶とはこのこと。かくれみの、かくれ笠
 この打出の小槌で、ほしい物を打出します。この脇差を打出して、證據に取つて来て
 ござる。▲大名打出の小槌とはこの事か。さらば、何ぞ打出せ。▲冠者お望次第でござる。
 ▲大名さいく馬が入る。うちいませ。▲冠者い得てござる。逢萊の鳥なる鬼の持った寶は、
 かくれ籠、かくれがさ、うちでのこづち、諸量無量じよくくわつしこくにくわつた
 り。▲大名出たか ▲冠者馬が出ますが、この馬には物を食はぬやうに、口をつけますま
 い。▲大名出にくからう。口を付けて打ち出せ。▲冠者前の如く云うて、打ち出すと云う
 て、馬が出ませうが、道の速いやうに、足をたんとつけませう。▲大名つねの馬のやうに
 して打ち出せ。▲冠者この馬に馬道具添へて、つい乗るやうにして、打ち出す程に、その
 まよ乗つてごらうじませい。▲大名こしらへてゐるぞ。▲冠者蓬萊の島なる鬼の寺つた寶
 は 隠籠、隠笠、打出の小槌、諸量無量じよくくわつしこくにくわつたり。▲大名さあ乗
 つたぞく。▲冠者馬ではござらぬ。冠者でござるく。▲大名憎いやつの。やるまいぞく。

こしらへて一度度して

二 伊呂波

二人 親 長袴、小さ刀
 子 半袴、腰帶

▲親これはこのあたりの者。伴が成人した程に、手習をさせうと思ふ。居るか。▲子なん
 でござるぞ。▲親そちも成人したところで、手習をしたらばよからう。▲子心得てござる。
 教へて下され。▲親いろはにはへとちりぬるをわかと云へ。▲子そのやうに、立板に水流
 すやうに教へられては、おほえませぬ。そろくと教へて下され。▲親心得た。い。▲子と
 うしん。▲親何事を云ふぞ。▲子蘭をひけば、燈心ができます。▲親ろ。▲子かい。▲親な
 にと云ふぞ。▲子船には權が添うたものぢや。▲親走り智慧な。是は高野の弘法大師様の
 なされた、いろはと云ふ物ぢや。▲子弘法様の四十八にならしられますか。▲親たど何事
 も某が教へて云ふやうに云へ。▲子親ぢや人の教へらるゝ様にさへ云へば、手習になり
 まするか。▲親なかく。何事も云ふやうに、教へる様にさへすればよいぞ。▲子それは

走り智慧—先走



云ふませう一刊
本に従ふ

やすい事ぢや。こなたの教へらるゝやうに云ふませう。▲親いろはにほへと云へ。▲子
 ろはにほへと云へ。▲親さうではない。いろはにほへとばかり云へ。▲子さうでは
 ない。いろはにほへとばかり云へ。▲親まだ、走りぢゑなやつ、▲子まだ、はしりぢ
 ゑなやつ。▲親にくいやつ。口まねをしをるか。▲子憎いやつ、口まねをしをるか。
 ▲親あと腹だちや。▲子あと腹だちや。▲親おのれを何とせう知らぬ。▲子おのれを何と
 せう知らぬ。▲親腹のたつ。まづかうしたがよい。▲子腹のたつ。まづかうしたがよい。
 お手つ。

三名取川

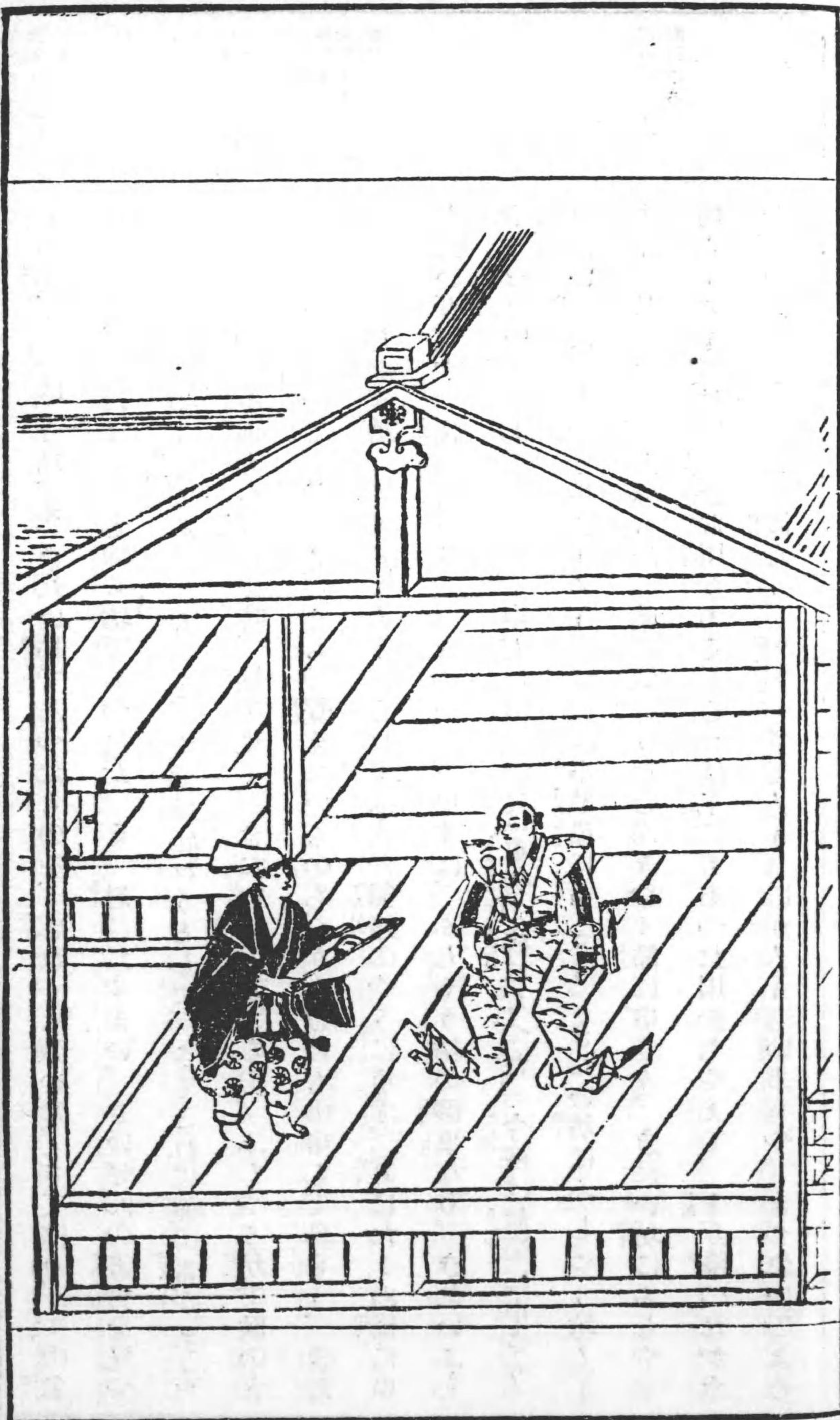
二人 僧 頭巾、衣、括り袴、腰帶、珠數、笠
何某 長袴、小き刀

次第一誦ぶし

戒壇一僧侶に戒を授くる壇也古くは東大寺などあり後には専ら延慶寺也

はりがへーかけがへ

次第僧 戒壇踏んで受戒して、く、わが古寺にかへらん。詞これは遠國方の者でござる。
某が國の習で、戒壇の踏まぬは、出家のやうに申さぬによつて、このたび戒壇の地を
ふみ、受戒まで致いてござる。名を付いて下らうと存じて、さるお寺へ参りてござれば、
大兒と小兒と、手習をなされてござる。おそばへそろく参りて、私は田舎者でござる。
未だ、定まる名がござらぬほどに、名をつけて下されいと、申してござれば、大兒のき
たい坊とつけられてござる。はりがへの名も、つけて下されいと申してござれば、小ち
ごの、ふしやう坊とつけられた。その上御念が入つて、衣の袖にきたい坊、小兒のお手
でふしやう坊と、書き付けて下された。急いで國許へ歸らう。や、さて年月の念願で
ござつたに、この度願成就いたし、このやうな嬉しい事はござらぬ。さて、最前の名は



ひたもの申して
一専ら口に唱よ
る意

ごんぎやうは
動行なるべし

もの坊、あれは、き坊、え、きたい坊であつたものを、忘れうと致いた。さてはりがへの名
がもの坊、あれはなんとやら坊であつたが、え、思ひだすまい。さいぜんの書付を見や
う。え、ふしやう坊であつたものを、すでに忘れうとした。さてこれに氣の毒がある。
若しそちが名を何とお尋ねの時、袖を見て、きたい坊でござるの、ふしやう坊で候のと
云はれぬによつて、どうぞ、そらで覺えたいものぢやが、ひたもの申して参らう。きた
い坊にふしやう坊、くくく。これでは人が氣達のやうに申す。耳にたよぬ様に申
したいが、や、諸節に申さう。きたい坊と申すは、ふしやう坊の御事なり。きたいふし
やうきたい坊ふしやう坊とぞ申しけり。これは重疊の謠になつた。今度は舞節に申さう。
きたい坊にふしやう坊くく。今度は小歌節に申さう。きたい坊にふしやう坊く
く。是では道抄が参らぬ。某に似合うたごんぎやう節に申さう。きたい坊にふしやう
坊くく。是に大きな川がある。これは上にもあつた川かぢやまで。上が降つたか水
が濁つた。まづ急いで渡らう。川にてこさてく、にがくしい事ぢや。まづ急いでまる

権現一熊野三所
権現とて本宮新
宮那智也
光源氏の古云々
一源氏物語賢木
の巻に源氏の歌
あり「ふりすて
てけふはゆくと
も鈴鹿川八十瀬
の波に袖はぬれ
じや」御息所の
返歌もあり
安の川一野洲川
のこと

らう。何やら落したやうにもあるが、何も落しはせぬが。珠數あり、笠あり、扇あり、
身共が名を忘れた。あれはもの坊、え、思ひだすまい。さいぜんのやうに、拍子にかよ
つて申して見やう。もの坊と申すは、なんとやら坊のことであつた。書付を見やう。南
無三寶名を流した。遠うは参るまい。最前の所へ行て、抄はうと存する。こよであつた。
舞流ははてじ水の面く、底なるおれを抄はう。われはまた、戀をする身にあらねども、
うき名をながす腹たちや。地川はさまざま多けれど、伊勢の國にては、天照大神の住み
たまふ、御裳濯川もありやな。熊野なる音無川の瀬々には、権現御影をうつしたまへり。
光源氏の古、八十瀬の川とながめ行く、すどか川をうち渡り、近江路にかよれば、幾瀬
渡るも安の川、洲股、あじか、ぐんぜ川、側は淵なる片瀬川、思ふ人によそへて、阿武
隈川もこひしや。つらきにつけてくやしきは、あひそめ川なりけり。墨染の衣川、衣の
袖をひたして、岸かけの柳の眞菰の下を、おしまはしくて抄ひあけく、見れば雑魚
ばかり、わが名は更になかりけり。わが名はさらになかりけり。さてもことの外のさこ

洲股一墨俣川と
も書く今は長良
川の別名なれど
もと木曾川の下
流を云ふ
あじか一足近川
とも阿志賀川と
も書く木曾川の
分流也
ぐんせ川一郡上
川か上之保川
(長自川の上流)
の事
阿武隈川一磐城
を流る逢ふ意
つゞけたり
あひそめ川一筑
前太宰府にある
藍染川也逢初の
意に用ゐる
衣川一陸中
非時一午後の食
事
名取川一陸前
御假名一假名は
浦稱

ぢや。非時の汁にしたらばよからう。▲何某これは何某でござる。これく御坊、この所は殺生禁斷の所ぢやに、なぜ殺生めさる。▲僧殺生はいたさぬが、この川は何と申す。▲何某名取川と申す。▲僧向の在所は。▲何某名取の在所。▲僧こなたの御假名は。▲何某名取の何某でおぢやる。▲僧さては、最前の名をきやつがしてやつた。この方へ取らうと存ずる。私わたくしは田舎者でござる。はるく上つて、付けて貰うた名でござる程に、最前の名を下されい。▲何某そなたの名が何と云ふやら存ぜぬ。▲僧さいせん、この川の名は名取川、こなたの御假名は、名取の何某ぢやと仰せられぬか。▲何某何某ぢやによつて云うたが、それが何と。▲僧すつて、こなたが取らせられいで、誰が取らう。慈悲になりませう。下されい。▲何某希代な事をおしやる。▲僧そのきたい坊と申すが、私が名でござる。とても事に、はりがへの名をも下され。▲何某さいせんのは、ふと申し合せて仕合。はりがへの名は存ぜぬ。▲僧この名を云はねば、どつちへもやらぬ。▲何某さてく、不祥な所へ來かよつた。▲僧そのふしやう坊と申すが、わたくしが名でござる。▲何某ふしやう

してやつた一取
つたの意
希代一不思議
不祥一不吉
を云々以下
曲にかゝる

坊と申すが、そなたのはりがへの名か。▲僧をよ、それぞろよ名取殿。きたい坊にふしやう坊く。二つの名をば取り返し、本國さしてかへりけり。

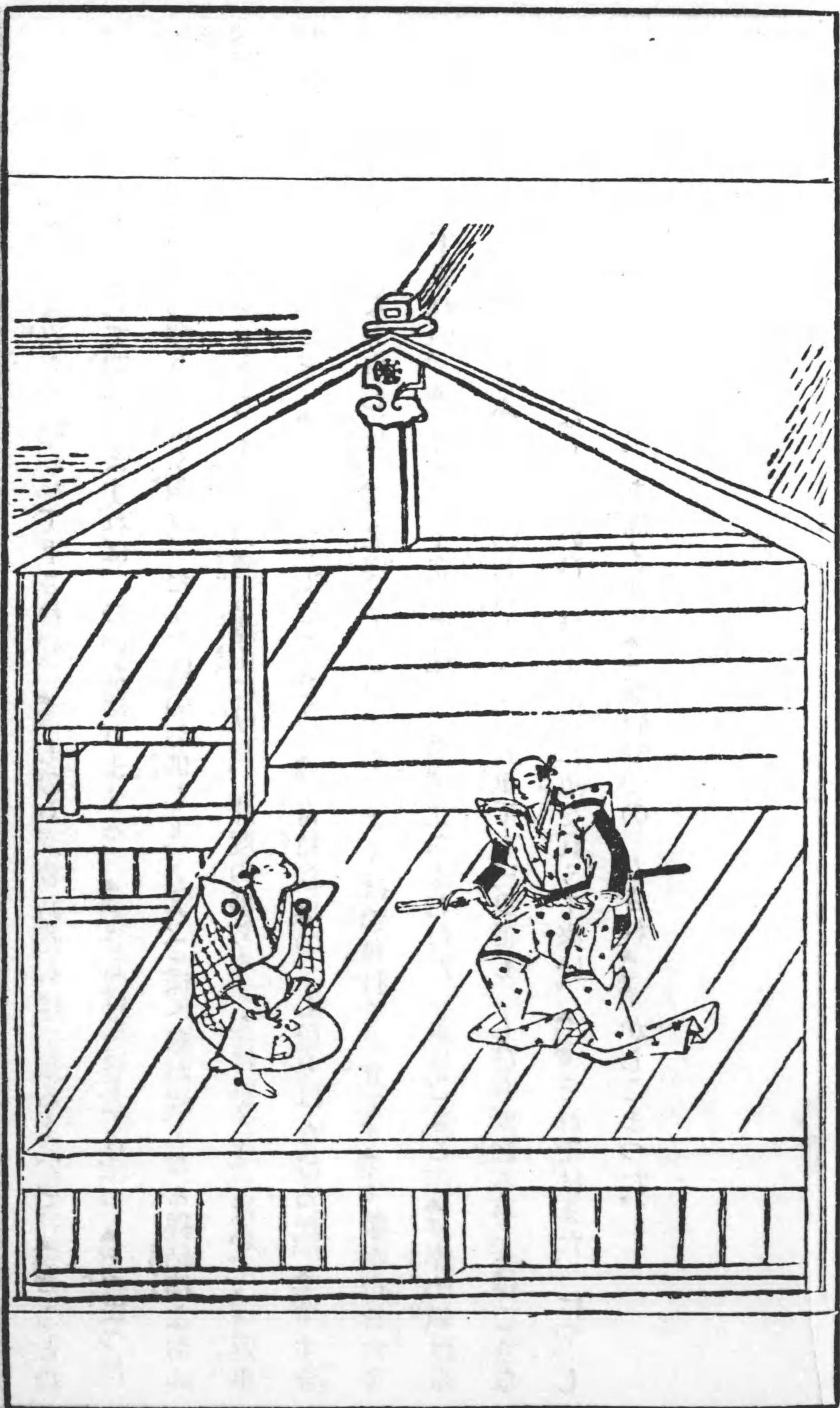
四 痺しびり

二人

主 長袴、小き刀
冠者 半袴、腰帶

作病—假病に同

▲主 あたりの者。冠者あるか。 ▲冠者 お前に居まする。 ▲主 やがて客がある。淀鯉を買ひに行け。 ▲冠者 変つた。 ▲主 早う戻れ。 ▲冠者 心得ました。夜も曉も、鯉を買ひにまるれくとおしやるは、定の事、たゞ作病をして参るまい。あ痛くくく。 ▲主 冠者は何としました。 ▲冠者 親のゆづり置かれ申した痺がおこつて、あゝ痛やく。かなしやく。 ▲主 何と、しびりがきれたと云ふか。 ▲冠者 親の時より よそへゆきともないと思へば、そのまゝ起ると云はれましたが、俄にしびれがきれてござる。 ▲主 よく休め。 ▲冠者 畏つた。 ▲主 思ひつけた。某の仕りやうがある。何とをぢご様より、俄なれどもふるまひにまるれ、乃ち冠者をも呼ぶと云うて使が来た。おれは参らうず。冠者はなるまいと云うて返事せい。 ▲冠者 なう、だんな様。 ▲主 何ぞ用か。 ▲冠者 申し、をぢご様へおふるまひにお出なら



いかにしびり云云
云一痺と云ふ抽
象的の物を擬人
したるが滑れ也
すきと一すつき
りと

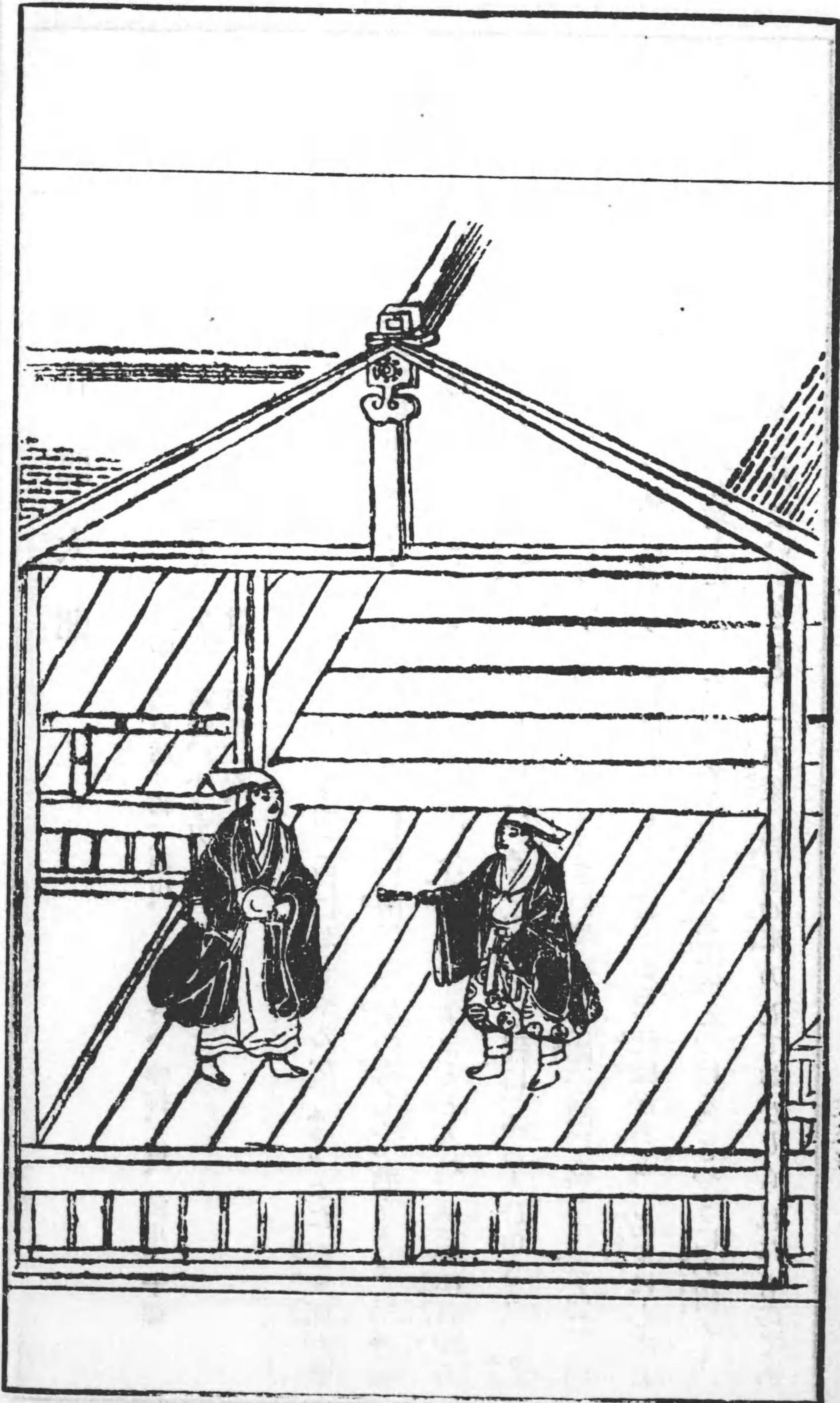
ば、某も召し作れられて下されい。▲主しびりがきれたらば、なるまいぞ。▲冠者ことわりを申して聞かしますれば、ついなほりまする。▲主さらばなほして見よ。▲冠者畏つた。いかにしびりよく聞け。だんな殿のお供して、をちご様へ参れば、なる程結構なおふるまひを下さるよ。よい酒も澤山に飲む。此度の事ぢや、なほれく。ほい。▲主返事は誰がしたぞ。▲冠者しびりでござらう。▲主奇特な事の。しびりはなほるか。▲冠者すきとようなり申した。▲主名譽なしびりぢや。よくば追付行く。立て。▲冠者手をひきたてて下されい。▲主さあく立つて見よ。▲冠者立ちましたが、ようござる。▲主痺の氣はないか。▲冠者おふるまひのお供しては、五里でも三里でも、しびりが起る事ではござない。▲主さやうならば、いひつけて置いた魚を買うて来い。▲冠者それではまた、はや、しびりが起りまする。あ痛く。▲主憎いやつの。しされ▲冠者かしこまつた。

五 悪太郎

太郎 始め括り袴、頭巾、うちかけ、棒持、後、頭巾、十徳
三人 長袴、小き刀
僧 頭巾、衣、珠數、鉦

酒に酔ひて云々
一元來割注にす
べき訓なるべし
悪坊の如く云々
一これも同上

▲あく太郎酒に酔ひて出るあく坊のごとく。をちご内におぢやるか。▲をちまた悪太郎がきた。▲太郎お見舞申し申す。▲をちそのやうに酒に酔ひて、氣の毒ぢや。酒をとまれ。▲太郎御意見かたじけない。とまりませう。▲をちよい合點ぢや。すきととまれ。▲太郎明日からとまりませう。酒の暇乞に、一盃下されい。▲をち暇乞ぢや程に、ふるまひ申さう。云うて五六
ばい飲む。▲太郎もはや、さらばく。▲をちまた酔ひて寝る。▲をちさいぜん悪太郎が酒にゑうて去んだ。道にがな寝まうせう。見に参らう。されば餘念もなく寝てる。仕様がある。坊主にしておきませう。悪坊の如く坊主にして、そちが名を南無阿彌陀佛とつける。さやうに心得く。太郎目さまし。▲太郎これはいかなこと。この様に釋迦如來のしておかしられたものであ



阿彌陀佛一無量壽佛又は十二光佛など譯す

らう。▲僧南無阿彌陀佛なむあみだぶつ。▲太郎さてく、はやく某の名を知つて、何者やら呼ぶが。
 ▲僧なむあみだぶつなむあみだぶつ。▲太郎やあく。僧いるくは念中、太郎返事いるくにする ▲僧其方は何者なれば、某の名號を唱へれば、返事をめさるぞ。▲太郎某は悪太郎と云ふ者ぢやが、酒に酔ひ寝たれば、この如くにしておいて、おれが名を南無阿彌陀佛と、付けるといふと思つたれば、目がさめた。其方が呼ぶによつて返事をする。▲僧其方は何も知らぬ。西方十萬億の阿彌陀佛といふお佛がまします。名號を唱へてあれば、死してのち、極樂といふ所へ往生するによつて、愚僧も諸國修行して念佛を申しまうする。▲太郎仔細あることぢや。某も其方の弟子となつて、お供して諸國へまゐりたい。連れて下されい。▲僧やすいこと。つれだち申さう。▲太郎この容態をうたうて參らう。よし今よりうき世の事を思ひきつて、只一すぢに阿彌陀を頼うで念佛申し、修行にいざや出でうよく。

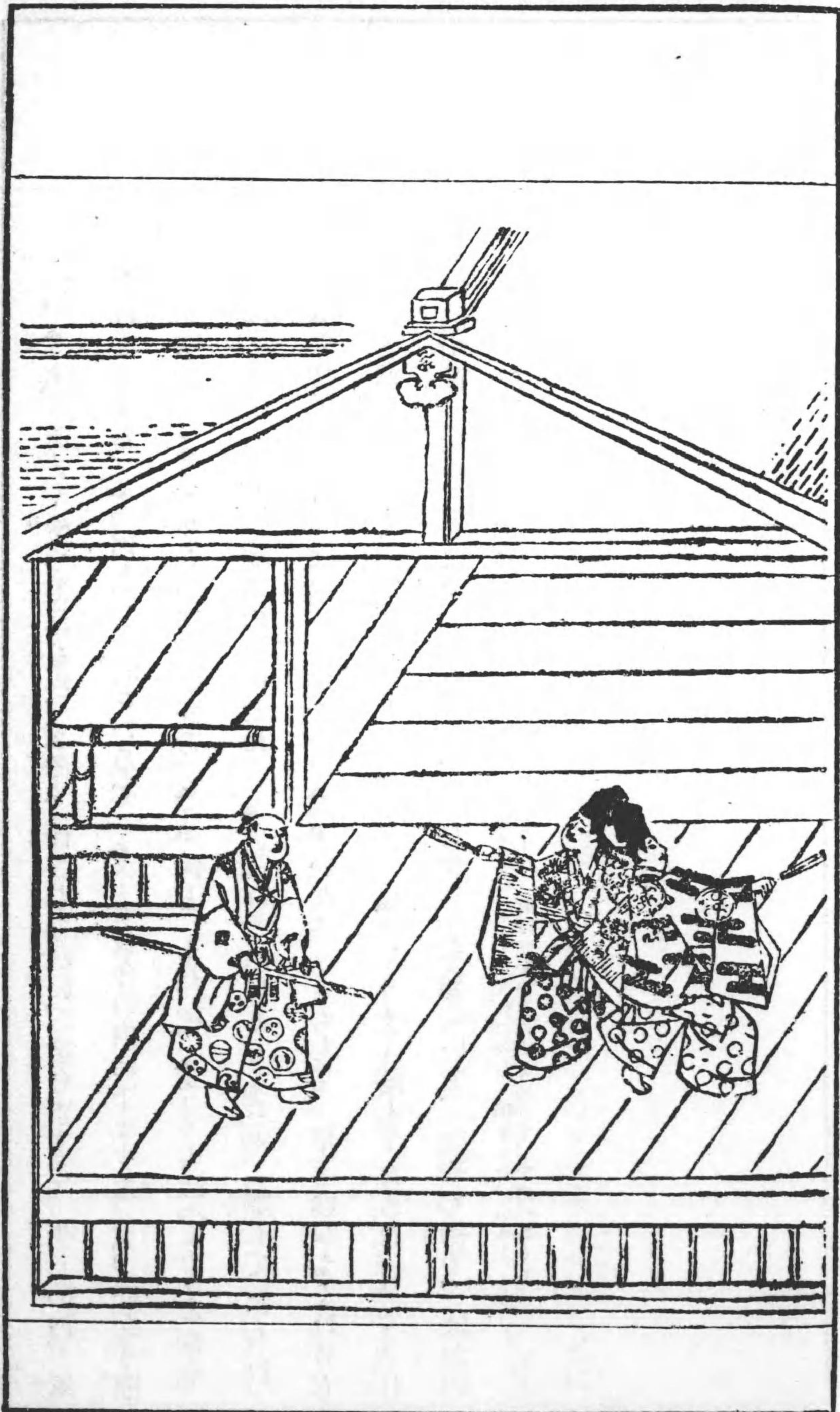
早漆一名塗附

六 早 漆

三人

男 烏帽子、上素襖、下半袴、腰帶
伴れ 同じく
塗師屋 羽織、半袴、腰帶

▲男 人の御存じの者、年の暮ぢや。歳暮に参らう。申し、ござるか。▲つれ何事でござるぞ。
 ▲男 歳暮の禮に、いざござるまいか。▲つれなかくお供申さう。▲男 さあく、ござれ
 ござれ、▲つれ参るく。▲ぬしやこのあたりに住む塗師屋ぢや。町へ参らう。早うるし、
 日本一の早漆々々。▲男 申し。ぬしやが参つた。こなたの烏帽子も某がゑほしもはけた。い
 ざ談合して塗らしませう。▲つれ一段ようござらう。▲男 これく。▲ぬしや 何でござるぞ。
 ▲男 この烏帽子をぬりたいが、何と、ならうか。▲ぬしや 某は日本一の早漆でござる。塗り
 直して進じまうせう。▲男 何と、早う出来申するか。▲ぬしや そのまよ、著ながら塗り直
 して進じまうせう。▲男 さらば兩人ながら頼みたい。▲ぬしや 心得ました。これへ寄らし



らしい。▲つれさあく塗つてたもれ。▲ぬしゃ任さしらしい。塗りまする。少しの内、風呂へ入れまうする。▲男何と、手間がいるか、▲ぬしゃ只今の内に干まする。▲男いかう窮屈なことぢや。▲ぬしゃ少しの内でござる。▲つれ何と、まだか。▲ぬしゃもはやようござる。はあ、漆は干しましたが、綴ち附き申した。▲男これでは何ともならぬ。離してたもれ。▲ぬしゃ唯し物で、離さずはなりますまい。▲つれいかやうともして、早うはなしくれさしめ。▲ぬしゃ追付はやしもので、はなしまうせう。▲男早うく離してたもれ。▲ぬしゃ日本一のはや漆塗ることは塗つたれども、はなすやうを知らいで、はやし物で、はないた。けにもさあり。やよ、けにもさうよの。

四五返もはやして、二人のなかへ權をいれ、いろくし
まひして、はつばいひうるひと云うて、三方へこくる。

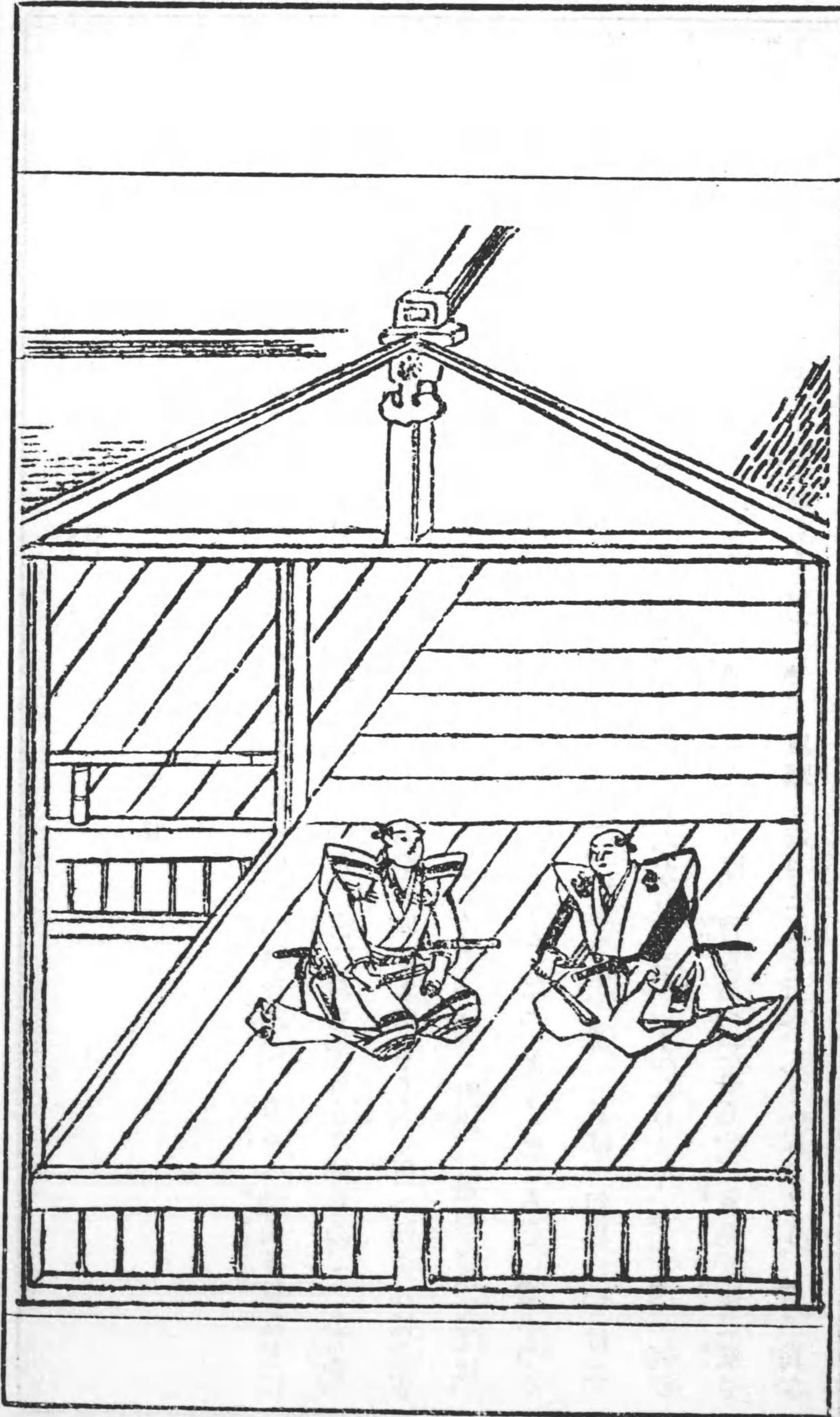
歌相撲一名土筆

七 歌相撲

二人 平八 長袴、小き刀 孫一 同じく

▲平八これは、このあたりの者。いつも春になれば、つれを誘ひ、方々へ遊山花見などに参る。好い日和ぢや。いつも孫一殿を誘うて参る。宿におぢやらうか知らぬ。こよぢや。ものも。お案内。▲孫一誰ぞ、たれぞ。▲平八某ぢや。いつものごとく、野へゆさんにござるまいか。▲孫一なかく、毎年の如く、つれだちまうせう。▲平八野邊へ遊山に出でては、草も青う見えて、春めいた事の。▲孫一心がはれぐとして、ようござるぞ。▲平八つくしが生えました。▲孫一まことにおびたどしい事ぢや。▲平八某は一句思ひつけた。▲孫一聞きませう。▲平八つくくの首萎れてぐんなり。▲孫一ぐんなりく。笑ふ。▲平八何がかしいぞ。▲孫一ぐんなりく。▲平八ぐんなりは、昔もあつた事ぢや。眞葛が原に風さわぐんなりと云ふ名歌もあるぞ。▲孫一風騒ぐなりとこそ云へ。ぐんなりく。▲平八異な

眞葛が原に云々
一騒ぐなりを撥
音にて云へる也
慈圓大僧正の歌
にて新古今集に
出づ上句は「我
戀は松を時雨の
染めかねて」



難波津に云々
この歌古今集序
に見ゆ王仁が仁
徳天皇をよそへ
て詠める歌とい
ふ

事を笑ふ人ぢや。▲孫一これはしやくやくが出たわ。▲平八芍薬の花はみごとなれども、歌
 によみませぬの。▲孫一歌によみましたともく。難波津にしやくやくの花ふゆごもり、
 今をはるべにしやくやくの花と、詠うでござる。▲平八その歌某も知つた。咲くやこの
 花ふゆごもり、今を春べと咲くやこの花でこそあれ。しやくやくのはなく。笑ふ。▲孫一そ
 の方は笑ふか。▲平八笑はいでなんとせうぞ。をかしやく。▲孫一そのやうに笑はど、相
 撲を一番まるらう。▲平八相撲取りには来ぬ。野遊山に参つた。▲孫一でも、そのやうに笑ふ
 からは、ぜひとも一番相撲を取りまうせう。▲平八その方と取つても、あまり負くること
 でもあるまい。所望ならば一番まるらう。▲孫一さあく、一番取りまうせう。▲平八お手
 つ。勝つたぞく。▲孫一一番とつては知れぬ。今一番とれく。

八 鷄 聾

三人 舅 長袴、小き刀
冠者 牛袴、腰帶
聾 烏帽子、素襖、袴、小き刀

▲しうとこれはこのところの大名。けふは聾入がある。太郎冠者あるか。▲冠者お前に。
▲しうと今日は聾殿のおいでぢやほどに、お出の時分、此方へ申せ。えい。▲冠者はあ。▲むこ
これは花聾でござる。今日聾入致さうと存ずる。舅はこれでござる。ものも。▲冠者や、た
そ。どなたでござる。▲むこむこです。▲冠者はあ。これへお通りなされませ。▲むこ心得
た。うたむ聾は舅のうちに行き、く。お座敷までは、歴々なりとて、かよりのもとにぞ
立つたりけり。くわつくく。うたむ舅はこれを見るよりも、廣縁より飛んで下り、羽
だたきしてぞ立つたりけり。▲冠者申し、何事でござりますぞ。▲しうとやい、總じて聾の
恥は舅の恥、舅の恥は聾の恥、構へて笑ふな。▲冠者はあ。また前のはり、には
また前のはり、には鳥の職合よまねする。こくわつこ

かぶり蹴鞠の庭

構へて一必ず也



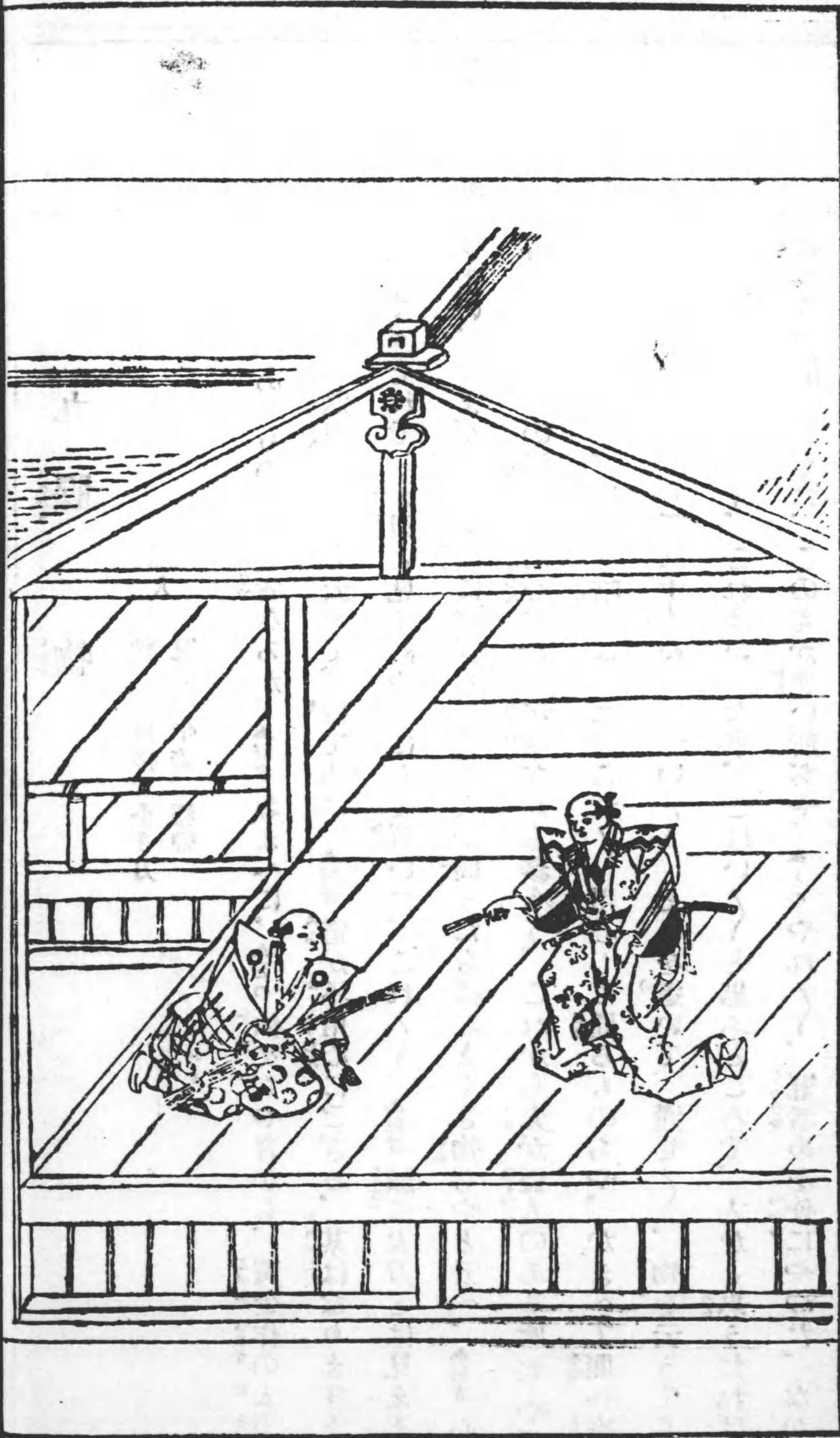
こくわつこくくく。やるまいぞく。心得たく。

九 腥 物

二人 殿 長袴、小さ刀
冠者 半袴、腰帶

▲このこのあたりの者。冠者をるか。▲冠者 おまへに。▲この伯父ぢや者から、黄金作の太刀を借つた。返進を仕ると云うて、持てゆけ。▲冠者 道が不用心にござる。某はなりますまい。▲このそれで、太刀と見えぬやうにして置いた。これく。▲冠者 誠に太刀とは見えますまい。なまぐさ物の様にござる。▲この人が問うたらばなまぐさ物ぢやと云へ。▲冠者 心得ました。あの道は不用心ながら、迷惑ながら参らう。これから先が盗人のある所ぢや。はや日が暮れた。いかう暗うなつた。これく用心して通るものぢや。かまへて側へ寄るな。あゝ何者やら二三十人ある。やいく、そこを退いて、通せく。物を云うてくれい。やいくく。これはいかな事。こはいくと思ふところで、人かと思つたれば杓ぢや。肝つぶした。この先が悪い所ぢや。▲このやれく、冠者めを使にやつた。なか

類 なまぐさ物 魚



なか参る事はなるまい。太刀を人に取られぬ内に、後から参り見ませう。はあ、こよに怖しがつて獨言を云うてる。嚇ませう。▲冠者 南無三寶々々々々、化物がある。あゝ大佛のせいより夥しい。▲このがつきめく。▲冠者 あゝ悲しやく、助けて下され。▲このおのれが持った物は何ぢやぞ。▲冠者 これは黄金作の太刀ではござらぬ。腥物でござりまする。▲このいやく、腥物ではあるまい。偽いうたら仕様があるぞ。▲冠者 あゝ、ありのまゝ申しませう。助けて下されい。黄金作の太刀でござる。▲この其太刀そこに置いて行け。▲冠者 畏つてござる。則ちこなた様へ進上申しまする。命の義をお助けなされませい。▲この命助くる。早う去ねく。見るなく。▲冠者 あゝ、見ませぬく。やれく、こはやく。急いでかへりまうせう。ござるか。▲この冠者 歸つたかく。色が悪うをかしい顔ぢや。▲冠者 好いお目かなく。なうく、怖しいめに會ひました。冠者ひとり拾はせられた。▲この何とした事に會うたぞ。▲冠者 大佛あたりへまると、四五十人して某をとりまはして、おひはぎどもが。▲このして、なんと。▲冠者 常々の手柄のほどを見せ

冠者ひとり拾はせられた一殺さるべきもの助かりたれば然か云へる也

まうせうと思つて、真中へ取込められながら、おれをえ知らぬか、頼うだ者の御内に隠れもない冠者、一人ものがすまいと申してござれば、長刀の、槍のと申して、手にく持つてかゝる。中にもとびがねに、近頃迷惑仕つて、▲とのとびがねとは。▲冠者かうくかまへて、つうくとおこすものよ。▲とのそれは弓であらう。▲冠者されば、弓をおこしましてござる。槍も長刀も切り折つてござる。▲この手柄をしたな。▲冠者その持つた物は何ぞと申すところで、これは黄金作の太刀ではない、なまぐさ物ぢやと申したれば、それをおこすまいか、射殺せと申すところで、やるまいとは思へども、こゝで死すれば犬死ぢや、主の用にたよねばならぬ、是非に及ばぬ、乞食に取らしたと思ふと申して、四五十人のなかへやつて一文字にかへりました。手柄を致いてござる。▲このあの臆病者、その太刀を取つたは某ぢや。▲冠者こなたはいつはりを仰せらるよ。▲このおのれめは、大佛よりおびたどしいのなどと云つてこはがる。おれが、がつきめ。びつくりする。それ見よ、今もびつくりするわ。▲冠者落武者と申すは、薄の穂にもおちると申すが、定ぢや、おびた

一文字―眞直のこと

ていど―きつと

そのつれ―其様な事

だしいめにあひました。その上ぢやとところで、びつくりと仕つた。▲このたしかに證據があるが、いつはりを云ふ。▲冠者證據はござるまい。▲このていどか。▲冠者なかく。▲このこれく、これぢや。▲冠者申しく、富貴なお方ぢや所で、このやうな物を數を持つてござると存する。▲このまだそのつれ云ふか。憎いやつの。▲冠者あゝ免させられいく。▲このどこへ。やるまいぞく。

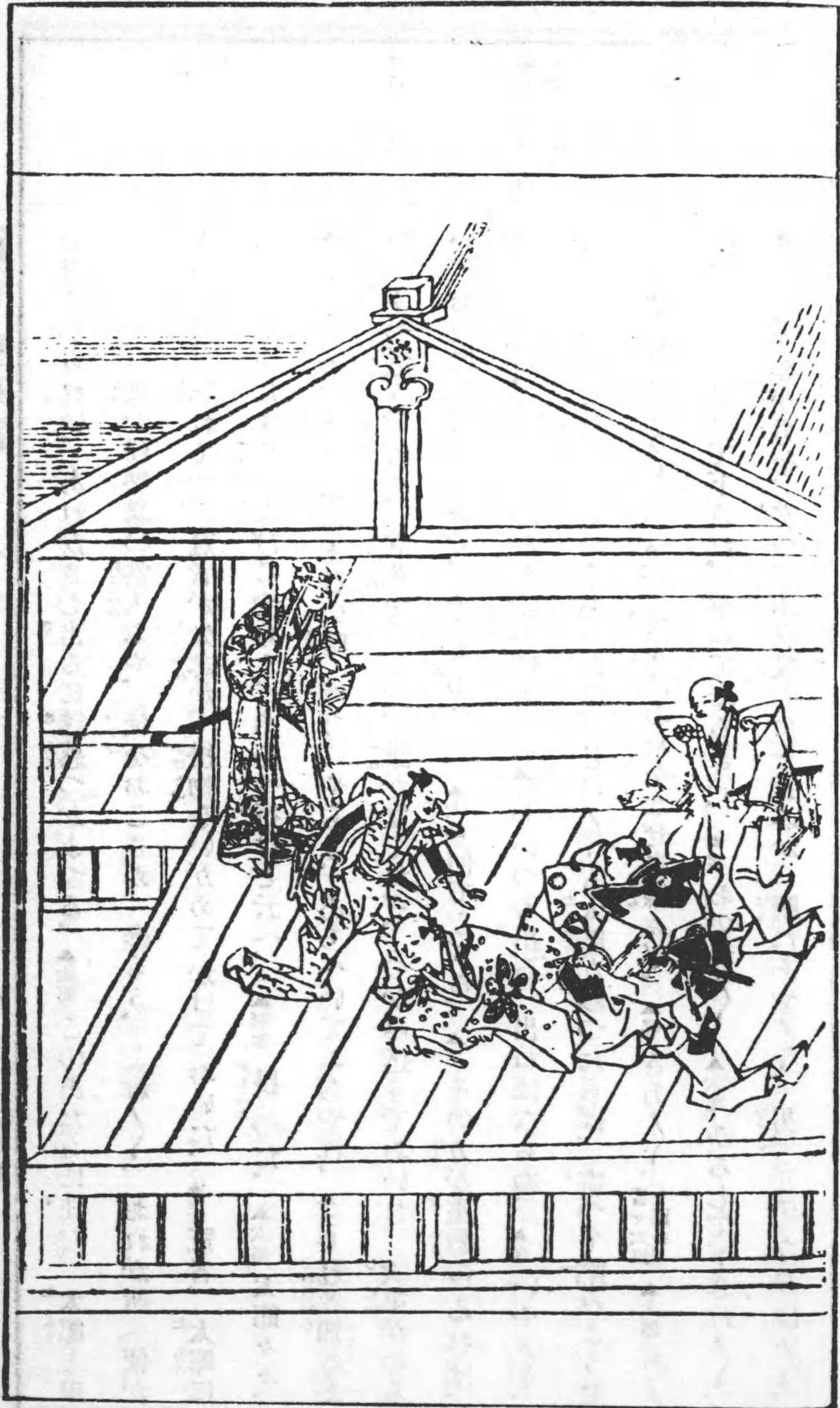
十乳切木

七人

太郎	上素襖、下牛袴、腰帶
女房	びなん、箔、さげ帯
主	長袴、小さ刀
冠	牛袴、腰帶
客三人	長袴、小さ刀

伊勢講 伊勢参
宮の講社

▲主 この在所の者。伊勢講の當にあつた。皆々呼びませう。冠者。▲冠者 お前に。▲主 伊勢講ぢや。皆々お出なされませいと、申して呼びに行け。▲冠者 心得ました。どれから参らうぞ。どなた様へから参らう。申し、ござるか。▲客 誰ぢや。冠者か。▲冠者 もはや皆々様にお出なされて下されいと申さるよ。▲客 どれくもこゝ許へ来てぢや。早つれだちて参らうと云へ。▲冠者 やがて待ちます。▲客 心得た。皆々様呼びにまゐつた。ござれく。只今お使過分にござる。▲主 揃うて御出、満足つかまつる。通らしられい。▲客 さあ、どれくもこちへ寄らしられい。▲主 今日は太郎めに知らせぬ。さやうに



立花一生涯

話がしまぬ一話
が熟せぬ也

心得さしらしい。あれがさし出るに迷惑つかまつる。▲太郎このあたりに住む。太郎と申す者ぢや。誰が伊勢講の當人ぢや。使をおこさぬ。参らう。これく。おれが所へ使がまるらぬ。忘れてか。冠者が失念か。掛物をいがめてかけておいた。▲主冠者、太郎にふるまひをだす時、よびにやらう。あちへ行けと云へ。▲冠者 畏つた。▲太郎 太郎々々。▲太郎 何ぢや。▲冠者 ふるまひの時、呼びにやらう。あちへいておぢやれ。▲太郎 冠者知るまい。すつ込うで居よ。立花をしたが、誰が立てたぞ。つかみ込うでおいた。次第がわるい。おれにと云はせいで。▲主 太郎々々。▲太郎 何でござる。▲主 その方が座敷にゐれば、話がしまぬ。後に。ふるまひの時出よ。▲太郎 いつも出る。出ねばならぬ。▲客 いやく、皆々のいやとおしやる。そちへいけ。どれくも太郎が参つたらば、寄つて踏みまうせう。▲客 好うござらう。▲太郎 皆々はおれをなぜに嫌ふぞ。▲客 さあく。▲主 皆々太郎あゝかなしや。助けて下され。重ねて参るまい。▲客 おのれく。▲太郎 ゆるして下されく。▲太郎が女房 妾が男を、寄つてふみ殺したと云ふか。腹だちやく。男、このなりはく。

はたせー殺せの
意

▲太郎 かなしやく。もはや参るまい。助けて下されく。▲女房 妾が来たわく。▲太郎 女房ども、何と申うておぢやつたぞ。▲女房 そのやうに踏まるよものかく。▲太郎 いやく、ふまればせぬ。雪駄の紋所をつけて下された。▲女房 おのれ、はたせく。▲太郎 女房どもは命をたくさんさうに、おれはならぬ。其方頼む。はたしてたもれ。▲女房 はたしに行かぬか。もはや宿へよせぬぞ。女のはたしに行くと云ふことがあるか。▲太郎 それならば、はたしに参らうが、一人はゆかれまい。▲女房 おれもつれだち申する。▲太郎 その方が行けば、きつぱりと、はたしに行くぞく。▲女房 この刀をさいて棒を持つて、先へゆけく。▲太郎 誰が所へ参らうぞ。市助が所はこぢや。▲女房 押入つて、はたせく。▲太郎 市助様はお宿にか。▲女房 めと云へく。様と云ふ事があるか。▲太郎 つつと氣のはやい人ぢや。まづ待たしめ。▲市助 留守々々。▲太郎 留守ぢやわいの。るすはしやうことがない。内に入るならば、こみ入り、この棒で臍を薙ぎ折つて、腹へ上つて踏み殺してやらうもの。腹だちや。▲女房 よく云はしました。文七が所へ行け。▲太郎 心得た。文七はこぢや。▲女房 早

無やか
ざひやな一是非
乳切木一太く長
き杖

くはたせく。▲太郎 文七様は、内にござりまするか。ござるか。▲女房はらだちや、文七めはうちにゐるか、出よ、はたすと云へ。▲太郎 いやく、氣い短い人ぢや。▲文七 留守留守。▲太郎 又留守ぢや。おのれめ、内に居る事ならば、その儘刀で手も足も、切つてのけまうせうもの。▲女房 よう云はしました。▲太郎 もはやない。この有様を、いざ諺にうたうて宿へ歸らう。▲女房 それがよからう。▲太郎 こよやかしこ、訪へどもく、皆々留守にてぜひやな。諍果てての棒乳切木と云ふ事も、かよる事にてあるやらむ。▲女房 いとほし人ぢや。負うて往なう。

卷之三

一 竹生島詣

二人 大名 長袴、小き刀
冠者 半袴、腰帶

▲主 これは、このあたりに住居致す者でござる。某一人召使ふ下人が、此中暇も乞はいで、何方へやら参つてござる。聞けば、夜前罷歸つたとは申せども、未だ某に目見えを致さぬ。あまり腹の立つ事でござるほどに、今日きやつが私宅へ立越え、たばかり出いて、きつと折檻の加へうと存する。まづ急いで参らう。やあさて、憎い事でござる。某に暇の義を申してさへござらうならば、いか程なりとも取らせませうに、にくい仕合でござる。や、まるる程にこれぢや。某が聲を聞き知つて、留守を使ふでござらう。作聲を致して呼び出さうと存する。ものも。案内も。▲冠者 やら奇特や。夜前罷り歸つたを、はやど

奇特一不思議



なたやら御存じあつて、表に案内がある。案内は誰ぞ。▲主ものも。▲冠者どなたでござ
 る。▲主しさり居る。▲冠者はつ。▲主や、俄の慇懃迷惑いたす。お手あけられい。▲冠者こ
 れは何とも迷惑に存じます。▲主おのれは此中誰に暇を乞うて、いつかたへ行てあるぞ。
 ▲冠者さればその義でござる。御暇の義を申さうとは存じてござれども、一人召使はるよ
 下人の義でござれば、申上げたりとも、やはかお暇をくだされまじいと存じて、忍うで
 竹生島詣を致いてござる。▲主やら珍しや。一人召使はるよ下人が、竹生島詣をすれば、
 主に暇を乞はぬ法ですか。▲冠者はつ。▲主えい。▲冠者はつ。▲主憎いやつの。忽ち折檻の
 加へうと存じて、これまでは立越えてござれども、竹生島詣をしたと申せば、一つは天
 女へのおそれもあり、この度はゆるさうと存ずる。やい。▲冠者はつ。▲主忽ち折檻を加
 へうと思つて、これまでは来たれども、竹生島詣をしたとあれば、一つには天女へのお
 それもあり、この度はゆるす。そこをたて。▲冠者それはまことでござるか。▲主弓矢八幡
 助くるぞ。▲冠者やら心安や。▲主さて今の間は、窮屈にあつたか。▲冠者いつもの御氣色と

竹生島—琵琶湖
 中に在り景行天
 皇の時湧出せり
 と云ふ
 天女—竹生島に
 は辨財天を祀る
 女神也

いかい大層な
る意

ちくちく一啼聲
を父々の意に取
る
こかあ〜一啼
聲を子かあの意
に取る
わざとした事
取りとめ無き事

は、變かはらせられてござるによつて、すはお手打てうちにもあひますかと存じて、身の毛けをつめて居りました。▲主さうあらう。身みもいつもよりも腹はらが立つた。以來いらいをたしなめ。▲冠者かしの畏こつてござる。主▲さて身共は、つひに竹生島ちくぶしまへ参らぬが、いかい参まゐりか。▲冠者かしのされば、まゐり下向げかうの人、峰みねから谷たに、谷たにから峰みねへ、おしも分けられた事ではござりませぬ。▲主何がなに天女てんによの御事おんごぢやもの、さうあらうとも。さてめづらしい事はなかつたか。▲冠者かしの別に珍づししい事もござりませなんだが。申し、私は只今ただいままで、雀すずめと鳥からすとは別の鳥とりかと存じて居りましたが、親子おやこでござる。▲主それはどうした事ぢや。▲冠者かしのまづ参りまする道みちに、大木たいぼくがござつた。片枝かたえだには雀すずめがとまります、片枝かたえだには鳥からすがとまつて居りましたが、雀すずめが鳥からすの側そばへまゐりて、ちよ〜と申してござれば、鳥からすが雀すずめをきつと見まして、こかあ〜と申してござる。すれば、疑うたがふ所もない親子おやこでござる。▲主さて〜汝なんぢはむざとした事をいふ。雀すずめのちよと囀さへづり、鳥からすのこかあと鳴なくは、皆面々みなめんめんの囀さへづりやうぢや。それが、自然しぜん同じ木きにとまり合あはせたとあつて、親子おやこであらう事わ。そのやうな事ことでなしに、珍めづしい事はなかつた

親子であらう事
わ一反語也親子
ならずの意
こびたもの一か
はつた物
かいる一判本の
まゝ
くちなは一蛇の
こと

秀句一口才也洒
落也

か。▲冠者かしのまだめづらしい事がござりました。▲主それ〜、それを聞かうと云ふことぢや。▲冠者かしの神前しんぜんの傍かたはらに、大きな芝しばがござつた。これにこびたものが集あつまりました。▲主何がなに集あつつたぞ。▲冠者かしのまづ、龍たつ。▲主龍たつ。▲冠者かしの猿さる。▲主猿さる。▲冠者かしのかいる。▲主蛙かいら。▲冠者かしのくちなは。▲主くちなは。▲冠者かしのこの者共ものどもがあつまりてござる。▲主これは早速さつそく不審ふしんがあるわ。世よの世話せわに、中なかのわるいものを犬いぬと猿さるとのやうなと云ふが、中なかのわるい體ていは見えなんだか。▲冠者かしのいや、別に中なかのわるい體ていも見えませんが、この者どもが集あつつて、何ぞ談合だんかふを致すと見えまして、立たち様に、秀句しゅうくを申して立ちましたが、これがなか〜面おも白い事ことでござりました。▲主それは何と云うたぞ。▲冠者かしのまづ龍たつが申しますは、各おのこれにござれども、私は所用しよよう御座候ござうによつて、この御座敷ござしきをたつですと申してござる。▲主なんぢや、龍たつが秀句しゅうくに、この御座敷ござしきをたつです。たつです〜。龍たつが秀句しゅうくに、たつです〜でかいたな。▲冠者かしのでかしましてござる。▲主さて何がなに云うた。▲冠者かしの犬いぬが申しますは、各おのこれにござれども、私は夜話よはなしに参るほどに、この御座敷ござしきをいぬるですと申してござる。▲主い

ぬるです。犬が秀句に、いぬるですは、でかいたな。さて何が云うた。▲冠者 猿が申しますは、各おのこれにござれども、私は内容ないやくを得ましたによつて、この御座敷ござしきをさるですと申してござる。▲主 さるです。きやつは云はうやつぢやわ。人間にんげん半分の智恵ちゑを持つたと云ふ程に、秀句しゅうくほどの事を、云ひかねはせまいが、きやつが所への内容ないやくはたれぢや。主このところわちや。▲冠者 それが、しれものでござる。▲主 さて、何が云うた。▲冠者 かいりが申しますは、おのおのお立ちなされた程に、私もこのお座敷ざしきをかいりますと申してござる。▲主 かいります。きやつが小さいなりをして、大きな者にも負けじ劣せらじと、目をしよほくとして、かいりますは、でかいたな。さて、何が云うた。▲冠者 いえ、もはやござりませぬ。▲主 まだ、何やらあつたやうなが。それく、くちなは。▲冠者 まことに、くちなは。▲主 くちなはが秀句は、さぞ、生長なまながい秀句でござらう。▲冠者 これはいかなこと。人の話で承うけたまつたれば、くちなはの秀句を、はつたと忘わすれた。なんとしたものであらう。▲主 やい、くちなはは何と云うた。▲冠者 くちなはもでかしましてござる。まづ、きりよくと輪わに

物と一曖昧に詞を濁らす也
やくたいもない
一埒いちもなし

なりまして、鎌首かまくびをもつたてまして、各おのこれにござれども、私は夜話よはなしに参るによつて、このお座敷をいぬるですと申してござる。▲主 いぬるです。くちなはが秀句に、いぬる。いぬ。これは犬いぬの秀句ぢや。くちなはの秀句を、早う云へ。▲冠者 くちなはのしうくは、物ものと。▲主 何と。▲冠者 石藏いしぐらの中へ、ぬらくですと申してござる。▲主 あの、やくたいもない。しさり居ゐる。▲冠者 はつ。▲主 えい。▲冠者 はつ。

八幡聲一人名八幡の前

二八幡聲

四人

男 烏帽子、素襖、袴、小刀、弓持
男 長袴、小刀
男 同じく
冠者 半袴、腰帶

八幡一山城

引いて一幕に應ずるため札を引取る也

▲しうと八幡の在所の者。美人の一人娘を持つた。一藝ある人を、聲にとりまうせうと、高札をあけた。▲冠者冠者るるか。▲冠者お前に。▲しうと高札について、聲のわせたらば、こちへ云へ。▲冠者畏つてござる。▲むここのあたりの者。やはたの里に、美人のひとり娘をもつた人がある。一藝ある者を聲に取らうと云うて、高札を打たれた。まづ某が引いてござる。このあたりに萬能足らうた人がある。参り、一藝習うて、聲入いたさう。何と教へてたもればよいが。これぢや。お案内も。▲男誰ぞ。どなたぞ。▲むこ某でござる。▲男何と申して来たぞ。▲むこ只今参ること、別の事でもござらぬ。八幡に、一藝ある者を聲にとらうと申して、高札がありました。某の、則ち高札を引いてござる所で、何ぞ一



はちこ弓一雀小
弓の類か

手元一手指

藝習ひに参つた。教へて下されい。▲男 そのやうに、通りがけに一藝は、習はるよものではない。▲むこ それならば、高札を立てて参らうか。▲男 引いた物を、立てに行くも面倒な事ぢや。何ぞ、ちと前かどに知つた事があればよいが。鼓は。▲むこ いやく。▲男 鞠は。▲むこ いかなく。▲男 鐵砲は。▲むこ 人のをきいてさへ、胸が躍りまする。▲男 弓は。▲むこ 弓こそちひさい時からはちこ弓の射手にて、好きでござる。▲男 いや、夫ではない。本弓の事ぢや。▲むこ 夫は手につかまへた事もござらぬ。▲男 思ひよつた。弓も貸してやらう。弓の射手になつて行かしませ。▲むこ まづ忝うござる。▲男 手元を見ませうと云うて、水鳥か、翔鳥を所望せう所で、射ても中りはせぬであらう。▲むこ 側あたりまで矢が参るまい。▲男 その時皆々笑はう。その方が、まづく笑はしますな。一首詠みまうせうと云うて、いかばかり神もうれしとおほすらん、八幡の前に鳥居立つたりと、よまませ。▲むこ いかなく、詠む事はなりません。▲男 頭字を一つ宛いうてはなるまいか。▲むこ それ、なりませう。▲男 それがしも、見物の内にまじり居て、そばから、頭字を云うてやらう。▲むこ

放生川一石清水
八幡宮の下を流る

石一首を間違

それならば、ようござつて下されい。某は早参る。▲男 心得た。▲むこ やれくうれしや、一藝習うた。早う参り聲にならう。これぢや。お案内もく。▲冠者 誰ぞ。どなたでござる。▲むこ 高札のおもてについて参つた。▲冠者 聲殿か。▲むこ なかく。▲冠者 申し、むこどののお出でござる。▲しろうと 高札の通一藝ござるか、問へ、▲冠者 畏つた。申し、一藝たざるかと申さるよ。▲むこ 弓を仕つる。▲冠者 弓を射ると仰せらるよ。▲しろうと お手際を見ごうござる。あたり近い放生川へ参れば、水鳥も翔鳥もある。お供申したいと云へ。のやそ通ふ。▲むこ なかく、おとも申しまるりて、手元を見ませう。▲冠者 なかく、おともなされませうと仰せらるよ。▲しろうと 放生川へおいでなされうと仰せらるよ。満足に存ずる。▲むこ 何がさて、参りまうせう。▲しろうと これく、あの三つまるる真中を射さしられい。▲むこ 心得ました。射て見ませう。と笑ふ。▲むこ 申し、笑ふまいく。石が浮みました。▲しろうと やあく、何とく。▲むこ 一首うかみました。▲しろうと 何ど。▲むこ いかばかり。▲しろうと 面白い。▲むこ 神けにおしやる。▲しろうと 何ぢや。▲むこ 神もうれしとおほすらん。

▲しうといかばかり神もうれしとおほすらん。▲むこやはちがはらで。▲しうと何とく。▲むこ
 やはたのまへに。▲しうと出来てござる。これく、今のあとは。▲むこ今のあとは、やはた
 のまへに。▲しうと出来てござる。これく、今のあとは。▲むこ今のあとは、やはたのまへ
 に。▲しうとそれは合點ぢや。そのあとは。▲むこ二三度も同じこ。▲しうと八幡の前にく。▲むこ胸
 龜こたく。▲しうととつとと去なしめ。

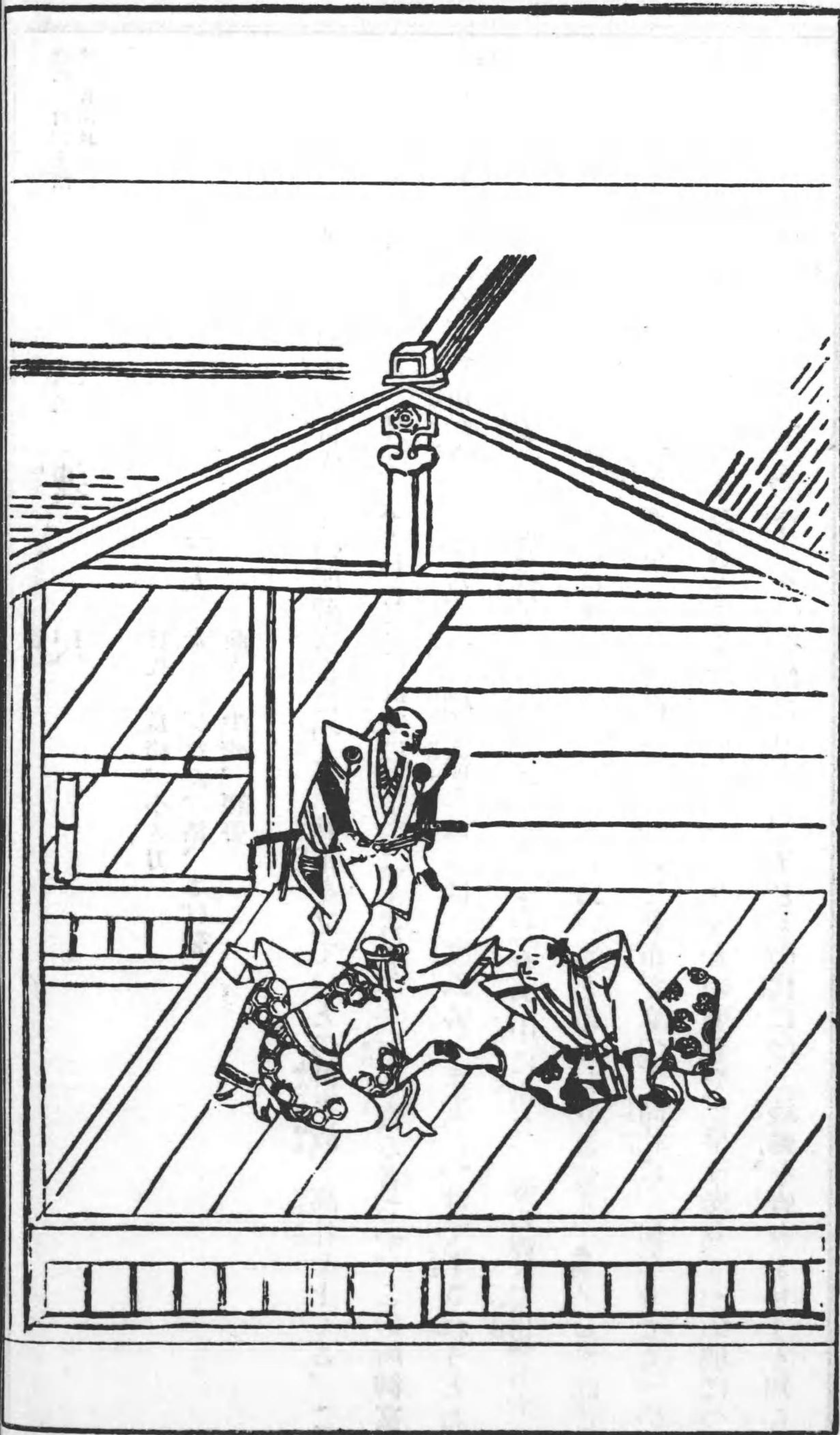
連尺一荷物を附
けて負ふ具

三連尺

三人 目代 長袴、小さ刀
 女 びなん、箔、さげ帯
 商人 半袴、腰帶

一の棚一先頭の
店

▲目代この所の目代、この所御富貴につき、新市を立ていと御事故、高札を上げる。こ
 れに打ちまうせう。▲女わらはは此邊にひとりずまひして、酒を賣る者ぢや。この所御富
 貴ゆゑ、新市が立ち申する。一の棚を領じたらば、すゑぐまで、つけて下されうとお
 ほせらるよ。妾一の棚を持ちませうと思つて、まだ夜の中に出た。参る程に市場ぢや、
 これが一の棚ぢや。これに居ませう。夜が明けぬ。ちとるねむりませう。▲商人これはこ
 の邊にすむ商人でござる。この所御富貴について新市が立つ。高札に、何なりとも一の
 棚についた者を、すゑぐまでおつけなされませうとの事ぢや。早う参り、一の棚につ
 いておきまうせう。今こそこの體なりとも、子どもの代には、綾錦を賣りませうも知ら



ぬ。これはさて、女が早う来て、一の棚についてゐる。致しやうがある。まづ、ちとはいりま
うせう。▲女 やい〜。▲商人 はあ。▲女 おぬしは、おれが棚のさきになぜ居るぞ。▲商人 目代
殿かと思つて肝つぶした。おれが一のたなについてゐる。▲女 おぬし退かぬか。引きたて
うぞ。▲商人 これは何事をするぞ。▲女 女ぢやと思つて、にくいやつ。▲目代 やい〜。兩
人は何事を云ふぞ。▲女 妾がとうから参つて、一のたなについてゐます。あの男めが、
わたくしの棚先にあとから参り、居るほどに、のけと申せば、のかぬ所で、かやうにやか
ましう申す。目代殿、きつと仰せつけられて下されませい。▲目代 あれが口をも、きいて
からの事にせう。やい〜、汝は何と。▲商人 私が夜のうちから参り、一のたなについて
ゐますれば、のけと、あの女が云ふによつて、のくまいと申す事でござる。▲目代 證據の
ない事ぢや。この上は、勝負をさして、勝つた者を一のたなに云ひ付けう。▲女 申し、女
は門開きと申して、めでたいものでござる。わらはをつけて下されい。▲目代 いや、おれ
がまゝにもならぬ。勝負をせい。やい〜、何ぞ勝負、かちの方を、一のたなにつけう。

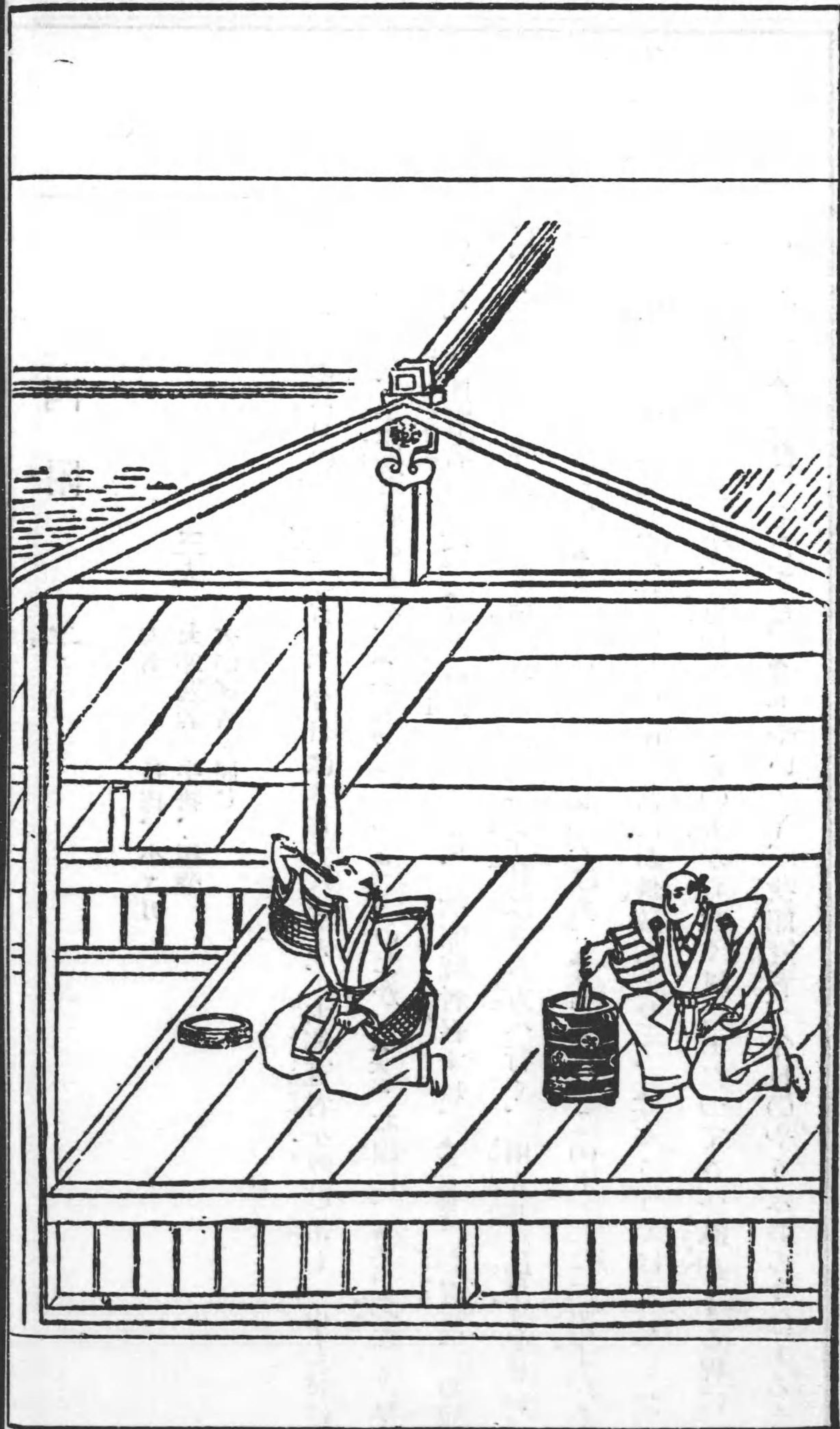
▲商人このめでたい市に、女は一のたなにつけられますまい。某をつけて下されい。▲目代
 いやく、勝負でなければならぬ。▲商人某は腕押をさせう。▲目代やいく、腕押をせう
 と云ふわ。▲女女ぢやと思つて、うで押しを申すか。妾もいたしませう。▲目代さあく、
 うでおし。兩人ながら、出てせい。▲二人心得ました。▲女勝つたぞく。▲目代やいく、
 あまりぢや。何ぞ、ま一度勝負せい。▲商人脛押をいたしませう。▲目代さあく、すねおし
 を今一度せい。▲女心得ました。▲商人かつたぞく。▲女今のは知れぬ。相撲をとりま
 せう。▲目代一段よからう。さあ、すまふを取れ。▲商人畏つた。▲女お手つ。勝つたぞく、
 ▲商人やいく、今一番とれく。追ひかけて
 けい

四附子

三人 大名 長袴、小さ刀
 太郎冠者 半袴、腰帶
 次郎冠者 同じく

▲大名このあたりの大名でござる。今日はさる方へ参る。太郎冠者を呼び出し、申し付け
 る事がある。太郎冠者あるか。▲太郎冠者はあ。▲大名ゐたか。▲太郎お前に。▲大名念なう早
 かつた。次郎冠者も呼べ。▲太郎畏つてござる。次郎冠者召すわ。▲次郎冠者心得た。お前
 に。▲大名汝等呼び出すは別の事でない。今日はさる方へ行く。兩人共に留守をせい。
 ▲冠者二人畏つてござる。▲大名それに待て。▲二人はあ。▲大名やい、このあなたに、附子があ
 る程に、さう心得。▲二人それならば、兩人共にお供致しませう。▲大名さうではない。この
 あなたに、ぶすと云うて、毒がある。この方から吹く風にあたつてさへ滅却する程に、
 さう心得。▲二人畏つてござる。▲太郎やいく、次郎冠者、今日のやうなおるすはあるま

附子一毒物也、
 ぶしとも云ひと
 りかぶとの根に
 生ず



いぞ。▲次郎をよ〜、そなたが供に行けば、みどもが留守をする。身共が供に行けば、そなたが留守をする。今日のやうな云ひあはせた留守はあるまいぞ。そりやあ。▲太郎何事ぢや。▲次郎ぶすの方から、風が来た。ことにてはなせ。▲太郎みどもは、あのぶすを見やうと思ふ。▲次郎やくたいもないことを。おけ。▲太郎あの方から吹く風が、あたらねば苦しくない。扇いでくれ。▲次郎心得た。▲太郎扇け〜。▲次郎心得た。ぬかるな。▲太郎ぬかる事ではない。さあ、紐は解いたぞ。さて、蓋をあけうほどに、扇け。▲次郎心得た。▲太郎さて、蓋をあけたぞ。身共はあの附子を見て来う。▲次郎一段とよからう。▲太郎やいやい、見て来たわ。▲次郎いか様なものぢや。▲太郎なんぢやは知らぬが、黒い物がどつみりとしてある。旨さうな物ぢやほどに、みどもは食うて見やう。▲次郎やくたいもない事を。おけ。▲太郎みどもは、ぶすに領じられたか、食ひたうてならぬ。行て食て来う。▲次郎みどもが居るからは、やる事はならぬ。▲太郎名残の袖をふりきりて、附子の側へぞあゆみ行く。▲太郎を食ふ。むよ。▲次郎やい太郎冠者。なんとした。▲太郎砂糖ぢや。▲次郎なんぢや。

どつみりとして
一どろ〜として
也
領じられたか
取付かれたか
名残の云々曲
にかゝる

牧溪和尚一宋人
範無準の弟子

大天目一茶の湯
の茶碗

砂糖ぢや。▲太郎なか〜。▲次郎どれ〜。▲太郎まづ食うてみよ。▲次郎心得た。むよ、まことに砂糖ぢや。▲太郎これを食はずまいと思つて、ぶすぢやの、毒ぢやのおしやつた。▲次郎汝ばかり食つてよいものか。▲太郎それならば、ちとやらう。▲次郎そのやうに取らずとも、ちつと取れ。▲二人さて〜うまい事かな。▲太郎ほう、よい事めさつた。頼うだお方の、ぶすぢやの、毒ぢやのおしやつたに、皆おくやつたと、頼うだお方のお歸りなされたらば申し上げる。▲次郎みどもが、おけと云うたに開けた。某がまつすぐに、申し上げる。▲太郎やい〜、これはじやれ事ぢや。この言ひわけは、あの掛物をやぶればよい。▲次郎心得た。さらり〜。▲太郎よい事めさつた。あれは頼うだお方の、牧溪和尚の墨繪の観音で、御秘藏なされたものを、あの様にめさつた。お歸りなされたら、きつと申し上げる。▲次郎破れと云うたによつて、やぶつた。みどもが申し上げる。▲太郎やいやい、これもじやれ事ぢや。▲次郎さて、この言ひわけどもは、何とするぞ。▲太郎この大天目を破れば、いひわけが立つ。▲次郎いかな〜、また迷惑をさせうで。▲太郎身共も、手

わどれ〜わごり
上に同じ汝也

をかける。そちらを持って。▲次郎心得た。▲太郎ぐわらり。▲次郎ちん。▲太郎さて、おかへりなされたらば、泣いて居よ。▲次郎泣けばよいか。▲大名只今罷歸る。やい〜、もどつたぞ。▲二人泣け〜。▲大名心許ないが、何事ぢや。▲太郎次郎冠者申し上げ。▲次郎わこれ、申し上げさせませ。▲太郎お留守を大事と存じて、次郎冠者と相撲をとりましてござれば、次郎冠者は手とりでござり、私が小股をとつてこかしますを、こけまいと存じて、掛物に取付いたれば、あのやうになりました。▲大名これはいかな事。あれは、みどもが秘藏の観音を、あのやうにし居つた。▲次郎かへしさに、天目の上へ投げられました。あのやうに微塵になりました。▲大名これはいかな事。おのれをなんとしたものであらうぞ。▲太郎かやうに大事の御道具を損ひまして、生けてはおかせられまいと存じて、附子を食べて死なうと存じて、下されたれども、まだ死にませぬ。▲大名おのれ等、今のまに滅却せうぞ。▲太郎一口食へども、まだ死なす。▲次郎二口食へども、死なれもせず。▲太郎三口四口。▲次郎五口六くち。▲二人十口あまり、皆になるまで食うたれども、死なれぬ命、めで

下されたれども
一食したれども
の意
一口食へども云
云一曲にかゝる

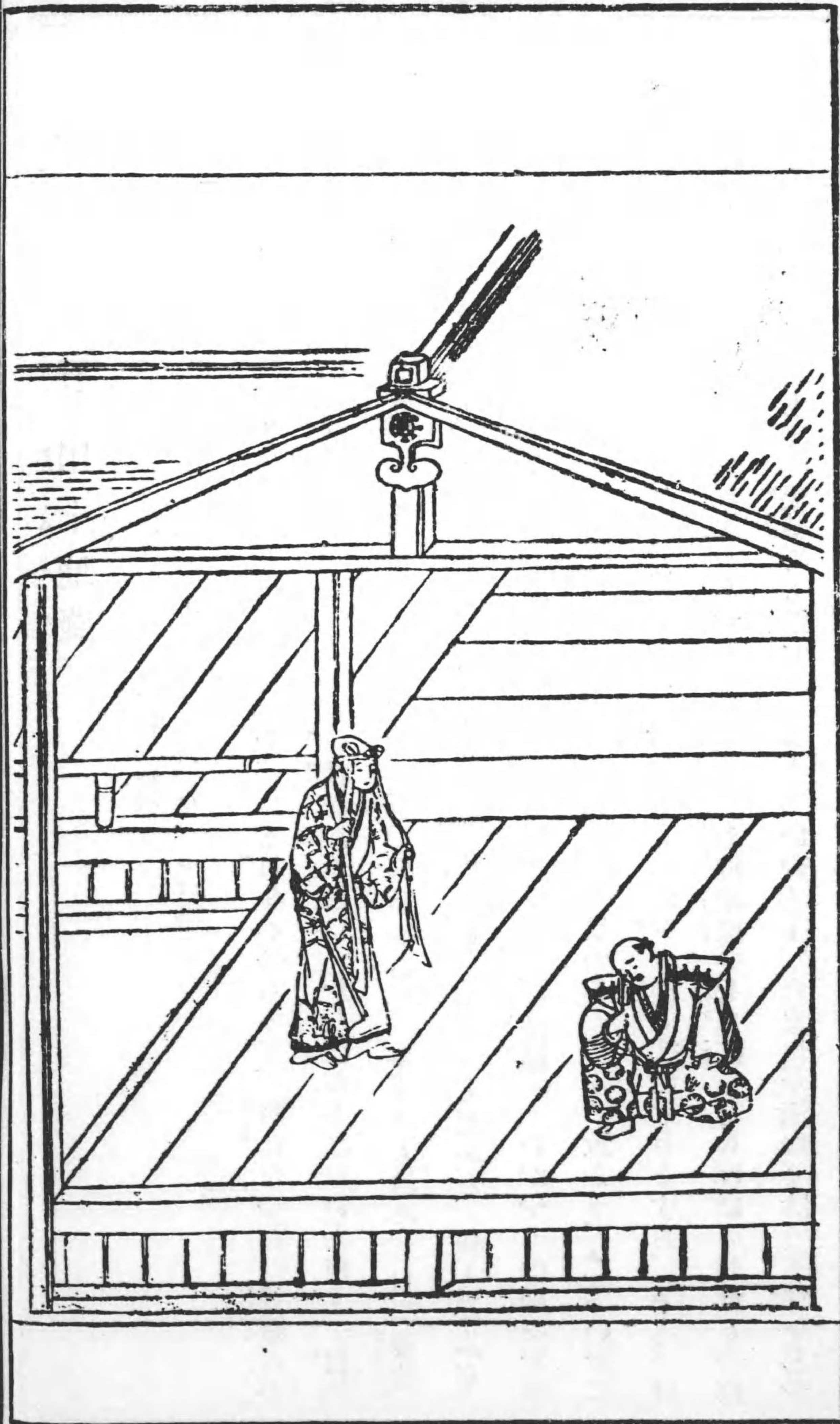
たさよ。なんほう。▲大名やい、そこなやつ。▲次郎はあ。▲太郎これは何としたものであらう。▲大名まだ、おのれはそれに居る。▲三人ゆるさつしやれく。▲大名やるまいぞ、く。

五 川上地藏

二人

盲 半袴、腰帶
女房 びなん、箔、さげ帶

▲目くら これは、このあたりに住む者ぢや。ふと目をわづらうて、盲になつた。迷惑な事ぢや。川上の地藏へ、いかやうの事も祈請をかくるに、かなはぬ事はないと申す。目の願に参らう。女ども、ゐるか。▲女房 何事でおぢやるぞ。▲目くら もはや、目の養生色々とすれども、よくならぬ。この上は、神佛を頼んで見うと思ふが、何と思ふぞ。▲女房 いかにも、神佛次第が、好うおぢやらう。▲目くら 川上の地藏へ、いかやうの願をかけてもかなふと、人々のおしやる程に、七日籠つて、目のあくやうに致さう。▲女房 いかにもく、尤でござる。こなたの目の見えぬ事が、朝夕、妾も苦になります。▲目くら 目が見えねば、死んだがましぢや。▲女房 まづ、お地藏様へ七日籠らせられい。おれもつれだつて籠りまして、湯茶でも進ぜう。▲目くら いやく、そなたが籠つては、子供をしや



うやうがない。留守してたもれ。▲女房まことに、子供の爲ぢや。留守致さう。▲目くら追付まる。やがて下向いたさうぞ。▲女房めでたく目があいて、戻らせられい。待ちまするぞ。さらばく。▲目くら女房どもは、殊の外格氣深い者で、一日も手ばなれしはせまいと思つたが、嬉しや、合點して、籠れと云ふ。急いで参り、祈誓かけて見まうせう。おれが因果なれば、是非もなし。わづらひならば、お地藏のおかけで、目のあく事もあらう。夥しい参りさうな。これぢや。拜みませう。さらば籠りませう。はあく、あら尊や。あらたに御靈夢がござつた。はや目があきました。かたじけない。うれしや、うれしや。内々聞き及うだより、あらたなお地藏様ぢや。南無地藏く。かたじけない。女房共も、満足に思ひまうせう。子供もさぞく喜ぶであらう。▲女房こちの人は目が見えぬところで、川上のお地藏様へ、一七日こもると申して、参られた。心もとなう存ずる。見舞ひませう。何と、目がお地藏様のお蔭であけかし。これはく、はや下向さしらるよ。▲目くらそなたはどこへ。▲女房きづかひに思つて見舞に参る。▲目くらようこそわせたれ。

わせたれ—わせは来るの意もはずの略也

お見やれ。目があいて、昔むかしよりよい目になつたわ。▲女房やれく、嬉うれしやく、めでた
い事や。▲目くらさればく、お地藏ぢざうさま様の、あらたな御夢想ごむさうで、そのまゝ目が明あきらかになつ
ておぢやる。▲女房そなたは五六日も断食だんじきをしておぢやると聞いたによつて、いとしい
としいや、瘡かさせ衰おとろへて、ひだるからうと思つたが、殊ことの外色ほかいろもよし、つやくして戻つたが、
合點がてんが参らぬ。▲目くら目のこの如ごとくに、明あきらかになる程の事ぢやとこゝろで、ひだるうも少せ
しもなし。なるほど、ひふもよいと思はしませ。▲女房いやく、只事ただごとではない。がてんが
参らぬ。▲目くら神佛かみほとけのおかけぢやとこゝろで、たゞ事ではない筈ぢや。▲女房おのれ、知らぬ
と思ふか。わ男おとこめ、内々聞き及うだ。誰たそ、酒さけや肴さかな、色々の物ものを持つて行いて馳走ちそうしてが
あらう。▲目くらそなたより外に、誰たれが見舞みまひまうせうぞ。わけもない事いしますな。
▲女房腹はらだちやく。おれに隠かくし居をつて、さいくさいく寄合よりのあうて、知しつたく。にくいやつ。
はらだちやく。▲目くらさてもく、無理むりな事いふ女房ぢや。弓矢八幡ゆみや、わき心こころはない
ぞ。▲女房いやの空誓文そらせいもんや。ありのまゝに、隠かくさずとも、云いひ居をるまいか。▲目くらはお

空誓文一箇の寄約

目 さら目一うその

はあ、又目めがつぶるよ。かなしやく。▲女房おのれ、つぶれもせぬ目をつぶしたと云う
て、だまされと事ではないぞ。▲目くらだまさう事ではない。かなしや、眞實しんじつつぶれたわ。
▲女房さら目めをつぶすか。腹の立つことやく。何なにがつぶれうぞ。▲目くらいやく、どこ
がどことも見えぬぞ。ゆるせく。▲女房どこへ。やるまいぞく。▲目くらゆるせく。

六 盆 山

二人 源藏 牛袴、腰帶
權兵 長袴、小刀、太刀持

盆山一箱庭の類
しわい人一苦齋
なる人

作事一造作

壺の内一腐のこ
と

▲源藏是は、このあたりに住居致す者でござる。某存じた方に、盆山をあまた持つてゐらるよ。一つ所望致せども、しわい人でくれられぬ。あまりほしうござる程に、今晚忍び入つて、案内無しに取つて参らうと存する。やあさて、しわい人でござる。あの澤山な盆山の内を、一つなどくれられたとあつて、別の事もござるまいに、さてもく、しわい人でござる。や 参る程にこれぢや。これはいかなこと。此中作事を致されたと見え、中々厳しうて、はいられぬ。裏へ廻つて見やうと存する。はあよ 表の屋作とは違うて、粗相な事でござる。この葦垣をさへ破れば、あなたは壺の内ぢや。まづ、葦垣を破らう。ざくく、めりくく。さてもく、鳴つたりく。何と、人は聞かなかんだけぢやまで。いやく、人音もせぬ。さらばはいらう。さて、盆山はどこにある事ぢやぞ。や。

